



Title	古墳時代政権交替論の考古学的再検討
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/13079
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

古墳時代政権交替論の考古学的再検討

(課題番号 : 20320122)

平成20～22年度科学研究費補助金
基盤研究（B）研究成果報告書

2011年3月

研究代表者 福永伸哉
(大阪大学大学院文学研究科教授)

大阪大学大学院文学研究科

例　　言

本書は、科学研究費補助金(基盤研究(B))の交付を受けて実施した研究の成果報告書である。研究課題、組織、研究経費、成果等は以下の通りである。

1. 研究課題名：古墳時代政権交替論の考古学的再検討

2. 課題番号：20320122

3. 研究期間：平成20年度～平成22年度

4. 研究組織：

研究代表者 福永伸哉（大阪大学文学研究科・教授）

研究分担者 高橋照彦（大阪大学文学研究科・准教授）

〃 寺前直人（大阪大学文学研究科・助教）

〃 清家 章（高知大学教育研究部人文社会科学系・教授）

研究協力者 都出比呂志（大阪大学名誉教授）

〃 伊藤聖浩（羽曳野市教育委員会教育総務課）

〃 禹在柄（韓国忠南대학교考古学科・教授）

〃 朴天秀（韓国慶北대학교考古人類学科・教授）

〃 ロラン・ネスプルス（フランス東洋言語文明学院・准教授）

このほかに、大阪大学大学院生、学部生、関連地域の考古学・文化財専門家が研究に参加した。

5. 研究経費：

2008 (H20) 年度　直接経費4,000,000円　間接経費1,200,000円

2009 (H21) 年度　直接経費4,400,000円　間接経費1,320,000円

2010 (H22) 年度　直接経費3,000,000円　間接経費 900,000円

6. 研究成果：本書および本書3～4頁に記載。なお、本書第7章には、金澤雄太氏（大阪大学文学研究科博士前期課程）による富田林市真名井古墳の円筒埴輪分析成果も収載した。

古墳時代政権交替論の考古学的再検討

目 次

例 言

1. 研究の目的と経過……………	福永伸哉	1
2. 古墳時代政権交替と畿内の地域関係……………	福永伸哉	5
3. 猪名川流域における前期古墳の動向……………	寺前直人	19
4. 首長系譜変動の諸画期と南四国の古墳……………	清家 章	29
5. 古墳時代政権交替論をめぐる二、三の論点 —河内政権論を中心に—……………	高橋照彦	43
6. 古市古墳群の形成と居住域の展開……………	伊藤聖浩	63
7. 富田林市真名井古墳出土埴輪の特徴と編年の位置……………	金澤雄太	87
8. 研究総括と展望……………	福永伸哉	101

〈付載 1〉『長尾山古墳発掘調査報告書』(2010年3月刊行)

〈付載 2〉『長尾山古墳第6次・第7次発掘調査概報』(2011年3月刊行)

1. 研究の目的と経過

研究のねらい 本研究の目的は、古墳時代研究における重要な論点の一つとなってきた「政権交替論」について、おもに1990年代以降の新出資料の分析と効果的なフィールドワークを結合させることによって全面的な再検討を行い、政治変動期に焦点をあてた最新の古墳時代政治史を提示することである。さらに、こうした特徴が認められる古墳時代を国家形成論上からいかにとらえるかという理論研究や、東アジアや欧米の国家形成期との比較研究についても展望を示し、次なるプロジェクトとして構想している「墳墓と社会関係の国際比較研究」への有効な布石とすることも、副次的ではあるが本研究の展望の一つである。

古墳時代政治史については、記紀の歴史認識の強要から解放された第二次大戦後間もなくして、その根幹にかかる重要な二つの仮説が提起された。江上波夫氏の「騎馬民族征服王朝説」(江上ほか1949「日本民族－文化の源流と日本国家の形成」対談録『民族学研究』第13巻3号)、水野祐氏の「王朝交替説」(水野1954『増訂日本古代王朝史論序説』小宮山書店)であった。これらは、敗戦以前の「万世一系」史觀に対する強烈なアンチテーゼとして大きな反響を呼んだが、考古学の資料や分析方法がなお不十分な段階にあっては、素朴な考古学的事象や『記紀』の不十分な情報に主要な論拠を置かざるをえないという制約もまた避けがたいものであった。

その後、古墳構造・築造時期・副葬品の性格などにかんする考古学研究法が進歩する中で、はやくも1960年代初めには、近藤義郎らによる岡山県月の輪古墳の調査研究の中で、地域内の古墳築造動向に着目して首長系譜を認識・解明し、その推移から古墳時代史を通時に復元する手法が開拓された(近藤編1960『月の輪古墳』同刊行会)。60年代後半から70年代にかけては畿内の大王墳や地方の首長墳などの変化から、王權内部の政治変動や王權と地方首長の力関係を読みとろうとする先駆的な研究が現れた(白石太一郎1969「畿内における大型古墳群の動向」『考古学研究』第16巻第1号、小野山節1970「5世紀における古墳の規制」『考古学研究』第16巻第3号、甘粕健1970「武藏国造の反乱」『古代の日本』7 角川書店)。80年代には、都出比呂志氏が京都府乙訓地域の古墳の良質なケーススタディを基礎に、中央と地方の首長系譜にみられる継続と断絶のパターンが連動していることを指摘し、5世紀前葉、5世紀後葉、6世紀前葉の3回にわたって地方を巻き込むような列島規模での政治変動が生じたという見通しを示した(都出1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』史学篇第22号 大阪大学)。

80年代頃までは、示唆に富む文献史料を用いた研究に対して、考古資料からのアプローチはなお資料や研究状況の点で発展途上という感が強かった。しかし、その後1990～2000年代にかけて、古墳時代にかかる新出資料の増大と個別研究の進展によって本テーマを取りまく学問的状況は大きく変化している。具体的には、(1)古墳調査事例の増加、(2)韓国における三国時代遺跡調査の進展、(3)副葬品の編年や系統にかんする研究の進展、(4)前方後円墳成立過程にかんする資料の増加、などである。考古学的方法による多方面からの検討を重ね合わせてより蓋然性の高い像を結ばせることが、以前にもまして可能になりつつあるといつてもよからう。

こうした認識に立って、本研究においては、新出資料と新たに実施するフィールド調査成果に照らして政権交替論の当否を考古学的に検討し、資料上の「変革期」を重視した古墳時代政治史をダイナミックに復元することをおもなねらいとして、次の5つの具体的なテーマを設定した。

(1) 墳墓要素の分析による古墳時代政治変動期の抽出

前方後円墳成立期(3世紀中葉)、古墳時代前期後葉(4世紀後葉)、古墳時代中期後葉(5世紀後葉)、古墳時代後期前葉(6世紀前葉)の4時期について、各地の有力古墳の墳丘・埴輪・副葬品などを分析し、変動期としての理解の当否を検討する。

(2) 地域首長系譜にかんする良好なケーススタディの提示

実証的な議論を可能とする新たな地域事例研究を実施。畿内地域としては兵庫県猪名川流域、畿内隣接地域としては四国を対象として、首長墳築造動向の推移とその背景を解明する。

(3) 古市古墳群成立過程の復元

「河内政権論」の論争に深くかかわる大阪府古市古墳群について、古墳群域内の集落遺跡の新たな分析を行い、当古墳群の勢力母体を解明するとともに、「河内政権論」の現状と展望を示す。

(4) 政治変動期の国際的背景の解明

近年の型式研究・編年研究の成果をふまえた大陸文物の流入状況の分析、朝鮮半島南部における倭系遺物の登場契機の考察などにより、古墳時代政治変動期の国際的背景を解明する。

(5) 海外の比較可能な事例の把握

エリート墳墓の築造動向と地域勢力の関係についての海外の比較事例の把握を行い、本研究を基礎として次期プロジェクトとして計画している墳墓と社会関係の国際比較研究にかんする展望を得る。

研究組織および研究経費 本研究の組織および経費は以下の通りである。

研究代表者 福永伸哉（大阪大学文学研究科・教授）

研究分担者 高橋照彦（大阪大学文学研究科・准教授）

〃 寺前直人（大阪大学文学研究科・助教）

〃 清家 章（高知大学教育研究部人文社会科学系・教授）

研究協力者 都出比呂志（大阪大学名誉教授）

〃 伊藤聖浩（羽曳野市教育委員会教育総務課）

〃 禹 在柄（韓国忠南大学校考古学科・教授）

〃 朴天秀（韓国慶北大学校考古人類学科・教授）

〃 ロラン・ネスブルス（フランス東洋言語文明学院・准教授）

このほかに、大阪大学大学院生、学部生、関連地域の考古学・文化財専門家が研究に参加した。

研究経費 2008 (H20) 年度 直接経費4,000,000円 間接経費1,200,000円

2009 (H21) 年度 直接経費4,400,000円 間接経費1,320,000円

2010 (H22) 年度 直接経費3,000,000円 間接経費 900,000円

研究経過 本研究は、研究代表者・分担者がそれぞれ全体の目的をふまえて行うテーマ研究、発掘調査や内外の墳墓遺跡の現地踏査などのフィールド調査、それぞれの成果について討論する研究集会という3つの柱を立てて行った。

テーマ研究は、上述した(1)～(5)にそくして、(1)を福永、(2)を寺前、(3)を高橋、伊藤がおもに担当し、(4)(5)は海外の研究協力者を含めた全員で討論した。

フィールド調査の中心作業としては、テーマ(2)については兵庫県南東部～大阪府北西部の「猪名川流域」の地域首長系譜分析を計画し、具体的には宝塚市長尾山古墳の3年間にわたる発掘調査、同万籣山古墳の現地踏査と採集埴輪の整理分析を行った。また、テーマ(3)に関連して、富田林市真名井古墳出土埴輪の整理分析を行った。テーマ(4)(5)についても海外の墳墓遺跡の踏査と研究現状の把握を行った。なお、長尾山古墳の発掘調査の様子は毎日インターネットで発信するとともに、地元教

育委員会と合同で市民向けの現地説明会や歴史講座を開催するなどして、研究成果を社会的に活用する取り組みも積極的に行った。

研究集会は、H20年度5回、H21年度4回、H22年度3回をそれぞれ実施した。このうち、H20年度には韓国、H21年度にはフランス、韓国、H22年度にはイギリスの研究者を招き、日本の古墳時代史や海外事例との比較研究などについて、討論する機会を持った。また、研究集会では研究組織メンバーだけでなく大学院生、学部生の報告も行い、本プロジェクトを教育機会としても活用できるようにはかった。

論文・図書・口頭発表など 3年間の研究期間において、論文・図書・口頭発表などの形で、代表者および分担者が公表した本研究に関連する研究成果のうち、おもなものは以下の通りである。

〈論文・図書〉

- ・福永伸哉2008「大阪平野における3世紀の首長墓と地域関係」『待兼山論叢』第42号 史学篇 大阪大学文学研究科、1-26頁
- ・福永伸哉2008「青銅鏡の政治性萌芽」『弥生時代の考古学』7、同成社、112-126頁
- ・福永伸哉2008「考古学から見た古墳時代河内政権論」『適塾』41、適塾記念会、21-25頁
- ・福永伸哉(編)2008『長尾山古墳第1次発掘調査概報』大阪大学文学研究科考古学研究室、全34頁
- ・福永伸哉(編)2009『長尾山古墳第2次・第3次発掘調査概報』大阪大学文学研究科考古学研究室、全26頁
- ・福永伸哉2009「古墳時代」『京丹後市史資料編 京丹後市の考古資料』京丹後市、9-11頁
- ・福永伸哉2009「考古学の新しい成果と邪馬台国論争」『大美和』117、大神神社、8-13頁
- ・福永伸哉(編)2010『長尾山古墳発掘調査報告書』大阪大学文学研究科、全57頁
- ・福永伸哉 2010「6世紀の東アジア情勢と継体政権の政治戦略」『高島古代史フォーラム記録集』高島市教育委員会、1-12頁
- ・福永伸哉2010「同范鏡論・伝世鏡論の今日的意義について」『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学考古学研究室、327-340頁
- ・福永伸哉2010「青銅器から見た古墳成立期の太平洋ルート」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文社会学系、55-70頁
- ・福永伸哉2010「銅鏡の政治利用と古墳出現」『日本考古学協会2010年度兵庫大会研究発表資料集』日本考古学協会2010年度兵庫大会実行委員会、153-166頁
- ・福永伸哉2011「古墳時代政権交替と畿内の地域関係」(本書所収)、5-18頁
- ・福永伸哉(編)2011『長尾山古墳第6次・第7次発掘調査概報』大阪大学文学研究科考古学研究室、全44頁
- ・高橋照彦2008「終末期古墳と薄葬令—変化する埋葬の文化と律令国家形成への道程」『大化改新と古代国家誕生』新人物往来社、170-175頁
- ・高橋照彦2009「古代」『京丹後市史資料編 京丹後市の考古資料』京丹後市、12-13頁
- ・高橋照彦2010「天皇陵」における前方後円墳の終焉』『歴史のなかの天皇陵』思文閣出版、46-50頁
- ・高橋照彦2010(共著)『Jr.日本の歴史 国のなりたち』小学館、137-292頁
- ・高橋照彦2011「古墳時代政権交替論をめぐる二、三の論点—河内政権論を中心に—」(本書所収)、43-62頁
- ・寺前直人2009「古墳時代前期における古墳編年の変遷」『前期古墳の変化と画期』関西例会160回シ

ンポジウム発表要旨集、153-167頁

- ・寺前直人2010（共著）『Jr. 日本の歴史 国のなりたち』小学館、81-136頁
- ・寺前直人2011「猪名川流域における前期古墳の動向」（本書所収）、19-28頁
- ・寺前直人2010『武器と弥生社会』大阪大学出版会、全345頁
- ・清家 章2008「土佐山田における古墳築造と大元神社古墳」『大元神社古墳発掘調査報告書一総括編一』高知大学人文学部、37-46頁
- ・清家 章2009「古墳時代における父系化の過程」『考古学研究』第56巻第3号、55-70頁
- ・清家 章2010『古墳時代の埋葬原理と親族構造』大阪大学出版会、全297頁
- ・清家 章2010「古墳時代集団墓における木棺と石棺」『待兼山考古学論集II』大阪大学考古学研究室、293-304頁
- ・清家 章2010「横穴式石室にみる南四国太平洋沿岸地域の関係」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係』高知大学人文社会科学系、131-143頁
- ・清家 章2010「古墳における棺と棺材の選択」『日本考古学協会2010年度兵庫大会研究発表資料集』日本考古学協会2010年度兵庫大会実行委員会、359-364頁
- ・清家章2011「首長系譜変動の諸画期と南四国の古墳」（本書所収）、29-42頁

〈口頭発表〉

- ・福永伸哉「3世紀摂河泉の首長墓の動態」（二上山博物館シンポジウム「邪馬台国時代の摂河泉と大和」）、2008.7.21、香芝市二上山博物館
- ・福永伸哉「6世紀の東アジア情勢と繼体政権の政治戦略」（高島市古代史フォーラム「繼体天皇と田中古墳群」）、2008.11.29、高島市藤樹の里文化芸術会館
- ・福永伸哉「日本における弥生時代・古墳時代の国家形成論」（全北大学校BK21事業団海外留学招請講義）、2008.11.21、韓国全北大学校
- ・Shinya Fukunaga, "Significance of 'Triangular-Rimmed Mirrors' in State Formation in Japan" Harvard East Asian Archaeology Seminar, 2009.11.2, Harvard University
- ・福永伸哉「銅鏡の政治利用と古墳出現」（日本考古学協会2010年度大会）、2010.10.17、播磨町中央公民館大ホール
- ・福永伸哉「5世紀のヤマト政権と北摂」（豊中歴史同好会20周年記念シンポジウム「5世紀のヤマト政権を探る」）、2009.1.10、すてっぷホール
- ・福永伸哉「文様および鉢孔形態からみた三角縁神獣鏡」（保存修復科学センター研究会「三角縁神獣鏡の謎に迫る——材料・技法・製作地——」）、2008.6.20、東京文化財研究所
- ・高橋照彦「考古資料からみた律令社会の成立過程とその変容—「大化薄葬令」の再検討を中心にして」（日本史研究会2008年度大会）、2008.10.11、花園大学
- ・寺前直人「摂津からみた古墳時代王権の変遷」（私立大学学術研究高度化推進事業「日本古代文化における文字・図像・伝承と宗教の総合的研究」第6回公開研究会）、2009.2.28、明治大学
- ・清家 章「土佐における後期・終末期古墳の立地と選地」（第12回高知考古学研究会）、2011.1.22、高知県文化財団埋蔵文化財センター
- ・清家 章「南四国の様相 前期古墳非築造エリアの評価をめぐって」（徳島文理大学比較文化研究所研究会「古墳時代前期の四国島」）、2011.2.12-13、徳島文理大学

（福永伸哉）

2. 古墳時代政権交替と畿内の地域関係

福永伸哉

1 はじめに

3世紀半ばに始まり、およそ350年間にわたった前方後円墳の時代。この間の細別時期ごとの最大規模前方後円墳は、つねに大和、河内（後の和泉を含む）、摂津のエリア、すなわち後の畿内地域に存在している。古墳が被葬者の政治的、社会的地位を反映する墳墓記念物であるという立場に立てば、前方後円墳を共有する東北から南九州までの広い地域における「盟主権」が一貫して畿内地域勢力のもとにあったと理解できるのである。これだけ長期にわたって盟主権を保持した權力基盤やそのメカニズムについては、それ自体が重要な研究課題ではある。

いっぽう、畿内地域の内部に目を転じれば、最大規模前方後円墳の築造地は大局的には前期が大和盆地東南部、中期が河内平野、後期前半に摂津淀川流域、後期後半に大和盆地南部へと移動する現象が認められる。こうした最大規模前方後円墳の移動現象の背後に、それを築造した地域勢力の盛衰や浮沈を読みとるのか、あるいは大和勢力の一貫した霸権のもとで墳墓造営地のみが移動したように見えるだけなのかという点は、古墳時代の政治構造や政治史の理解の根幹にもかかわる問題である。

古墳時代政治史のダイナミックな議論の出発点となったのは、終戦後、記紀の歴史認識の強要から解放されて間もなく江上波夫が提起した「騎馬民族征服王朝説」であったが、その後は水野祐の「王朝交替説」（水野1954）の提唱を嚆矢として文献史研究者の側が議論を活発にリードし、多くの発言をしてきた⁽¹⁾。考古学研究者の側からは、大和が一貫して主導権を維持していたという立場から近藤義郎が、畿内地域の中で政治的主導権が変動したと見る立場から白石太一郎、都出比呂志らが積極的に議論に参画したが、こうした問題にかかわる発掘調査成果の情報がなお少なかった1980年代頃までは、古墳時代研究の大きなテーマとして広範な議論を展開するにはいささかの資料的制約が伴っていたといえよう（近藤1983、白石1969、都出1983）。

しかし、この20年あまりの発掘調査成果の蓄積を基礎として、遺物の型式や分布、古墳の築造動向、暦年代などに関する研究が著しく活発化した。さらに、韓国における調査研究の急速な進展の中で、三国時代の日韓交渉の実態が考古資料から具体的に追求できるようになってきたことも大きな状況変化といえる。いまや考古学的なアプローチによる古墳時代政治史の体系的な仮説提示が十分に可能な段階に至っているといつても過言ではない。小論ではその作業の一環として、中央政権たる畿内政権の内部で生じた勢力間の盛衰について、近年の資料を踏まえて通時的に整理してみよう。

2 古墳時代開始期の地域関係

筆者は、古墳時代の開始を画する指標として、弥生墳丘墓からは隔絶した規模となり、その後の大王墓の規模のスタンダードともなった桜井市箸墓古墳の築造を重視しており、それは布留式最古段階の250年代頃のことであったという理解に立つ。ほぼ同時期に認められる現象としては、三角縁神獣鏡の登場（副葬開始）、竪穴式石室と割竹形木棺という首長用埋葬施設の定式化などがあげられよう。

古墳出現期の調査研究における近年の成果として、弥生終末期（庄内式期）の有力者の動向や畿内の地域関係についての見通しが得られるようになってきたことは大きな意味を持っている。

画文帶神獸鏡と三角縁神獸鏡の関係 巨大な突線鈕式銅鐸や広形銅矛など、地域の弥生社会の伝統を引く大型青銅器が弥生後期の内に生産を停止することは、北部九州、中部瀬戸内、山陰、畿内、東海のそれぞれが独自のシンボルを立てて対峙するような勢力割拠型の地域関係が大きく変化し、広範囲の倭人社会を覆う地域統合が成立したことを示唆している。

こうした新たな地域関係が成立した弥生終末期においては、各地で有力者の墳墓が顕在化し、副葬品を持ったり主丘部に突出部を付すといった同様の構造を志向する兆しが認められる。倭人社会の有力者たちが共通の方式によってみずからの階層的位置を示そうとする動きの表れであろう。

統合後の有力者たちが地位表示のために重視したものは、個人所有の威信財となったさまざまな青銅器である。このうち最も重要な価値を与えられていたと思われるは中国鏡、なかんずく神獸鏡の類である。神獸鏡は前期古墳からの出土例が多いが、桜井市ホケノ山墳墓での集積状況が示すように、弥生終末期段階では画文帶神獸鏡が最も重視されていた神獸鏡である可能性が高い。そして、画文帶神獸鏡の分布が畿内地域、とりわけ大和盆地東南部に厚いことから、弥生終末期にこの地域に画文帶神獸鏡を多数集積し、それをを利用して各地の有力者と政治関係を取り結ぶような中央性のある政治権力が発生したことを読みとることができよう。

日本列島に流入した画文帶神獸鏡は、型式的特徴から見て3世紀前葉のものが主体を占めると考えられる（福永2001）。この役割を受け継いだのが三角縁神獸鏡である。三角縁神獸鏡には最古段階のものとして島根県神原神社古墳出土の景初三年（239）鏡があり、この最古段階の三角縁神獸鏡の内区図文のモデルとなったのが画文帶同向式神獸鏡であることから見て、画文帶神獸鏡との基本的な先后関係はほぼ明らかといえる。三角縁神獸鏡は、239年の卑弥呼朝貢を契機として華北王朝からこれを独占的に入手するようになった畿内政権が各地の系列豪族に分配した政治的な威信財であり、前方後円墳が成立する古墳時代初頭から副葬品に加わるものである。

以上の理解に立てば、畿内各地の画文帶神獸鏡と三角縁神獸鏡の分布を比較することによって、前方後円墳成立をはさむ時期の畿内地域内部の地域関係がどのように展開したかを解明するアプローチが開けるのである⁽²⁾。

神獸鏡の地域分布の3類型 表1は、畿内のいくつかの地域の中で画文帶神獸鏡と三角縁神獸鏡の分布に特徴的なあり方が認められる地域を選んで、その状況を示したものである。これを見ると、地域における両鏡の数量的な推移に3つのパターンが見られることに気づく⁽³⁾。

まず、画文帶神獸鏡が潤沢にもたらされている上に、舶載三角縁神獸鏡の各段階のものも引き続き入手できている地域で、兵庫県南部の六甲南麓地域が好例である。ここでは、画文帶神獸鏡が5古墳から6面出土しており、弥生終末期段階では中央政権からそうした銅鏡の分配を受けるべき地域として位置づけられていたことがわかる。さらに、三角縁神獸鏡段階には舶載A段階からD段階までのものが継続的にもたらされており、画文帶神獸鏡をさらにしぶしぶ数量の銅鏡を入手している。このことは、前方後円墳出現期をはさむ弥生終末期から古墳初頭にかけて、中央政権との関係が継続して発展したことを見ている。ここでは「発展型」と呼称しておこう。

次にあげられるのが、画文帶神獸鏡は不在かわずかであるのに対して、三角縁神獸鏡段階になると入手量が急増する地域で、大阪北部淀川右岸の摂津三島地域が典型例である。この地域では、未盗掘で副葬鏡の内容が判明した事例がかなりあるにもかかわらず、画文帶神獸鏡はいまだ認められない。いっぽう三角縁神獸鏡は対照的に多く、舶載A段階から倣製III段階までとぎれることなく出土してい

表1 神獸鏡の地域分布

地域	古墳名	後漢末期の鏡 (3C前葉)	舶載三角縁神獸鏡・魏晋鏡 (3C中葉～末)	倣製三角縁神獸鏡 (4C前葉～後葉)	地域型
中 ・ 南 河 内	東大阪市・石切剣箭神社(伝)	画文帶求心式神獸鏡	斜縁二神二獸鏡 斜縁二神二獸鏡 斜縁二神四獸鏡 舶B・獸文帶四神四獸鏡 舶C・唐草文帶二神二獸鏡 舶C・唐草文帶二神二獸鏡		
	東大阪市・池島福万寺遺跡	画文帶神獸鏡(鏡片)		倣II・獸文帶三神三獸鏡	
	八尾市・矢作神社境内(伝)				
	柏原市・国分茶臼山古墳		舶B・新作徐州銘四神四獸鏡 舶C・吾作四神二獸鏡		
	柏原市・茶臼塚古墳		斜縁二神二獸鏡	倣I・獸文帶三神三獸鏡	
	柏原市・又ヶ谷北塚古墳			倣III・吾作三神三獸鏡 倣III・吾作三神三獸鏡	停滞型
	柏原市・玉手山6号墳	画文帶神獸鏡	斜縁二神四獸鏡 斜縁二神四獸鏡		
	藤井寺市・津堂城山古墳				
	藤井寺市・珠金塚古墳	画文帶環状乳神獸鏡			
	羽曳野市・庭鳥塚古墳		舶B・吾作四神四獸鏡	倣I・唐草文帶三神三獸鏡 倣I・獸文帶三神三獸鏡 倣I・獸文帶三神三獸鏡 倣I・獸文帶三神三獸鏡	
和 泉	羽曳野市・壺井御旅山古墳				
	富田林市・真名井古墳	画文帶神獸鏡	舶D・獸文帶三神三獸鏡		
摂 津 三 島	河南町・寛弘寺10号墳	半円方形帶神獸鏡			
	和泉市・和泉黄金塚古墳	画文帶同向式神獸鏡 画文帶環狀乳神獸鏡 画文帶環狀乳神獸鏡	魏・景初三年画文帶神獸鏡 舶B・波文帶盤龍鏡 斜縁二神二獸鏡		停滞型
	岸和田市・風吹山古墳	画文帶神獸鏡			
	高槻市・安満宮山古墳		舶A・吾作四神四獸鏡 舶B・獸文帶四神四獸鏡 魏・青龍三年方格規矩四神鏡 魏・半円方形帶同向式神獸鏡 斜縁二神二獸鏡		
	高槻市・關鶴山古墳		舶B・櫛齒文帶四神四獸鏡? 舶B・文様帶四神四獸鏡?		
	高槻市・弁天山C1号墳		舶D・波文帶三神三獸鏡 斜縁二神二獸鏡		
	高槻市・塚原古墳群			倣II・獸文帶三神三獸鏡 倣III・獸文帶三神三獸鏡	台頭型
	茨木市・安威O号墳	上方作系獸帶鏡(六像式)	斜縁四獸鏡		
	茨木市・紫金山古墳		舶C・獸文帶三神三獸鏡	倣I・唐草文帶三神二獸鏡 倣I・鳥文帶三神三獸鏡 倣I・獸文帶三神三獸鏡 倣I・獸文帶三神三獸鏡 倣I・獸文帶三神三獸鏡 倣II・獸文帶三神三獸鏡 倣II・獸文帶三神三獸鏡 倣II・獸文帶三神三獸鏡	
	茨木市・將軍山古墳(伝)		舶C・唐草文帶二神二獸鏡		
北 河 内	枚方市・万年山古墳		舶A・吾作四神四獸鏡 舶A・唐草文帶四神四獸鏡 舶B・陳是作六神四獸鏡 舶B・波文帶盤龍鏡 舶C・獸文帶三神三獸鏡 舶D・獸文帶三神三獸鏡 魏・額氏作画文帶環狀乳神獸鏡		台頭型
	枚方市・藤田山古墳				
六 甲 南 麓	神戸市・西求女塚古墳	画文帶環狀乳神獸鏡 画文帶環狀乳神獸鏡 上方作系獸帶鏡(六像式) 神人龍虎画像鏡	舶A・吾作三神五獸鏡 舶A・吾作三神五獸鏡 舶A・吾作四神四獸鏡 舶A・吾作四神四獸鏡 舶B・吾作徐州銘四神四獸鏡 舶B・陳是作五神四獸鏡 舶B・吾作三神四獸鏡		
	神戸市・東求女塚古墳	画文帶神獸鏡	舶B・唐草文帶四神四獸鏡 舶B・獸文帶四神四獸鏡 舶C・獸文帶二神三獸一虫鏡 舶C・獸文帶三神三獸鏡		発展型
	神戸市・ヘボソ塚古墳	画文帶環狀乳神獸鏡 上方作系獸帶鏡(六像式)	舶C・唐草文帶三神二獸鏡 舶C・唐草文帶二神二獸鏡 斜縁二神二獸鏡		
	芦屋市・阿保親王塚古墳		舶D・波文帶三神二獸博山炉鏡 舶D・波文帶四神三獸博山炉鏡 舶D・波文帶神獸鏡 舶・三角縁神獸鏡(鏡式不明)		
	神戸市・夢野丸山古墳	重列式神獸鏡			
	神戸市・得能山古墳	画文帶同向式神獸鏡			
	神戸市・白水瓢塚古墳	画文帶同向式神獸鏡			

る。とりわけ1997年に発見された高槻市安満宮山古墳は、青龍三年鏡や古相の三角縁神獸鏡など魏鏡のみ5面からなる副葬鏡群を有しており、まさにこの段階で中央政権との連携が急速に形成されたことを示唆している。「台頭型」の地域としてとらえられる。北河内もこの類型と見てよかろう。

いまひとつのあり方は、画文帶神獸鏡はある程度入手しているにもかかわらず、三角縁神獸鏡段階になると入手量が逆に減少傾向となるパターンで、中・南河内地域が代表例である。ここでは、画文帶神獸鏡は6面出土しているのに対して、古相の三角縁神獸鏡は東大阪市石切神社古墳(伝)の舶載B段階1面、柏原市国分茶臼山古墳の舶載B段階2面、羽曳野市庭鳥塚古墳の舶載B段階1面の計4面に過ぎず、最古の舶載A段階は認められない。これまでに確認されている古相三角縁神獸鏡（舶載A段階）の数は画文帶神獸鏡の約4倍に達することを勘案するなら、中・南河内は、画文帶神獸鏡段階には中央政権と強い連携関係にあったが、三角縁神獸鏡段階に至るとその関係が停滞気味になったというとらえ方ができる。同様の傾向を呈す和泉も含めて「停滞型」の地域と整理しておこう。

以上の3パターンは、古墳出現期をはさむ前後の時期の間で、政権の中心地と考えられる大和盆地東南部と畿内各地との政治的な連携関係の推移を反映している可能性が高い。「発展型」にあたる瀬戸内北岸の六甲南麓地域との連携は搖るがないものの、大和盆地東南部からそこへ至るルートとして、画文帶神獸鏡段階で大きな役割を果たしていた大和川流域から河内潟南岸を経由する「南回りルート」の地位が三角縁神獸鏡段階になると急速に低下し、淀川水系から河内潟北岸を経由する「北回りルート」へとシフトしたということである。畿内内部の地域関係でいえば、弥生終末期に連携しながら政権の主導権を共有していた大和と中・南河内の関係が古墳出現期頃にはやや疎遠になり、非主流派的立場に転じた大和川流域にかわって淀川水系との連携が急進したということになろうか。

弥生墳丘墓の円丘系と方丘系 古墳時代開始期前後のこうした地域関係の変動は、鏡だけでなく、首長墓の築造動向の変化からも読みとることができる。弥生終末期の首長墓については、大和盆地内部では、桜井市纏向墳墓群に代表されるように円丘系の主丘部を持つ前方後円形のものが卓越している。円丘系という点で大和盆地と同じ歩調をとるのが畿内北西部の摂津地域である。豊中市服部遺跡で前方後円形の墳墓が見つかっているほか、終末期の円形周溝墓は茨木市郡遺跡、東奈良遺跡、総持寺遺跡、豊中市服部遺跡、豊島北遺跡、伊丹市口酒井遺跡、三田市川除・藤ノ木遺跡、神戸市深江北町遺跡など広範囲に及んでいる。これに対して、河内平野では淀川に注ぐ支流に沿った北河内と、旧大和川が河内潟へ流れ込むデルタ地帯を中心とする中・南河内ともに、これまでに確認されている終末期の首長墓は、寝屋川市小路遺跡、大阪市加美遺跡、八尾市久宝寺遺跡など前方後方形の墳丘墓となっている点が対照的である（福永2008）。

終末期における円丘系、方丘系という首長墓の主丘形態の違いが政治的な親疎の関係をどこまで反映しているかは明確ではないが、大和盆地と河内平野の墳墓形態の面的な地域差は明らかであり、当然ながら造営当事者たちの間にもそうした違いは理解されていたはずである。畿内南部の同じ大和川水系として交流の深い両地域ではあるが、少なくとも葬送儀礼においてはそれぞれを風習の違う他集団として認識していたのではあるまいか。こうした距離感が、上述した三角縁神獸鏡段階になって顕在化する政治的距離の下地になっていたと考えられる。そして、対照的に墳墓スタイルの共通点を持っていた大和盆地と淀川水系・西摂地域との結びつきがその後急速に強まるのである。

初期古墳の存否とその意味 親縁さを増す大和盆地と淀川水系・西摂地域に対して、政治的距離感の増大する大和盆地と河内平野。この関係は初期古墳のあり方にも色濃く表れている。

河内では、大和川水系の中・南河内に1期（前方後円墳集成編年、広瀬1992）の高塚古墳が認められない点が注目される。弥生終末期の画文帶神獸鏡段階の「地域力」を念頭に置くなら、中・南河内

において首長墳のスタートが遅れることは、いささか不自然な現象にうつる。さらに、1期の有力古墳が不在であるだけでなく、2期になって登場する地域最古の前方後円墳も富田林市真名井古墳、柏原市玉手山9号墳などのように墳長60m台のものにとどまっており、大和盆地東南部の前方後円墳はもとより、山城南部、摂津、そして吉備などと比較しても規模が小さいことは否めないのである。

ただ、同じ河内でも淀川に注ぐ支流に沿った北河内では状況が異なっている。淀川支流の天野川流域に展開する交野市森古墳群では、1号墳が墳長106mをはかる前方後円墳で、本格的な発掘調査は行われていないが、採集された二重口縁壺から見て1期にさかのぼると推定できる。さらに近年では、森古墳群からさらに丘陵を上った地点で、交野市鍋塚古墳が発見されており(交野市編2003)、北河内最古の有力古墳の可能性がある⁽⁴⁾。なお、舶載三角縁神獣鏡6面、獣帶鏡2面を出土している枚方市万年山古墳は詳細が不確かであるが、銅鏡組成から見るかぎり2期までの築造である可能性は高い。河内で舶載三角縁神獣鏡を最も多く副葬している万年山古墳が平野南部ではなく北部の北河内に存在する意義は少なくないと考えられる。古墳出現期には、北河内の政治的スタンスは中央政権との連携を急速に深める淀川水系勢力の一員としての立場を鮮明にしたものといえよう。

いっぽう摂津の地域はどうか。前述の神獣鏡分布において「台頭型」の典型例とした淀川北岸の三島地域では、120mの墳丘規模を持つ高槻市岡本山古墳が1期の前方後円墳と考えられ、2期の闘鷄山古墳へと前方後円墳の築造が続く。また「発展型」ととらえた六甲南麓でも前方後方墳ではあるが神戸市西求女塚古墳が1期の有力古墳として出現しており、古墳時代への移行はきわめて順調である。

つまり、畿内地域の中で「発展型」「台頭型」の神獣鏡分布を見せる地域は古墳時代初頭からいち早く首長墳築造へ向かうのに対して、「停滞型」を呈する中・南河内や和泉地域ではその動きが遅れるという相関関係が認められるのである。後者の地域が後に中期の古市・百舌鳥古墳群の本拠地となることは示唆的といえる。古墳時代の勢力交替という立場でこの現象をとらえるなら、古墳が出現するまさにその前夜において河内平野南部の勢力が政権中枢から離脱して非主流派に転ずるような勢力変動が生じていたという理解になろう。

この変動が古墳出現前夜の三角縁神獣鏡分配開始期に対応していることは重要である。その背景としては、239年の邪馬台国卑弥呼の魏への朝貢が成功し、「親魏倭王」という新たな次元の地位を付与されたことによって政権内の力関係が大きく変化し、ともに政権中枢にあった大和盆地東南部と中・南河内の間に確執めいた対抗関係が生じたことを想定してみたい。

いずれにせよ、華北王朝からの地位承認とその証である三角縁神獣鏡を手にした大和盆地東南部の勢力は、離脱した中・南河内にかわって淀川水系や六甲南麓地域との連携を強化して畿内政権の政治的主導権を握るとともに、その求心的な政治秩序を表示する墳墓記念物と首長葬送儀礼を創出し、3世紀半ばには古墳時代を成立させるに至った。前期の畿内政権は、前方後円墳、三角縁神獣鏡、各種倣製鏡、小札革綴冑、良質の碧玉製腕飾類などを利用しておよそ前期半ば頃にかけて、倭人社会の盟主的地位をほぼ安定的に維持することとなった。

3 古墳前期後半以降の地域関係

雪野山古墳と瓢箪山古墳 1980年代頃までの考古学的アプローチによる政権交替論は、古墳時代前期の大和盆地勢力から中期の河内平野勢力への盟主権の移動を大局的にとらえたものであった。しかし、1989年から始まった滋賀県雪野山古墳の発掘調査は、古墳時代中期へ向かう政治的流動化の兆しがすでに前期後半には見え始めていたことを提起する契機となった(福永・杉井1996)。

雪野山古墳そのものは、前期前半に築かれた墳長70mの前方後円墳で、堅穴式石室内に舶載三角縁神獸鏡3面、古式の大型倣製鏡2面、小札革綴冑、形の崩れがない有稜系銅鏡などを副葬しており、畿内政権の最大前方後円墳が大和盆地東南部に築造された時期に、それとの連携を保持した首長を埋葬した湖東最古の有力前方後円墳と見てよからう。問題は、雪野山古墳が新たに発見されたことにより、北東7kmに所在する安土瓢箪山古墳との関係を追求する余地が生じたことにある。

安土瓢箪山古墳は墳長130m以上の近江最大の前方後円墳で、雪野山古墳が発見されるまでは湖東地域の典型的な有力前期古墳と理解されてきた（梅原1938）。前期後半の古い段階に雪野山古墳と同じ地域に築かれた瓢箪山古墳は、雪野山と同じ首長系譜にある1代または2代後の有力者の奥津城と見るのが一般的な評価であろう。しかし、なぜか瓢箪山古墳の位置は360度の眺望が開ける雪野山の墳頂からはちょうど目視できない尾根の裏側にあたっており、両古墳の被葬者間で順調な地域首長権の継承が行われたとするにはいささか不審な状況がうかがえる。

そこで、安土瓢箪山古墳の副葬品に着目してみると、銅鏡は舶載夔鳳鏡と倣製二神二獸鏡であり、この時期に存在していたはずの倣製三角縁神獸鏡が認められない点が注目される。また、瓢箪山古墳には方形板革綴短甲、筒形銅器など朝鮮半島との関係がうかがえる新系統の武具が含まれており、中國系と推定される小札革綴冑を持つ雪野山古墳との対照性が明確である。結論的にいうなら、雪野山古墳と安土瓢箪山古墳は、いずれも畿内政権との強い結びつきを持った有力首長の古墳ではあるが、その畿内政権において主導権を握る勢力は、中国華北王朝の後ろ盾を得て霸権を確立した大和盆地東南部のグループから半島南部の加耶地域との連携を深めつつあった大和盆地北部および河内平野の新興グループへとすでに移り始めていたと解釈できるのではなかろうか。雪野山古墳と安土瓢箪山古墳の対照性は、こうした畿内政権内の勢力移動が地域首長系譜の順調な継承関係を乱す形で地域に波及しつつあったことを典型的に示唆した事例といえるのである。

三角縁神獸鏡と新式神獸鏡 安土瓢箪山古墳に見られる神獸鏡は、それまでに倣製の対象とされたことのない斜縁二神二獸鏡を忠実に模倣した新種の倣製神獸鏡である。古墳時代の倣製鏡製作は、まず前期前半の新段階に内行花文鏡や鼈龍鏡などの大形倣製鏡が登場した後、いくぶん遅れて三角縁神獸鏡の倣製が開始され、神仙世界をモチーフとして描いた倣製神獸鏡としてはほぼ独占的な存在となっていた。瓢箪山古墳の倣製二神二獸鏡は、こうした倣製三角縁神獸鏡製作の行為とは一線を画し、意図して三角縁神獸鏡ではない種類の舶載神獸鏡を倣製の対象にした鋳鏡工人が出現したことを物語っている。初期の例としては、この瓢箪山鏡をはじめ、画文帶神獸鏡をモデルとした石川県雨の宮1号墳鏡、対置式神獸鏡をモデルとした宇治市庵寺山古墳鏡などがあげられる。ここでは、前期後半の古い段階から現れる非三角縁神獸鏡系の倣製神獸鏡を新式神獸鏡と呼称しておきたい⁽⁵⁾。

新式神獸鏡が登場する前期後半において、三角縁神獸鏡は倣製新相のものが製作されているとともに、舶載三角縁神獸鏡を副葬する古墳の築造も依然として続いている⁽⁶⁾。筆者が重視したいのは、三角縁神獸鏡と新式神獸鏡が同じ古墳で共伴しない傾向が強いということである。舶載三角縁神獸鏡、倣製三角縁神獸鏡を出土した古墳は約200基が知られており、このうち、他種の鏡を伴出したものが106例存在する。しかし、この106例の中で、倣製三角縁神獸鏡以外の倣製神獸鏡を伴った例は、表2にあげた8基しか確認できないのである⁽⁷⁾。

この8基で共伴した三角縁神獸鏡をややくわしく見ると、新式神獸鏡と製作時期が重なる倣製新相段階の事例は広島県白鳥神社古墳（倣製IV段階）の例のみであり、ほかの三角縁神獸鏡は被葬者の元になんらかの理由で伝世されていたものと解される点が注目される。つまり、倣製三角縁神獸鏡と新式神獸鏡を同じ被葬者が入手できた状況はきわめて例外的といえるのであり、それだけ両神獸鏡の間

表2 三角縁神獸鏡と共に伴する他種の倣製神獸鏡

古墳名	倣製神獸鏡	面径cm	内区図像の模倣元	共伴の三角縁神獸鏡
鳥取・馬山4号	画文帶神獸鏡	19.6	画文帶同向式神獸鏡	舶載D
広島・白鳥神社	三神三獸鏡	16.2	斜縁神獸鏡+対置式神獸鏡	倣製IV
岡山・鶴山丸山	環状乳神獸鏡	14.4	画文帶環状乳神獸鏡	舶載C、倣製I II
	唐草文帶二神二獸鏡	16.7	三角縁二神二獸鏡	
	三神三獸鏡	14.8	斜縁神獸鏡+対置式神獸鏡	
大阪・石切神社(伝)	画文帶環状乳神獸鏡	15.0	画文帶環状乳神獸鏡	舶載B C
京都・久津川車塚	画文帶環状乳神獸鏡	17.6	画文帶環状乳神獸鏡	舶載B
奈良・佐味田宝塚	三神三獸鏡	20.9	斜縁神獸鏡+対置式神獸鏡	舶載A B C D、倣製I
三重・筒野	四神二獸鏡	11.2	斜縁二神二獸鏡	舶載C D
群馬・三本木(伝)	六神四獸鏡	15.7	画文帶神獸鏡	舶載A B (共伴関係不明)

には排他的な関係があったことを示唆しているわけである。

新式神獸鏡が一古墳から多量に出土する事例はないが、3面以上持つ古墳としては、表にもある岡山県鶴山丸山古墳のほかに、奈良市佐紀丸塚古墳、藤井寺市津堂城山古墳などがあげられる。佐紀丸塚では、全国的に見てもまれな面径22cmをこえる最大クラスの新式神獸鏡3面を含む4面の新式神獸鏡が知られており、この種の鏡を最初に生みだしたのが佐紀古墳群を残した大和盆地北部の勢力であったことを強く示唆している。津堂城山古墳も、河内平野の古市・百舌鳥古墳群が形成されていく端緒をなした巨大前方後円墳として注目される存在である。

以上のことを整合的にとらえるなら、新式神獸鏡は前期後半に大和盆地北部の勢力によって創出されたもので、三角縁神獸鏡を媒介として畿内政権と政治関係を持った首長系列には属さない地域首長に配布することで、前期前半までとは異なる政治系列を形成する役割を期待された威信財だったと評価できるのではなかろうか。それが佐紀丸塚古墳や津堂城山古墳に多く副葬されていたことは、地域の新たな政治系列の形成をもくろんだ政権側のグループは、大和盆地東南部にかわって大和盆地北部や河内平野に巨大前方後円墳群を造営した新興勢力と理解するのが妥当である。そして、この新興勢力は前期後半の間に、旧い大和盆地東南部勢力と政権内部の主導権を競いながら、やがて中期段階には畿内政権の主導権を確立するに至ったと考えられるのである。

大陸系要素の変化 上述した新式神獸鏡を副葬する有力古墳の中には、安土瓢箪山古墳の筒形銅器、津堂城山古墳の巴形銅器など、それ以前には見られなかつた副葬品を有するものが存在する。筒形銅器は以前から朝鮮半島南部での出土が知られていたが、1990年から始まった韓国金海市大成洞古墳群において16点が出土したことは、これを副葬する列島の古墳の性格を考える上で大きな意味を持っていた⁽⁸⁾(申・金2000)。大成洞古墳群ではほかに巴形銅器6点、石製鏃15点などの「倭系遺物」も見られ、古墳時代前期後半段階にこれらの貴重品を重視していた倭の勢力が、半島南東部で台頭しつつあった金官加耶と連携していたことを示すものだったからである。

筒形銅器と三角縁神獸鏡をともに副葬した古墳は、2005年に調査された羽曳野市庭鳥塚古墳を含めて7基が知られるが、そのいずれもが舶載あるいは倣製II段階までの三角縁神獸鏡であり、同時期の三角縁神獸鏡が共伴した事例は認められない。また、巴形銅器についても、三角縁神獸鏡と共に伴する6基の古墳のうち、河合町佐味田宝塚古墳に倣製I段階が少量あるほかはいずれも舶載鏡であり、長く伝世した三角縁神獸鏡が、後になって巴形銅器とともに副葬されたにすぎないことを示している。

なお、こうした見方に関連して、田中晋作は、帶金式甲冑と三角縁神獸鏡が共伴する古墳の事例を検討し、その被葬者は三角縁神獸鏡を供与した勢力（大和盆地東南部勢力）と帶金式甲冑を供給した

勢力（河内勢力）の間にあって「キャスティングポート」を握るような性格を持っていたという興味深い見解を示している。そして、共伴する三角縁神獣鏡に舶載古相のものが多いことから、三角縁神獣鏡配布勢力はこれらの被葬者への働きかけを強めるために、長らく手元に残していたいわばとておきの舶載三角縁神獣鏡を特に与えたと理解する（田中1993）。筆者は両勢力から連携の働きかけを受ける地域有力者が存在したことに同意するいっぽう、氏のあげた事例の多くは、古い時期に政権側から三角縁神獣鏡の分配を受けながらも、すぐにそれを副葬する古墳を築かなかつたことがむしろ重要であり、地域有力者でありながら三角縁神獣鏡配布勢力との間の政治的連携関係の弱い「非主流派」的な系列に属する首長であったのではないかと見ている。この点は、三角縁神獣鏡と筒形銅器あるいは巴形銅器を併せ持つ古墳被葬者の系列についてもあてはまることと考える⁽⁹⁾。

いずれにせよ、前期後半以降に各地で登場する有力古墳の中には、三角縁神獣鏡や小札革綴冑といった中国系の副葬品にかわって、三角縁神獣鏡との排他的傾向が強い新式神獣鏡や半島南部との関係が考えられる武具などを持つものが見られるようになるのである。そして、古墳の築造動向と関連づけてとらえるなら、これら新たな系統の副葬品でつながる首長ネットワークの核となる畿内勢力は、もはや大和盆地東南部ではなく大和盆地北部・河内平野を拠点とするグループであったと理解できる。こうした政治的枠組みの形成へ向けた畿内政権内の主導権の流動化は、古墳時代前期を前後二期に細分したとき、すでにその後半期には始まっていたのである。

河内の政治的主導権の基盤 畿内地域における巨大前方後円墳の築造動向を見ると、河内平野は津堂城山古墳に続く時期と推定される藤井寺市仲津山古墳の段階以降、列島最大規模の古墳を累代的に築造する地域となる⁽¹⁰⁾。畿内政権内の主導権が河内平野の有力集団のもとに安定する時期を迎えたと理解できる。大和盆地東南部から河内平野へと最大規模前方後円墳が移動する現象については、これを大和から河内への勢力交替と見る立場と、大和勢力が主導権を維持しながら墳墓造営地だけを移したと見る立場の間で、議論が続いていることは小論の冒頭でも触れたとおりである。

ただ、本書伊藤論文で分析されているように、現在の大和川以南の古市古墳群域内で集落遺跡が顕著になるのは確かに古市古墳群形成期以降のことであるが、河内湖に流れ込む旧大和川下流域では弥生終末期以降の集落展開の著しかったことが、近年の調査によって確実となってきている。多くの人口を擁する下流域の大規模な在来集団が政治的に成長し、十分な土地利用のなかつた背後の台地に巨大な古市古墳群を造営するに至ったと考えることも資料的に可能な状況となっている（伊藤2011）。

ところで、河内平野の前期古墳を考える場合、石川と大和川が合流する付近の丘陵上に展開する柏原市玉手山古墳群の存在は注目される。これを古市古墳群の前身勢力と見るか、古市古墳群にとってかわられた別系列の旧勢力と見るのかについては、多くの古墳がはやく盗掘されたこともあって、判断が容易ではない。それでも近年、精力的な調査と分析によって群形成の過程がだいに明瞭になってきており、内面をヘラケズリして器壁を薄く仕上げ、透孔の周囲に線刻を施した円筒埴輪、立体感豊かな壺胴部に2条の突帯をめぐらせた朝顔形埴輪の存在などが大きな根拠となって、9号墳を群中で最古段階に位置づける理解がほぼ定着しつつある（安村編1983、安村編2001）。時期としては2期に位置づけるのが妥当であろう。

筆者は、南河内最古相の前方後円墳である玉手山9号墳が、古墳時代が成立していくぶん時間の過ぎた2期になってようやく築造され、かつ墳長65mという淀川流域や六甲南麓などと比べて規模の小さいものとなった点に注目したい。上述した弥生終末期の繁栄と大和盆地の隣接地であることを念頭に置くなら、やはり大和盆地東南部の政権中央との政治的距離の遠さを認めざるを得ないのである。玉手山古墳群と古市古墳群の被葬者集団の間にたとえ直接的な系譜の連続がなくても、大和盆地東南

部とは政治的距離を置いた有力集団がすでに前期の大和川下流域に広がっており、その中から前期後半以降の勢力バランスの流動化に乗じて、中期畿内政権の主導権を握っていく勢力が成長してくるという理解を示しておきたい⁽¹¹⁾。

王権の成長と急進的集権化 4世紀後葉の津堂城山古墳を皮切りに巨大前方後円墳の造営が始まる河内平野では、海岸部の百舌鳥古墳群を含めて、その後1世紀あまりにわたって列島最大の前方後円墳を作り続けた。古墳の実体的な大きさだけでなく、築造労働力の動員と組織化、それに伴う物資調達や管理などの遂行を考えるとき、そこには中央政治権力の大きな成長がうかがえる。

成立期の「河内畿内政権」の権力基盤を示唆するものは、古市・百舌鳥古墳群から出土しているおびただしい数の鉄製品（農工具・武器武具）であろう。これらは半島南部から入手した鉄素材を用いて河内平野の中で製作されたものが多いと考えられる。前期の政権の重要な存立基盤であった外来の権威ではなく、半島南部から生産、軍事、生活の諸局面に不可欠の鉄素材を大量に調達できるという実質的な力によって、外来権威を失った大和盆地東南部勢力にかわって主導権を得ていく構図を読みとることができるのでなかろうか。

このようにして畿内政権内の盟主権を確保した中期の河内勢力は、やがて5世紀前葉に中国江南地域に安定的な王朝が復活すると、ふたたび朝貢使節を送るようになる。特に5世紀中葉の南宋に対する朝貢は頻繁に行われ、將軍号の叙正を受けるなど、東アジアにおける政治的地位の確保をはかる動きが急であった⁽¹²⁾。

政権の勢いはまさに「国家的事業」というべき5世紀中葉の堺市大仙古墳の築造で一つの到達点を迎えた。この頃から、列島各地で大型前方後円墳の減少や前方部の短い帆立貝式古墳の増加が顕著となるいっぽうで、和田晴吾が注目する古式群集墳の造営が活発となる（和田1992）。この変化については、政権の側が有力地域首長の力をそぎ、その膝下の集団に直接的な影響力を及ぼし始めたとらえれば、状況を理解しやすい。かつて、5世紀の「河内王朝」の支配力増大期には地域首長に対して前方後円墳を造らせないような造墓規制が行われたことを説いた小野山節の解釈も示唆的である（小野山1970）。5世紀後半は、河内勢力が主導する集権化の動きが極まった時期といえるのである。

淀川流域への主導権移動 古墳築造状況にふたたび大きな変化が認められるのは、6世紀前葉のことである。古墳時代後期初頭にあたるこの時期の変化は、首長墳においてふたたび前方後円墳の築造数が増加すること、この時期最大の前方後円墳が河内平野ではなく淀川流域の高槻市今城塚古墳へと移動することである。同時に、古墳の構造や副葬品には畿内型横穴式石室、二上山白色凝灰岩製家形石棺、規格性の強い金銅装馬具、新様式の銅鏡、龍鳳文装飾付環頭大刀などが新たに登場する。

前段階で築造が規制されたかに見えた前方後円墳が各地で復活してくることは、集権化が頓挫し、政権と首長層との関係が前方後円墳の築造を媒介とするかつてのあり方へと復古した現象ととらえられるのではないか。そのいっぽうで、そうして復活した有力前方後円墳においては、上述の新要素が多く認められるという特徴が顕著である。つまり、前方後円墳という伝統的な墳墓形式を広く認めるにより、集権化で弱められた在地勢力の地位回復を許容しつつ、有力首長に対しては新たな埋葬施設や副葬品を与えることで、政治系列化がはかられた状況を推定することができる。この変化が、古市・百舌鳥古墳群から今城塚古墳への巨大前方後円墳の移動現象と同時期に生じていることは、こうした動きの核となったのがもはや河内平野の勢力ではなく、まさに今城塚古墳の被葬者であった可能性を強く示唆している。

6世紀前葉の新たな古墳要素のうち、特に階層的上位の被葬者に用いられる二上山白色凝灰岩製家形石棺の最古段階のものが、大和盆地南部の高取町市尾墓山古墳で確認されていることは興味深い。

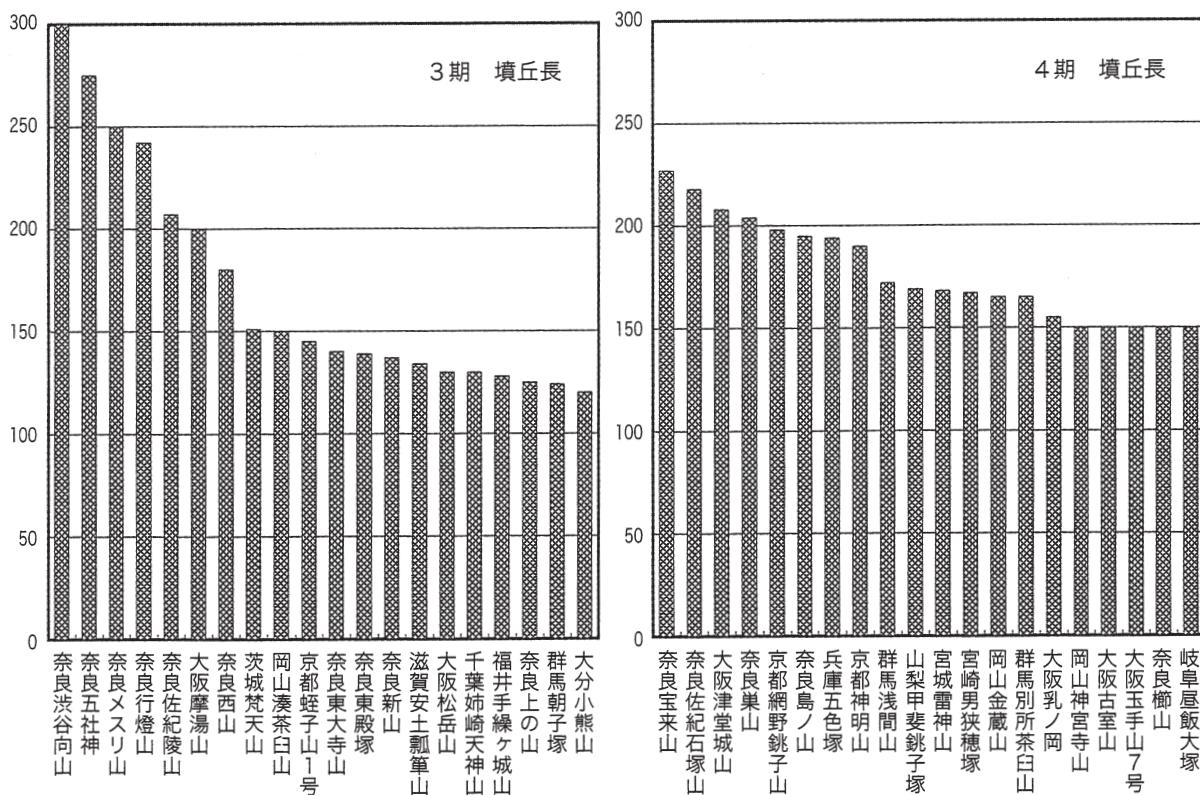
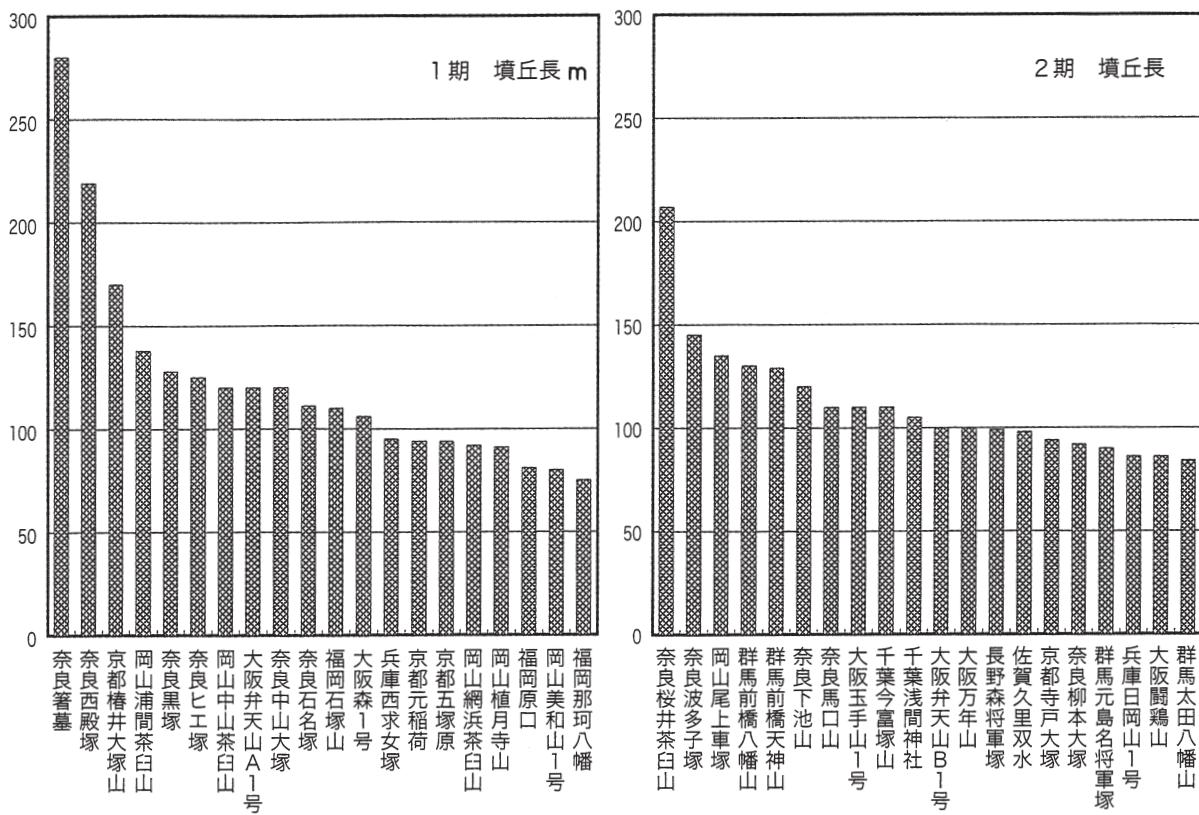


図1 墳丘長の時期別上位20基（1）

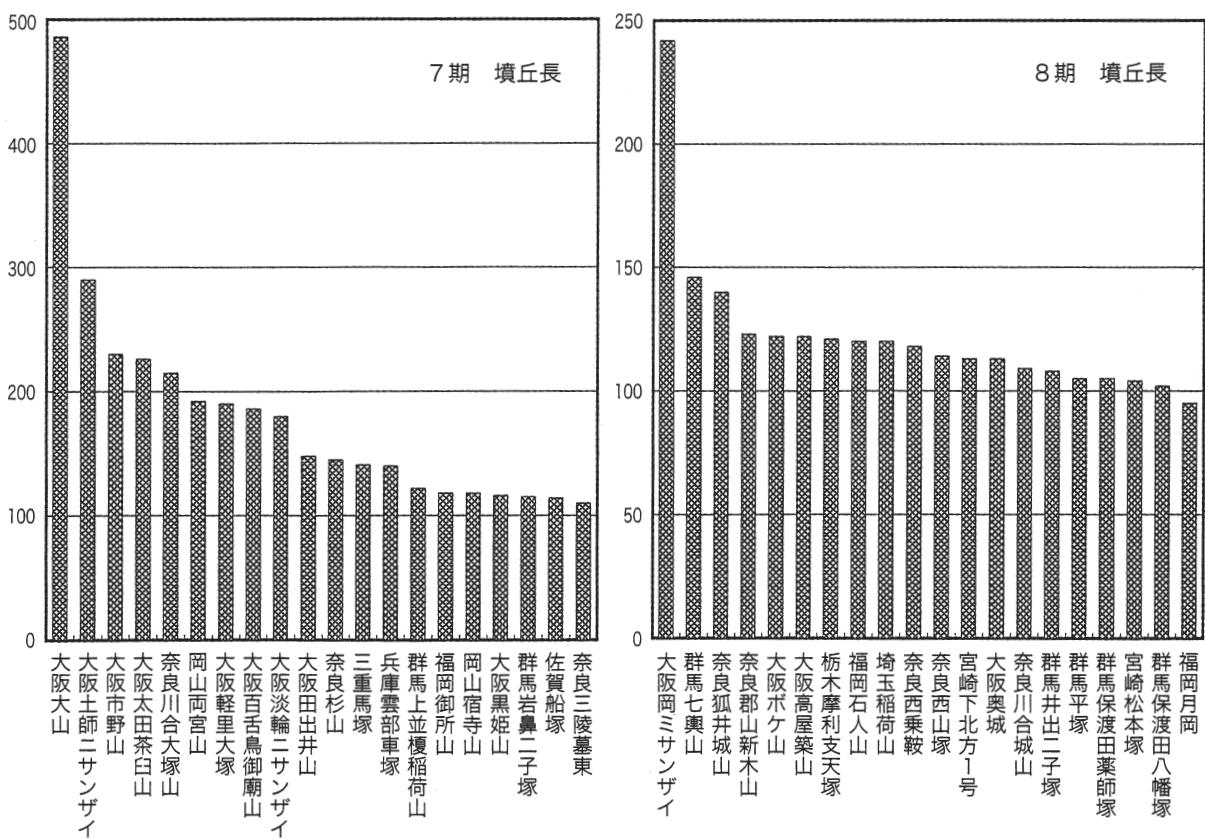
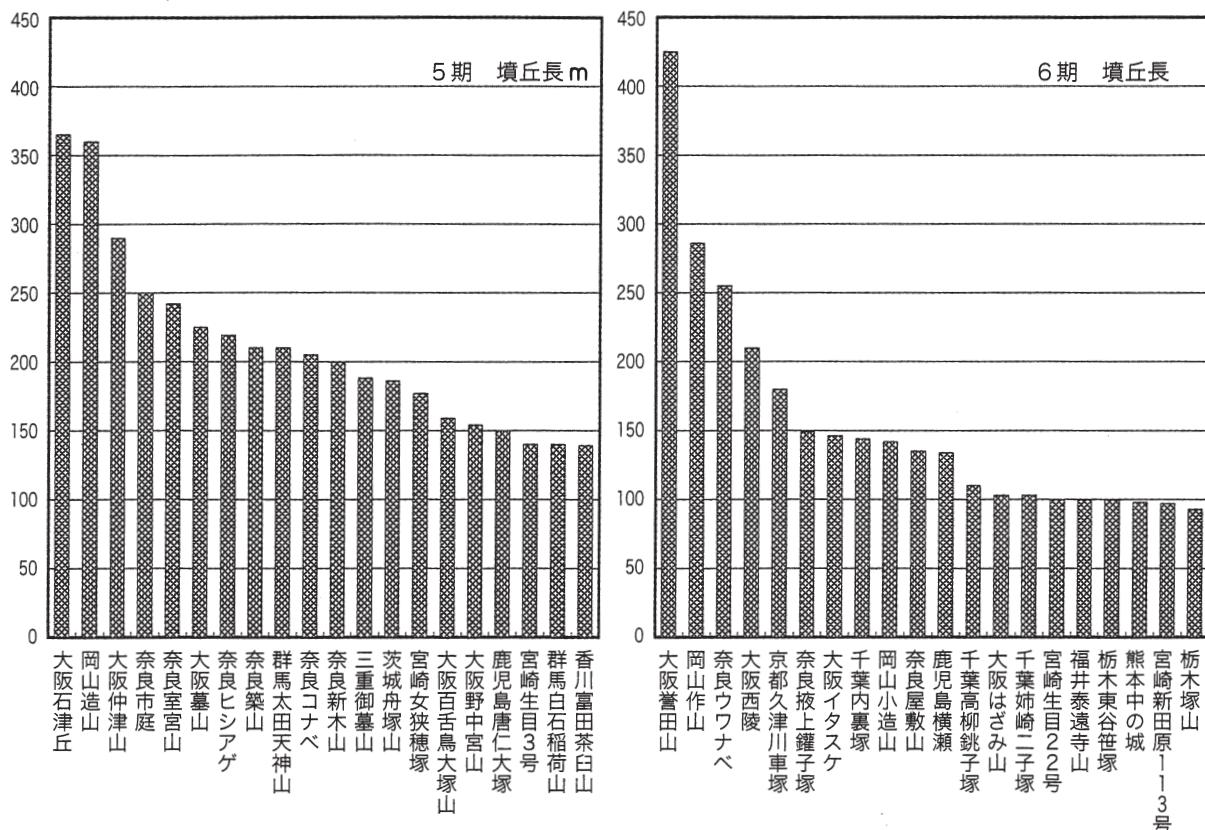


図2 墳丘長の時期別上位20基（2）

今城塚古墳被葬者を中心とする6世紀前葉の畿内政権が、摂津地域と大和盆地南部の間の連携関係を有していると判断できるからである。そうした関係は、大和盆地東南部と淀川流域が連携していた古墳前期の政治的枠組みの復活を想起させるものである。そして、6世紀後半に最後の巨大前方後円墳である橿原市見瀬丸山古墳が大和盆地南部に築造されることは、淀川水系で政権の主導権を確立した新勢力が、伝統的な中枢地である大和盆地内に基盤を持つことで、権力の正統性を継承したことを表示する動きだったのでなかろうか。

4 まとめ 一古墳時代政権交替の考古学的理解—

以上、有力古墳のあり方を中心に畿内地域内部で認められる地域間の勢力関係を素描してみた。その変化期を今一度まとめると、次のようになろう。

〈第1変化期〉 前期初頭 3世紀中葉

河内平野勢力が畿内政権から「離脱」し、大和盆地東南部勢力を核とする政権構造が顕在化。ただ、その契機は古墳出現にやや先んじて、三角縁神獣鏡配布が始まった段階に求められる可能性が高い。

〈第2変化期〉 中期初頭 4世紀末

古市・百舌鳥古墳群の成立により、河内平野勢力が主導権を掌握。大和盆地東南部から河内平野への勢力移動の兆しは、すでに前期後半には現れている。

〈第3変化期〉 中期後半 5世紀後半

政権勢力が交替するわけではなく、河内平野勢力の力が急速に伸張することによって、古市・百舌鳥古墳群の大王墓だけが著しく突出し、地域首長の前方後円墳築造はむしろ低調になる。

〈第4変化期〉 後期初頭 6世紀前葉

衰微する古市・百舌鳥古墳群と入れ替わるように淀川水系に今城塚古墳が築造される。最新の埋葬施設である初期の畿内型横穴式石室を持つ有力古墳が淀川・猪名川水系や大和盆地南部に顕著。

〈第5変化期〉 後期後半 6世紀後半

最後の巨大前方後円墳が大和盆地南部の橿原市見瀬丸山古墳に移る。ただ、横穴式石室や家形石棺などの埋葬施設構造、副葬品の系統などに劇的な変化はなく、主導権交替という性質のものではない。

このうち、畿内政権の主導権の交替を伴う変化としては、第2、第4が該当する。第3、第5は勢力交替というより政権の政策的意図が有力古墳のあり方に投影されたものと理解できる。第1変化期は主導権交替ではないが、大和盆地東南部と河内平野勢力のある意味の「対抗関係」が生じた局面としてその後の古墳時代政治史の底流に大きな影響を与えたのではないかと推測している。

このように整理したとき、注目できる点として次の3つをあげて今後への展望としたい。

まず、上述した変化期の多くが東アジア情勢の動きと関係している可能性があることである。具体的には第1変化期には魏による楽浪郡、帶方郡の支配権回復、第2変化期は4世紀前葉の華北王朝の滅亡と半島南部での地域勢力の台頭、第3変化期は南朝の復活による中国交渉の再開、第4の変化は高句麗に追われて南下した百濟勢力との交渉強化などが想起されるのである。

次に、こうした変化期の前後に、畿内政権と地域の有力首長との力関係が変動している点も興味深い。図1、図2に示したのは、「前方後円墳集成編年」の1期から8期の各時期ごとに墳丘規模の上位20傑を棒グラフで並べたものである。これを見ると、勢力交替の変化期にあたる4期には、第1位と第20位の前方後円墳の墳丘長の差が最も小さくなって、中央政権としての盟主性が著しく低下していくことがうかがえる。その後、勢力交替を果たして主導権を握った河内平野の大王墓が卓越性を増

し、小論で集権化が進むととらえた5世紀後半（8期）には、藤井寺市岡ミサンザイ古墳のみが突出するというように、主導権交替の浮沈と整合的なあり方を示している。中央でのこうした変動が地域首長系譜の盛衰にも波及する場合があることは、都出比呂志がはやくに着目し、本書でも寺前直人が猪名川流域を対象にして例示したとおりである（都出1983、寺前2011）。

最後に、小論で特に打ち出したいのは、弥生終末期から古墳時代を通じて、畿内政権の政治的主導権の変化の中に、大和盆地東南部勢力と河内平野勢力の対抗的な動きが認められ、その優劣が振り子のように変転しながら古墳時代史の潮流を形成しているのではないかというとらえ方である。

畿内の有力古墳の動きから素描したこの古墳時代史が、他地域の古墳、集落や生産遺跡、さらには文献史料などによる他のアプローチと整合性を持つのかどうか。今後の検討課題としておきたい。

註

- (1) 特に5世紀の河内王権については、井上光貞、直木孝次郎、上田正昭、岡田精司らが以前の大和の王権との違いを認める立場から、門脇禎二、和田萃らがそれを否定する立場から議論している。
- (2) 卑弥呼の第1回目の朝貢が成功して「帰国」した240年からは中央政権が三角縁神獸鏡を政治的に利用しうるので、厳密にいえば古相の三角縁神獸鏡は前方後円墳が成立する古墳時代よりも若干先んじた局面からの政治関係を示していると理解できる。ここでは、議論をわかりやすくするために、画文帶神獸鏡＝弥生終末期、三角縁神獸鏡＝古墳時代という対応関係として整理する。
- (3) 三角縁神獸鏡の新古は、舶載をA～Dの4段階、倣製をI～V段階に大別する筆者の型式編年案によっている（福永2005）。
- (4) 鍋塚古墳は墳長65mの前方後方墳とされるが、墳丘のトレンチ調査はなお限定的であり、前方後円墳である可能性も捨てきれない。時期を決める手がかりはないものの、埴輪は確認されておらず森1号墳に近い1期の築造である可能性が高いと考える。
- (5) 龜龍鏡も画文帶環状乳神獸鏡をモデルとしたものであるが、前期前半にいち早く出現する精緻な大型倣製鏡を出発点とするものであり、ここであげる新式神獸鏡とは製作工人や作風の点で異なる系統のものである。
- (6) 筆者の編年観では新式神獸鏡の最古例の一つである安土瓢箪山古墳二神二獸鏡は、倣製三角縁神獸鏡のII段階新相～III段階には十分併行する古さであると考えている。
- (7) このうち、群馬県三本木所在古墳については、出土時の実態が不分明であり、確実な共伴例と断定できる状況にない。
- (8) 筒形銅器の製作地については半島説、列島説ともに一定の論拠があるが、まだ確定できるまでには至っていない。
- (9) 景初三年画文帶神獸鏡や古相の舶載三角縁神獸鏡とともに巴形銅器を持ち、築造時期が4世紀後葉に下る和泉市和泉黄金塚古墳はその好例である。黄金塚古墳が間もなくして百舌鳥古墳群を形成する和泉地域に存在することも、きわめて示唆的である。
- (10) 大和盆地東南部から河内平野へ巨大前方後円墳が移る過渡期において、大和盆地北部の佐紀古墳群でも200m台の前方後円墳が複数築造され始める。佐紀古墳群は巨大古墳が陵墓指定されていて十分実態がつかめないが、古市古墳群との間には、新式神獸鏡、半島系の鉄素材、長持形石棺などの共通性があり、基本的には友好関係にある勢力と考えられる。佐紀陵山古墳などごくわずかが津堂城山古墳より先行する可能性があると見るが、仲津山古墳の段階で古市・百舌鳥古墳群が政権中枢を担うようになり、佐紀古墳群の勢力との協力関係を保ちながら中期の政権構造を固めていったのではなかろうか。
- (11) 百舌鳥古墳群域でも、その前段階の大規模集落の様相が堺市下田遺跡などで明らかとなっている（西村編1996）。
- (12) 5世紀の朝貢は、手にした政治的主導権を権威付ける列島内部での効果を期待するとともに、朝鮮半島交渉の中で中国王朝が認める地位を利用しようとする意図も大きかったであろう。

参考文献

- 伊藤聖浩2011「古市古墳群の形成と居住域の展開」(本書所収)
- 梅原末治1938「安土瓢箪山古墳」『滋賀県史蹟調査報告』第7冊 滋賀県
- 小野山節1970「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』第16巻第3号
- 交野市教育委員会編2003『交野市埋蔵文化財調査報告2002-II』交野市教育委員会
- 近藤義郎1983『前方後円墳の時代』岩波書店
- 白石太一郎1969「畿内における大型古墳群の消長」『考古学研究』第16巻第1号
- 申敬澈・金宰佑2000『金海大成洞古墳群I』慶星大学校博物館
- 田中晋作1993「百舌鳥・古市古墳群成立の要件—キャスティングポートを握った古墳被葬者たち—」『関西大学考古学研究室開設40周年記念考古学論叢』関西大学考古学研究室
- 都出比呂志1983「古墳時代」『向日市史』上巻 向日市
- 寺前直人2011「猪名川流域における前期古墳の動向」(本書所収)
- 西村 歩編1996『下田遺跡』(財)大阪府文化財調査研究センター
- 広瀬和雄1992「前方後円墳の畿内編年」近藤義郎編『前方後円墳集成』近畿編 山川出版社
- 福永伸哉2001「画文帶神獸鏡と邪馬台国政権」『東アジアの古代文化』108号
- 福永伸哉2005『三角縁神獸鏡の研究』大阪大学出版会
- 福永伸哉2008「大阪平野における3世紀の首長墓と地域関係」『待兼山論叢』第42号、大阪大学文学研究科
- 福永伸哉・杉井健編1996『雪野山古墳の研究』八日市市教育委員会
- 水野 祐1954『増訂日本古代王朝史論序説』小宮山書店
- 安村俊史編1983『玉手山9号墳』柏原市教育委員会
- 安村俊史編2001『玉手山古墳群の研究 I—埴輪編—』柏原市教育委員会
- 和田晴吾1992「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』近畿1、角川書店

3. 猪名川流域における前期古墳の動向

寺 前 直 人

1. 分析の視点

各地域における大規模古墳の消長をとおして、権力の消長や推移を明らかにすることは、文献資料を欠く地域の歴史を復元するうえで、これまで多くの成果をあげてきた。とくに白石太一郎により考案された縦軸を時間、横軸を空間、そして古墳の大小を視覚的に示す編年図の登場は、その後の研究に大きな影響を与えたといえよう（白石1969）。被葬者の権力の大小を反映した可能性のある古墳の規模を視覚的に表現した図は、地域における権力の消長を直接的に示しているかのような説得力に富む。その後、白石は副葬品、立地や墳形、そして埴輪などの研究の進捗にあわせ、自身の編年案の細部を調整したものの提示を続け（白石1989）、大古墳の造営地が、奈良盆地東南部から奈良盆地北部、そして大阪平野南部へと移動していくことを論じている。このような中央における大古墳群の移動と各地域の古墳群の消長を論じることをとおして、中央と地方の政治関係を論じる視点も提示されている。なかでも小野山節による規制論（小野山1970）や都出比呂志による中央勢力の消長に地方の政治関係が連動して変化したという理解（都出1988）は、その後の研究に大きな影響を与えたといえよう。本稿で取りあげる大阪湾北岸、兵庫県南東部から大阪府北西部に位置する猪名川流域についても、前期における小地域ごとの前方後円墳造営と中期における限定化、そして後期における前方後円墳の増加と中心地域の移動が、福永伸哉により論じられている（福永2004）。

ただし、いわゆる首長（墓）系譜論に対しては、さまざまな角度からの批判があるのもまた事実である（北條2002、土生田2006）。例えば、田中裕は編年、地域区分、資料として扱う古墳の範囲により、解釈の前提となる古墳動向自体が大きく左右されるという問題点を指摘している（田中2006：pp.132～134）。なかでも編年の問題は大きいといえよう。そこで、本論では地域を猪名川流域、現在の兵庫県宝塚市、川西市、伊丹市、大阪府池田市、豊中市に、対象時期を古墳時代前期に限定し、できるかぎり精緻な編年案を用いて、当地域における前期古墳の動向を論じることを目指す。

2. 各古墳の様相

本稿では表1ならびに図1にあげた諸古墳を中心に比較を進めていくこととする。

長尾山古墳 兵庫県宝塚市山手台東2丁目に所在する。標高121mの尾根端部に位置している。埴輪、葺石をもつ後円部、前方部とも二段築成の前方後円墳である。墳長40m、後円部径25mをはかる。2006年から大阪大学考古学研究室、宝塚市教育委員会により発掘調査が実施され、墳頂部において礫群とともに土師器片が検出され、2010年には排水溝をもつ粘土桿上面が検出された（本書報告参照）。

万籟山古墳 兵庫県宝塚市切畑に所在する前方後円墳である。標高216mの尾根端部に位置し、南側には大阪湾沿岸から和泉山脈まで一望できる。1935年に小林行雄らにより竪穴式石室が調査され、鉄器や管玉などが出土地で出土している（梅原1937）。1970年に詳細な墳丘測量図が報告され、1973年には宝塚市教育委員会によって竪穴式石室の再実測が実施されている。墳丘は未発掘であるが、墳丘上では

表1 猪名川流域における主要前期古墳一覧

	古墳名	墳形	墳長	埋葬施設	埴輪	石製品	銅鏡	所在	立地標高
1	長尾山	後円	40m	粘土槨	○	—	—	兵庫県宝塚市	121m
2	万籾山	後円	54m	石室	○	○	○	兵庫県宝塚市	216m
3	小戸遺跡	—	—	—	○	—	—	兵庫県川西市	—
4	娛三堂	円	27m	石室・粘土槨	×	○	○	大阪府池田市	110m
5	池田茶臼山	後円	62m	石室	○	○	—	大阪府池田市	89m
6	待兼山1号	後円?	—	—	—	○	○	大阪府豊中市	65m
7	御神山	後円?	—	埴製棺?	—	○?	○?	大阪府豊中市	30m
8	大石塚	後円	80~90m	石室?	○	—	—	大阪府豊中市	23m
9	小石塚	後円	49m	粘土槨	○	—	—	大阪府豊中市	23m
10	嫁廻塚	円?	30m	—	○	—	—	大阪府豊中市	18~20m
11	上臘塚	?	—	—	—	—	—	兵庫県伊丹市	17m
12	鶴塚	?	—	—	○	—	—	兵庫県伊丹市	—

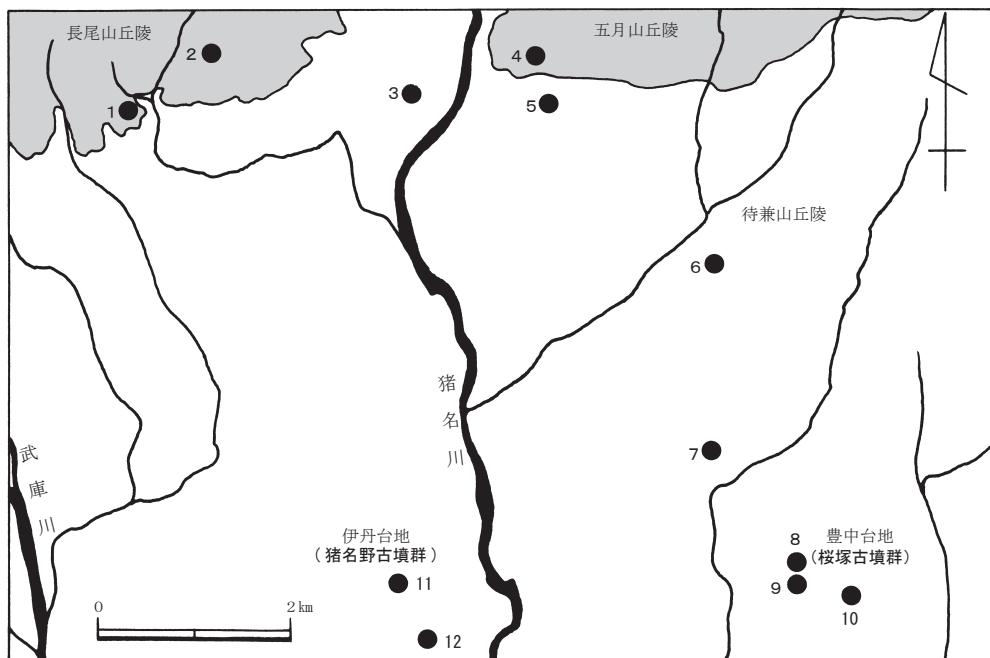


図1 猪名川流域における前期古墳の分布

葺石とみられる円礫が散在しており、埴輪も採集されている。測量によれば、墳長は54mと想定されている（宝塚市教育委員会1975）。測量報告に基づくと後円部径35m、前方部長19mとやや短小な前方部を有する墳形が復元できる。

娯三堂古墳 大阪府池田市綾羽2丁目に所在する直径27mの円墳である。埴輪、葺石はみとめられない。五月山丘陵南側の尾根部の標高110mに立地する。眺望は良好であり、和泉山脈や淡路島をのぞむことが可能である。1897年に堅穴式石室が発掘され、土師器、銅鏡、石製品、鉄器が出土している。1990年には池田市教育委員会によって埋葬施設と墳丘が調査され、同一墓墳に粘土槨と堅穴式石室が構築されていることが判明している（池田市教育委員会1992）。

池田茶臼山古墳 大阪府池田市上池田町に所在する。墳長62m、後円部径33mの前方後円墳である。五月山丘陵南側の尾根部標高89mに立地し、先述の娯三堂古墳の南東側約500mに位置する。1958年に堅田直らによって後円部の堅穴式石室と墳丘が調査された（池田市1964）。堅穴式石室内部は数回にも及ぶ盗掘のため、遺物の残存量は少ないものの、土師器、管玉やガラス小玉、そして腕輪形石製品が検出されている。また、墳丘では埴輪と葺石が確認されている。

待兼山1号墳 大阪府豊中市待兼山町に所在していた。待兼山丘陵の頂部、標高65m付近に立地す

る。1916～1922年の間に銅鏡と石製品が出土しているが、墳丘はすでに失われており、埋葬施設の構造および墳形、埴輪の有無等は不明である。現地の地形から藤沢一夫は南面する前方後円墳である可能性を想定している（藤沢1961）。

御神山古墳 大阪府豊中市螢池南町に所在する。待兼山丘陵から南西方向に派生する刀根山丘陵の先端部、標高30m付近に位置するが、現在、古墳北東側が鉄道と国道敷設のために分断されており、独立丘陵状を呈する（藤沢1961）。遺物は銅鏡と腕輪形石製品が伝わっており、1914年に記された箱書きによれば明治初年の出土であるという。

大石塚古墳 豊中市岡町北に所在する。豊中台地上の標高23mに位置し、1979年に豊中市教育委員会により墳丘調査が実施され、埴輪列と葺石の存在があきらかとなった（豊中市教育委員会1980）。後円部、前方部とも三段築成であり、後円部径48mと推定されている。墳長は前方部の削平のため不明であるが、80～90mになるとみられる。埋葬施設は未調査であり不明であるが、葺石には堅穴式石室に用いられるような扁平な石材がみとめられることから、埋葬施設には堅穴式石室が採用されていると推定されている。また、東側クビレ部からは、家形埴輪や盾形埴輪の細片、布留2式に属する高坏脚部が出土している。

小石塚古墳 豊中市岡町北に所在する。先述の大石塚古墳の北側に近接して標高23mに位置する。大石塚と同じく1979年に発掘調査が実施され、墳長49m、後円部径29mをはかることが確認された（豊中市教育委員会1980）。後円部は二段築成、前方部は一段築成と考えられており、葺石はみとめられないが、円筒埴輪、朝顔形埴輪、壺形埴輪が確認されている。後円部墳頂では粘土櫛が確認されている。

嫁廻塚古墳 豊中市南桜塚に所在する。標高は18～20mで、豊中大塚古墳や御獅子塚古墳などと近接する場所に位置する。墳丘はすでに削平されており、周溝の一部が検出されたのみであるが、埴輪が検出されており、直径30mの円墳である可能性が指摘されている（清水1994）。

3. 墓輪の検討

埴輪は、長尾山古墳、池田茶臼山古墳、大石塚古墳、小石塚古墳の4古墳から出土しており、宝塚市万籟山古墳でも表面採取された埴輪が報告されている。また、古墳の詳細は不明なもののが嫁廻塚古墳、兵庫県伊丹市上臘塚古墳、同市鶴塚古墳（浅岡2001、廣瀬2003）でも円筒埴輪がみとめられる。娘三堂古墳は埴輪をともなわず⁽¹⁾、御神山古墳、待兼山1号墳における埴輪の有無は、不明である。また、古墳としての内容は不明であるが、兵庫県川西市小戸遺跡出土の埴輪についても検討対象に加えておきたい⁽²⁾。

埴輪がみとめられる古墳のうち、大石塚古墳では盾形埴輪と家形埴輪が出土している。上臘塚古墳でも家形、盾形、鞍形の埴輪が出土している（廣瀬2003：p.15）。また、池田茶臼山古墳以外の古墳からは普通円筒埴輪とともに朝顔形埴輪が出土しており、確実な壺形埴輪は小石塚古墳でのみ確認されている。さらに、円筒埴輪に付随する鰐部分が、嫁廻塚古墳、上臘塚古墳、鶴塚古墳でみられる。

以上の古墳でみられる円筒埴輪のうち、長尾山古墳、池田茶臼山古墳、大石塚古墳、小石塚古墳は川西宏幸による円筒埴輪編年のI期（川西1978）、あるいは鐘方正樹によるI群に属し（鐘方1997）、嫁廻塚古墳、上臘塚古墳、鶴塚古墳は川西II期あるいは鐘方のII群に属する。また、以上で言及した諸古墳出土の円筒埴輪については、廣瀬覚による詳細な検討がなされている（廣瀬2003）。廣瀬の分析と、金澤雄太による長尾山古墳と万籟山古墳との比較（本書報告参照）をふまえて、当地域出土の

古墳名	スカシ			口縁部形態				調整		朝顔形 頸部突帯
	一段あたり孔数	形	各段配置	器台系	屈曲	直立	外反	外 面	内 面	
長尾山	—	▽?	—		○			タテハケ	ナデ・ケズリ	×
万籟山	—	□	—		○			タテハケ	ナデ・ケズリ	×
小戸	4	□△○	各段		○			タテハケ	ケズリ	×
池田茶臼山	4	△▽交互	一段ごと	○		○		ナナメハケ	ナナメ・ヨコハケ	—
大石塚	4	△▽交互	一段ごと	○		○		ナナメ・タテハ ケ+ヨコハケ	ナデ・ハケ+(ケ ズリ)	○
小石塚	4	△▽	各段		○		○	タテハケ+ヨコ ハケ・タテハケ	ナデ・ハケ+(最 下段ケズリ)	○
嫁廻塚	—	□○	—				○	—	—	○
上臘塚	2	□○	各段				○	タテハケ+ヨコ ハケ	ナデ	—
鶴塚	2	□	—				○	—	—	—

図2 猪名川流域における前期古墳出土円筒埴輪の属性比較

円筒埴輪の諸属性を比較したのが、図2である。長尾山古墳と万籟山古墳、そして小戸遺跡の円筒埴輪口縁部は最上段突帯のすぐ直上から強く屈曲する。対して、池田茶臼山古墳と大石塚古墳出土のそれは、小さく外方に屈曲した後、さらに外反あるいは屈曲する器台系口縁部形態をもつものと、直立する口縁部形態の二種で占められている。また、池田茶臼山古墳、大石塚古墳、小石塚古墳の円筒埴輪は三角形スカシ孔で、前二者では一段ごとにスカシ孔が四方向に施され、さらに上向きの三角形スカシ孔と下向きの三角形スカシ孔が交互となっている。一方、長尾山古墳出土資料のスカシ孔については多数の破片が出土したにもかかわらず、スカシ孔を有するものがきわめて少ないが、三角形の可能性がある。万籟山古墳、小戸遺跡、嫁廻塚古墳、上臘塚古墳、鶴塚古墳の円筒埴輪については方形スカシ孔がみられ、さらに小戸遺跡、嫁廻塚古墳、上臘塚古墳では円形スカシ孔が確認されている。朝顔形埴輪にも差違をみいだすことができる。長尾山古墳と万籟山古墳、そして小戸遺跡出土の朝顔形埴輪には一般の朝顔形埴輪にみられる頸部の突帯がみとめられない。一方、大石塚古墳と小石塚古墳、嫁廻塚古墳の朝顔形埴輪頸部には突帯がみとめられる。

廣瀬は口縁部形態とスカシ孔の形態と配置のほかにも、内外面の器面調整など技術的類似度がきわめて高いことに基づき、池田茶臼山古墳と大石塚古墳出土の埴輪をI a類、万籟山古墳と小戸古墳出土のものをI b類、そして小石塚古墳のものをI c類と分類している（廣瀬2003：p. 16）。長尾山古墳出土の埴輪は、その特徴から廣瀬分類のI b類に属することとなる。なお、廣瀬は上臘塚古墳をはじめとするいわゆるII群の埴輪をII類としている。

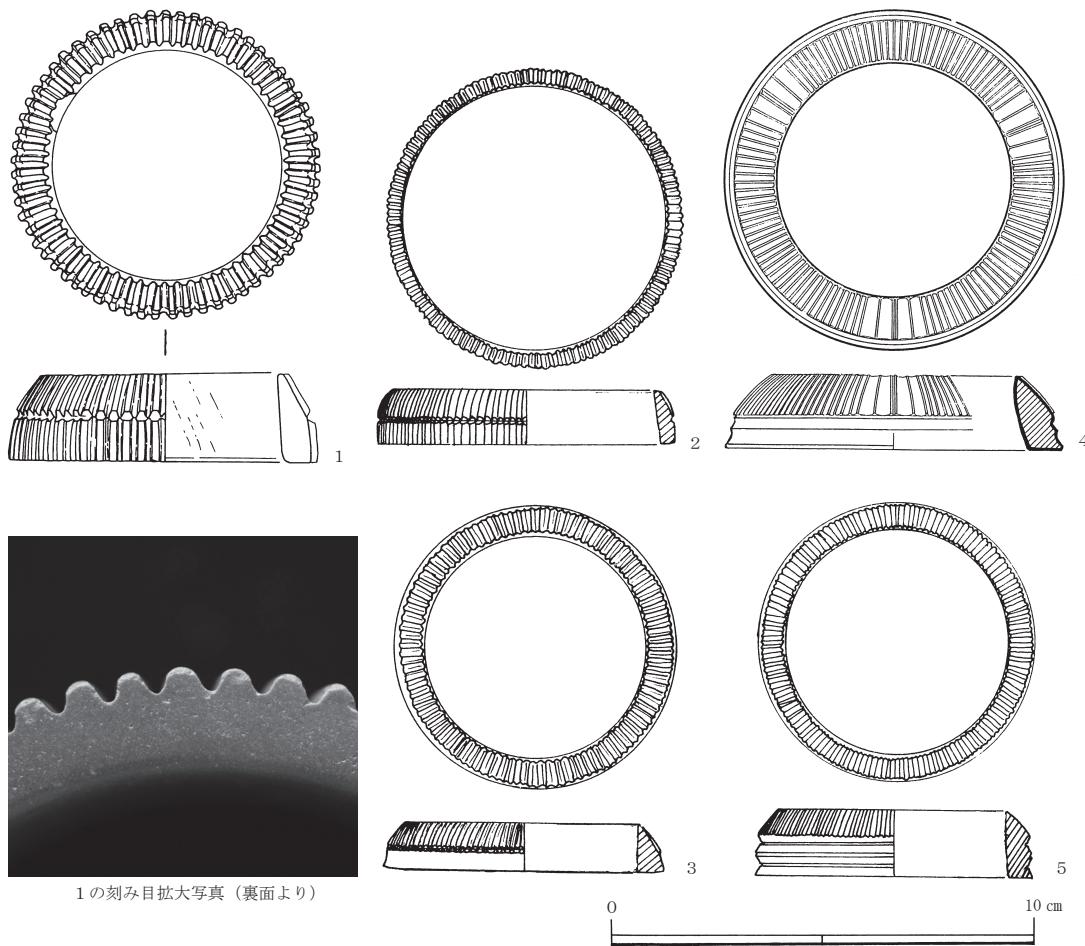
では、それぞれの時期的関係はどのように考えられようか。廣瀬はI a類と奈良県桜井市メスリ山古墳の円筒埴輪との技術的類似度の高さから一定の共時性を強調し、さらに池田茶臼山古墳の系譜をひきつつ、後出する資料として神戸市西区白水瓢塚古墳（神戸市教育委員会2008）をあげる。実は白水瓢塚古墳でも、大石塚と同様に盾形埴輪が出土している。これら形象埴輪の存在を重視するならば、少なくともI a類のうち、大石塚古墳は盾形埴輪などが出現する古墳時代前期後半⁽³⁾に属する可能性があろう。さらに上臘塚古墳、鶴塚古墳、嫁廻塚古墳はI類より後出して登場するII類（群）に属することから、廣瀬のいうI類より新しい可能性が高い。上臘塚古墳から形象埴輪が出土していることもこのような理解とは矛盾しない。ではI類に時期差をみいだすことはできるであろうか。仮にスカシ孔の形状に基づくならば、三角形スカシ孔のみの長尾山古墳、池田茶臼山古墳、大石塚古墳、小石塚古墳の段階、方形スカシ孔がみられる万籟山古墳の段階、円形スカシ孔も含まれる小戸遺跡の段階に区分できよう。三角形スカシ孔のみをもつ埴輪で構成される一群のうち、大石塚古墳は形象埴輪がみとめられることから後出する可能性が高い。さらに、隣接する小石塚古墳についても大石塚古墳と

の位置関係や埴輪棺の状況（廣瀬2003：p. 11）から大石塚より後に築造されたと想定されている。したがって、埴輪の検討からは、猪名川流域では池田茶臼山古墳と長尾山古墳が、最も古い段階に築造された古墳として抽出できよう。

4. 副葬品の検討

次に各古墳出土の副葬品について検討していきたい。以上の古墳のうち、埋葬施設が調査あるいは不時の発見などにより副葬品が部分的にでも知られている古墳としては、万籾山古墳、嫗三堂古墳、池田茶臼山古墳、待兼山1号墳、そして御神山古墳の5古墳があげられる。また、万籾山古墳の所在する丘陵において精常園を経営していた別所彰善により付近から採集された遺物、四乳爬龍文鏡1面、捩文鏡1面、石鉈4点、車輪石1点、琴柱形石製品1点、鉄鏃1点、金環1点が、京都国立博物館に保管されている。そのうち、別所氏によれば「四花鑑は同古墳から獲たものであると伝え、石鉈の或者また副葬品であったと」いう（梅原1937：p. 27）。本稿の分析では四乳爬龍文鏡と石鉈を万籾山古墳の副葬品目に加えた上で、以下の分析を進めていきたい。

4つの古墳から腕輪形石製品が出土している（図3）。嫗三堂古墳より石鉈1点、池田茶臼山古墳より石鉈1点、待兼山1号墳からは鍔形石1点、石鉈1点と車輪石3点、そして御神山古墳出土として伝えられる車輪石2点である。また、万籾山古墳周辺からは石鉈4点と車輪石1点が採集されてい



1 嫗三堂古墳 2・3・5 万籾山古墳 4 池田茶臼山古墳

図3 猪名川流域出土の石鉈

る。

複数の出土がみられる車輪石と石釧の型式について検討していこう。分析にあたっては、蒲原宏行（蒲原1987・1991）、三浦俊明（三浦2005）、森下章司（森下2005・2009）らの研究を参考とする。蒲原による石釧の細分のうち、氏が石釧2期の指標の一つとした斜面には刻み目をもち側面は二段凹帯となるもの（図3-4）の登場は、銅鏡や埴輪などの組合せにおいても、やや後出することが森下や北山峰生により指摘されている（森下2005・2009、北山2008）。そこで、側面、斜面ともに刻み目を有するもの（図3-1・2）と側面には一段の凹帯をもつもの（図3-3）を石釧A群、側面に二段以上の凹帯をもつもの（図3-4・5）、あるいは車輪石と共通する匙面をもつものを石釧B群とする。車輪石についても斜面部に沈線を施さない無刻の凹帯、あるいは匙面のものが後出することが、製作技法上の簡略化（三浦2005）や他の遺物との組合せ（森下2005・2009、北山2008）などからも追認されている。そこで斜面部の凸部と凹部の両方に沈線が施されたものを車輪石A群、凸部あるいは凹部に沈線を欠くものを車輪石B群とする。各古墳における両者の出土傾向は、図4のようにまとめることができる。

A群のみで構成される古墳として娪三堂古墳をあげることができるが、1点のみの出土であることは注意が必要であろう。ただし、図3-1は、蒲原による刻み技法a類の4つのうち（蒲原1987：pp. 124～125）、最初期段階であるa1類に該当し⁽⁴⁾、石材も初期の石製品に多い濃緑色を呈する碧玉である（岡寺1999）。

次に銅鏡を検討しよう。娪三堂古墳、待兼山1号墳、そして御神山古墳より銅鏡の出土がみとめられる。万籟山古墳からも出土している可能性が高い。娪三堂古墳からは直径14.2cmの画文帶神獸鏡が1面出土している。待兼山1号墳からは直径14.5cmをはかる唐草文帶四神四獸鏡が1面出土している。西晋段階の中国鏡であると考えられる。御神山古墳からは車輪石と同じく伝世資料ではあるが、直径22.2cmの仿製三角縁神獸鏡がみられる。福永伸哉による分類のIIc段階に属する（福永2005）。同範鏡はみとめられない。万籟山古墳周辺からは四乳爬龍文鏡1面と捩文鏡1面が採集されており、このうち、四乳爬龍文鏡については万籟山古墳にともなう可能性が高い（梅原1937）。直径は15.0cmで鋳上がりは悪く文様は不鮮明である。

以上の副葬品のありかたは、どのような配列が可能だろうか。まず、腕輪形石製品の組合せとしては、A群のみの娪三堂古墳、A群とB群の待兼山1号墳と万籟山古墳、そしてB群のみの池田茶臼山古墳に区別できよう。ただし、娪三堂古墳と池田茶臼山古墳については、それぞれ1点のみの出土であり、根拠に乏しいのも事実である、しかし、当時の聞き取りによれば、娪三堂古墳は、ほぼ未盗掘の状態で埋葬施設が発見されている可能性が高い。さらに両者が同一尾根上のわずか500mと近接した位置に築かれている点にも注意が必要である。両古墳を同一系譜のなかで築造された古墳であると仮定するならば、型式差のある石釧の出土は少なくとも被葬者の石釧入手時期差あるいは埋葬時期差とみなしうる要素であるといえよう。

古墳名	車輪石		石釧		中國鏡	仿製鏡
	A群	B群	A群	B群		
娪三堂			●		画文帶神獸鏡	
万籟山			●●		四乳爬龍文鏡	
待兼山1号	●●	○	●●	○○	唐草文帶四神四獸鏡	
池田茶臼山		○○		○		三角縁神獸鏡
御神山				○		
白水瓢塚		○○○○	●●●●●	○○○○	画文帶神獸鏡	

図4 猪名川流域の前期古墳における副葬品の比較

5. 埋葬施設の検討

娍三堂古墳、池田茶臼山古墳、万籾山古墳において、堅穴式石室が検出されている。また、長尾山古墳と小石塚古墳、そして娍三堂古墳では木棺を被覆するとみられる粘土の広がりが確認されており、粘土櫛と推定されている。娍三堂古墳では、堅穴式石室と同一墓壙に粘土櫛が併設されている特異な構造であった。これらの堅穴式石室の規模は内法で全長6.0m、幅1.0m、高さ1.2m前後と類似している。また、粘土櫛についてはそれぞれの検出状況が異なるために直接的な比較は難しいものの、粘土櫛の陥没範囲としては、長尾山古墳の5.8m、小石塚の5.3m、そして娍三堂古墳の推定4.5m程度と堅穴式石室に納められる木棺と比べても遜色のない規模の木棺が包含されていたと推定できよう。

堅穴式石室のうち、娍三堂古墳と池田茶臼山古墳では石室下部構造を含めて詳細な調査が実施されている。娍三堂古墳の調査を担当した田上雅則は、両者の石室構造を比較している（田上1992）。氏によれば、両者は墓壙底上に直接土壇状の粘土棺床を設けるという点で共通しており、池田茶臼山古墳の粘土棺床の厚さが5cmであったのに対し、娍三堂古墳のそれは5cmと薄いことから、後者がより簡略された、後にする石室構造である可能性を指摘している（田上1992）。堅穴式石室と同一墓壙に粘土櫛が構築されている娍三堂古墳が後にするという理解は、堅穴式石室から粘土櫛が派生したという理解を前提にすれば妥当な見解であるといえよう。ただし、先述の副葬品における理解とは齟齬をきたす。また、猪名川西岸の近接する二つの古墳、長尾山古墳と万籾山古墳の埴輪を比べると前者のそれがより古相の特徴を示すのにもかかわらず（本書報告参照）、前者では粘土櫛が検出され、後者では堅穴式石室がみられる。はたして、当地域における粘土櫛と堅穴式石室の関係は、単純な前後関係で理解することが可能であろうか。

粘土櫛の出現時期については、近年さまざまな見解が提示されている。高松雅文は、大阪府富田林市真名井古墳における墓壙上面における粘土の検出状況が堅穴式石室天井部に対する被覆粘土のありかたと共に共通することに着目した（高松2009）。また、木棺安置後の木棺側面への粘土の貼り付けが、堅穴式石室にみられる側壁構築と工程的に類似している点（北野1964、安村2003：p. 71）にも言及している。さらに真名井古墳の埴輪と副葬品組成が古墳時代前期前半に属することから、本古墳の粘土櫛は堅穴式石室から派生して成立した初現的な粘土櫛の構造を示すと結論づけている。

さらに近年、奈良盆地を中心とする大型古墳における埋葬施設構造の解明がすすみ、その成果を取り入れた堅穴式石室を中心とする編年案が提示されている（高松2005、岡林2008ほか）。なかでも、岡林孝作は奈良盆地東南部に位置する120m前後の前方後円（方）墳の埋葬施設の様相を軸に前期の堅穴式石室を3群にわけ、徐々に防排水機能が充実していく過程を解明した。岡林は、出現期の堅穴式石室は粘土被覆をもたず、壁体や基底部の構造が単純で壁体裏込の充填材には主に土を使用してバラスを用いないとし、しだいに天井石の被覆粘土や墓壙基底部へのバラス敷きが整備されていくとした。岡林らの見解をふまえるならば、岡林分類によるⅢ群、例えば京都府向日市寺戸大塚古墳や奈良県桜井市メスリ山古墳、奈良県天理市下池山古墳にみられる重厚な防排水構造をもった堅穴式石室から粘土櫛が派生したと理解できよう。Ⅲ群は和田晴吾による古墳編年（和田1987）の二期から三期に相当するという（岡林2008：p. 168）。したがって、粘土櫛の成立は二期以降、福永編年の前Ⅱ期以降となる。

しかしながら、猪名川河口の西方約20kmに所在する神戸市西求女塚古墳の堅穴式石室は天井石が粘土で広く被覆されており、基底部には厚い礫床がみとめられる（神戸市教育委員会2004）。石室上部

の粘土被覆は天井石上面のみならず、裏込めの上面も含めて墓壙内の石室構造全体を大きく被覆している。墓壙底のバラス敷きの厚さも50cmと非常に厚い。舶載三角縁神獸鏡をはじめとする副葬品組成と土師器の編年観から、西求女塚古墳は集成編年1期（広瀬1992）、和田編年の一期に相当する。したがって、墳長98mの前方後方墳である西求女塚古墳は、猪名川流域を含め摂津地域における最古段階の前方後円（方）墳の一つであると理解できる。その西求女塚古墳が岡林による石室分類のⅢ群に該当する粘土やバラス敷きがみとめられる点は重要である。さらに興味深いのは、長尾山古墳の粘土櫛と西求女塚古墳の被覆粘土のありかたの類似度の高さである。西求女塚古墳で想定されている墓壙埋土充填前段階におけるその姿は、長尾山古墳の粘土櫛の姿に酷似しているのである。

粘土櫛は堅穴式石室が簡素化したものであり、堅穴式石室に後出することを指摘して以来（小林1941）、その出現は古墳時代前期を二分する指標の一つとして重視されてきた（小林・近藤1959：p. 38、和田1987：p. 48、広瀬1992：p. 25）。ただし、その出現時期や出現の背景については不明な点が多い。前期前半の大型前方後円墳が集中する奈良盆地東南部において粘土櫛は少なく、前期後半以降に大型前方後円墳が連続的に造営される奈良盆地北部に初期の類例は目立つ（高橋2010）。古い類例としては、大阪府富田林市真名井古墳（北野1964）や同府羽曳野市庭鳥塚古墳（羽曳野市教育委員会2010）、奈良県御所市鴨都波1号墳（御所市教育委員会編2001）など、大型前方後円墳が築造されない地域に目立つ。ここまで検討した西求女塚古墳の堅穴式石室のありかたや長尾山古墳の時期をふまえるならば、摂津地域も古い粘土櫛が形成される素地があり、長尾山古墳のような初期の粘土櫛が登場した可能性は十分想定できよう。

6. まとめ

以上の分析では、埴輪と副葬品、そして埋葬施設について最新の研究成果を参考に、各古墳の属性を比較した。変遷をまとめると表2のようになろう。埴輪の検討からは長尾山古墳と池田茶臼山古墳が古い段階に築造された可能性が高い。両古墳出土埴輪の直接的な比較は困難だが、B群の石釧（図3-4）をもつ池田茶臼山古墳は大阪府柏原市松岳山古墳や茶臼塚古墳段階まで下るとみられることから、副葬品の内容は不明であるものの長尾山古墳が先行する可能性があるといえよう。また、娛三堂古墳は副葬品の内容から、池田茶臼山古墳に先行する可能性があるものの、埴輪を欠くため判断要素に乏しいのが現実である。円墳であることは、時期を古く遡りがたい要素であるといえよう（森岡・田中1990）。これらの課題を認識したうえで、表2では暫定的に池田茶臼山古墳に先行する段階に配置しておきたい。万籟山古墳は埴輪の比較から長尾山古墳に後出するとみられ、方形スカシ孔の

表2 猪名川流域における前期古墳の変遷

	猪名川西岸		猪名川東岸			そのほか
	伊丹台地	長尾山丘陵	五月山丘陵	待兼山丘陵	豊中台地	
第I期						西求女塚
前II期		長尾山 (娛三堂)				
前III期		万籟山・(小戸)	池田茶臼山 (待兼山1号)	(御神山)	大石塚・小石塚	紫金山 白水瓢塚
前IV期	(上臘塚)・(鵠塚)				(嫁廻塚)	五色塚

存在を重視すれば、大石塚古墳より新しい可能性もある。なお、墳形、埋葬施設などは全く不明であるが、副葬品内容から判断すると待兼山1号墳は池田茶臼山古墳に近い時期、御神山古墳は万籾山古墳より新しい時期である可能性がある。

形象埴輪をもつ点を重視すると、大石塚古墳はこれまで考えられていた段階より新しくなり、前期後半となる。円筒埴輪の差異は大きいものの、上臈塚古墳に近い築造時期が与えられる可能性がある。猪名川中流域における猪名野古墳群、桜塚古墳群の造営開始の時期、そしてその背景を考えるうえで重要な課題であるといえよう。両古墳群はともに猪名川流域において中期に継続する古墳群なのだ。これら古墳群の形成契機と奈良盆地における大型前方後円墳の移動は、古墳時代中期における河内平野への移動を含めて、今後検討する必要があろう。

註

- (1) 娯三堂古墳出土の銅鏡や土師器などとともに保管されていた遺物のなかには、家形埴輪とおもわれる破片が含まれている（森・大野1974）。ただし、その後の墳丘調査において埴輪の出土は皆無であることから（池田市教育委員会1992）、娯三堂古墳には埴輪は伴わないとして、以下の議論をすすめる。
- (2) 兵庫県川西市小戸遺跡の埴輪については金澤雄太氏（大阪大学文学研究科博士前期課程）よりご教示を受けた。記して感謝します。
- (3) 本論で用いる古墳時代前期の時期区分は、『前方後円墳集成』における区分（広瀬1992）等をもとに福永伸哉が提示した4段階区分（福永1996）を用いる。なお、福永の前Ⅲ期は、円筒埴輪のⅡ群ならびに形象埴輪が出現しつつも、I群系の円筒埴輪も継続している段階と理解する（鐘方1997）。また、前Ⅰ期、前Ⅱ期を前期前半、前Ⅲ期、前Ⅳ期を前期後半と呼称する。
- (4) 娯三堂古墳出土資料の実見に際しては、田中晋作氏（池田市立歴史民俗資料館）に格別のご配慮をいただき、記して感謝します。

参考文献

- 浅岡俊夫2001「信長に消された猪名野の前期古墳—上臈塚古墳—」『実証の地域史』村川行弘先生頌寿記念論集、村川行弘先生頌寿記念会
池田市1964『池田市茶臼山古墳の研究』池田市文化財調査報告書第1輯
池田市教育委員会1992『娯三堂古墳』
梅原末治1937「摂津萬籾山古墳」『日本文化研究所報告』第四近畿地方古墳墓の調査・上野國総社二子山古墳の調査、日本古代文化研究所
大阪大学考古学研究室2010『長尾山古墳発掘調査報告書』
岡寺 良1999「石製品研究の新視点－材質・製作技法に着目した視点－」『考古学ジャーナル』453、ニュー・サイエンス社
岡林孝作2008「堅穴式石室の成立過程」『権原考古学研究所論集』第15、八木書店
小野山節1970「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』第16巻第3号
鐘方正樹1997「前期古墳の円筒埴輪」『堅田直先生古稀記念論文集』堅田直先生古稀記念論文集刊行会
蒲原宏行1987「石釧研究序説」『古墳文化の新視覚』雄山閣出版
蒲原宏行1991「腕輪形石製品」『古墳時代の研究』8、雄山閣出版
川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号
北野耕平1964「富田林真名井古墳」『河内における古墳の調査』大阪大学文学部国史研究室研究報告第1冊、大阪大学文学部
北山峰生2008「メスリ山古墳出土石製品の検討」『メスリ山古墳の研究』大阪市立大学考古学研究報告第3冊、大阪市立大学日本史研究室
小林行雄1941「堅穴式石室構造考」『紀元二千六百年記念史学論文集』京都帝国大学文学部（1976『古墳文化

論考』平凡社を参考)

- 小林行雄・近藤義郎1959「古墳の変遷」『世界考古学大系』3日本III、平凡社
- 神戸市教育委員会2004『西求女塚古墳発掘調査報告書』
- 神戸市教育委員会2008『白水瓢塚古墳発掘調査報告書』
- 御所市教育委員会編2001『鴨都波1号墳調査概報』葛城の前期古墳、学生社
- 清水 篤1994「桜塚古墳第3次調査(S Z K - 3)」『豊中市埋蔵文化財年報』2、豊中市教育委員会
- 白石太一郎1969「畿内における大型古墳の消長」『考古学研究』第16巻第1号
- 白石太一郎1989「巨大古墳の造営」『古代を考える古墳』吉川弘文館
- 高橋克壽2010「東大寺山古墳の粘土櫛」『東大寺山古墳の研究』初期ヤマト王権の対外交渉と地域間交流の考古学的研究、東大寺山古墳研究会・天理大学・天理大学附属天理参考館
- 高松雅文2005「堅穴式石室の編年の研究」『待兼山考古学論集』都出比呂志先生退任記念、大阪大学考古学研究室
- 高松雅文2009「埋葬施設の型式学的研究－粘土櫛の編年の研究を中心に－」『2007年度共同研究成果報告書』
大阪府文化財センターほか、大阪府文化財センター
- 宝塚市教育委員会1975『摂津万籠山古墳』宝塚市文化財調査報告第7集
- 田上雅則1992「堅穴式石室について」『娛三堂古墳』池田市教育委員会
- 田中 裕2006「いわゆる「首長墓系譜研究」小考」『墓場の考古学』第13回東海考古学フォーラム、第13回東海考古学フォーラム実行委員会
- 都出比呂志1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢史学篇』第22号、大阪大学文学部
- 寺前直人2009「古墳時代前期における古墳編年の変遷」『前期古墳の変化と画期』関西例会160回シンポジウム資料、考古学研究関西例会
- 豊中市教育委員会1980『史跡大石塚・小石塚古墳－保存事業に伴なう調査報告－』
- 羽曳野市教育委員会2010『庭鳥塚古墳発掘調査報告書』羽曳野市埋蔵文化財報告書66
- 土生田純之2006「国家形成と王墓」『考古学研究』第52巻第4号
- 榎本誠一2002『兵庫県の出土古鏡』学生社
- 広瀬和雄1992「前方後円墳の畿内編年」『前方後円墳集成』近畿編、山川出版会
- 廣瀬 覚2003「摂津猪名川流域における前期古墳の埴輪とその系譜」『古代文化』第55巻第9号
- 福永伸哉1996「雪野山古墳と近江の前期古墳」『雪野山古墳の研究』考察編、雪野山古墳調査団
- 福永伸哉2004「畿内北部地域における前方後円墳の展開と消滅過程」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』大阪大学大学院文学研究科
- 福永伸哉2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会
- 藤沢一夫1961「古墳文化とその遺跡」『豊中市史』第1巻、豊中市史編纂委員会
- 北條芳隆2002「資料に即した解釈を－古墳時代研究の危機にあって－」『長野県考古学会誌』99・100号、長野県考古学会
- 三浦俊明2005「車輪石生産の展開」『待兼山考古学論集』都出比呂志先生退任記念、大阪大学考古学研究室
- 森浩一・大野左千夫1974「娛三堂古墳の遺物」『古代学研究』72
- 森岡秀人・田中晋作1990「摂津の円墳」『古代学研究』123
- 森下章司2005「副葬品の組合せ」『考古学雑誌』第89巻第1号
- 森下章司2009「副葬品の組合せと埴輪」『前期古墳の変化と画期』関西例会160回シンポジウム資料、考古学研究会関西例会
- 安村俊史2003「埋葬施設からみた玉手山古墳群」『玉手山古墳群の研究』III埋葬施設編、柏原市教育委員会
- 和田晴吾1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第2号

4. 首長系譜変動の諸画期と南四国の古墳

清 家 章

1. はじめに

小野山節の古墳の規制論（小野山1970）や地域首長連合の中で盟主的首長位が移動するという西川宏の研究（西川1964）などを受けて、首長系譜論を確立したのは都出比呂志である。都出が示した首長系譜の継続と断絶は、畿内政権の勢力交替が地方にも波及することを明らかにした（都出1988）。都出は、中期前葉・中期後葉・後期初頭の3時期⁽¹⁾に、首長系譜が断絶したり、新たな首長墳が出現するなどの画期があることを示し、これらの変化は大王権力周辺の政治的变化が地方に波及した故の現象であると述べたのであった。この首長系譜論はその後の古墳研究に大きな影響を与え、各地域で古墳の編年が行われ、都出の示した画期の追認あるいは検証が行われた。

近年この首長系譜論の再検討が行われつつある。例えば、大久保徹也は讃岐の首長系譜を整理する中で、中期に讃岐の諸地域で前方後円墳の築造が停止し、東讃に讃岐最大の前方後円墳である富田茶臼山古墳が出現することについて、ヒエラルキーと地域統合の完成と理解して都出とは異なる解釈を示す（大久保2004）。また、地方の古墳調査と研究が畿内よりも遅れ、そうした地方における古墳の位置づけが困難である点も問題である⁽²⁾。往々にして、そうした地域の古墳は都出の設定した画期に古墳が位置づけられることがあり、このことにより都出の設定した諸画期が補強されるという循環がややもすれば見られることがある。

こうした循環的思考の繰り返しは新たな知的生産を行わないばかりか、知的生産にとっては有害ですらある。こうした連鎖を断ち切るためにも、諸地方において古墳の調査と研究を着実に進めるという地道な活動に立ち戻る必要があろう。

南四国は、古墳の数が少ないこともあって、これまでの首長系譜論の俎上に上がったことがない。むしろ大久保などによって、「広大な古墳空白地域」と表現され、前方後円墳に代表される政治圏から外れる地域として理解される（大久保1997・橋本2000）。

しかしながら、前・中期古墳がまったく存在しないわけではない。わずかでも古墳の存在がわかるのであれば、その時期的・空間的位置や古墳に認められる地域間交流の内容を明らかにして、畿内政権と地方との関係を考える資料とすべきであろう。また南四国には後期後半以降200基余の古墳が展開する。これらの存在も、前・中期古墳と同様の整理を行うことにより、地方における首長系譜論について新たな視点を提示できるであろう。

もちろん南四国における古墳の位置付けについてこれまで研究がなかった訳ではない。廣田佳久は前期古墳・後期古墳の概略的位置付けを行い（廣田佳1995・1996）、橋本達也も南四国の古墳の系譜や地域間交流、横穴式石室の系譜について言及している（橋本2000・2001・2010）。廣田らの研究は、首長系譜論には直接関わっていないものの、個別の古墳の評価ではきわめて参考になる。

2. 南四国における前・中期古墳の展開

(1) 前期の古墳

まずは南四国においていかなる古墳が存在するかを確認しておこう（図1）。

高岡山古墳群 宿毛市に所在し、2基の古墳からなる。1号墳は直径18mの円墳ないしは方墳とされる。葺石はなく盛土整形の古墳で埴輪も有していない。墳丘中央に長さ4.35mの長大な木棺を礫で覆った礫槨が検出されている。頭位をS60° Eに向ける。副葬品は勾玉1・管玉13・筒型銅器1・青銅製小棒1・鉄刀1である。青銅製小棒は筒型銅器の中にあって音を発する舌であろう。2号墳は直径18mの円墳である。葺石と埴輪を有しない点や、長大な木棺が礫槨に納められている点は1号墳と共通する。頭位方向はS56° E、副葬品は勾玉4・管玉14・小玉26・石釧1・内行花文鏡1である。石釧は数個の破片に分割されているが、副葬当時からこの状態であったようで補修孔が認められる。副葬品を見れば1号墳・2号墳ともに中期に下る要素はなく、前期後半の中に位置づけられるであろう。

曾我山古墳 同じく宿毛市平田に所在する。曾我山古墳から高岡山古墳群まで指呼の位置にある。1948年に発掘され、古墳の略測図から前方後円墳との評価を受けることもあるが、直径30m程度の円墳であると理解されることが多い（廣田佳1996・橋本2000）。曾我山古墳の墳丘は失われ、略測図のみしか存在しない。現時点では墳丘規模を推測するのは困難であるが、前方後円墳と考える積極的根拠はない。副葬品は獸首鏡片・獸形鏡片・鉄刀・矛・刀が出土している。福永伸哉氏のご教示によれば、獸形鏡は複合鋸歯文を持ち、獸形のヒダの条線が細かく、前期後半に遡りうるという。鉄矛の出土は前期前半に遡るものではないから、高岡山古墳群と同じ前期後半に位置づけられよう。

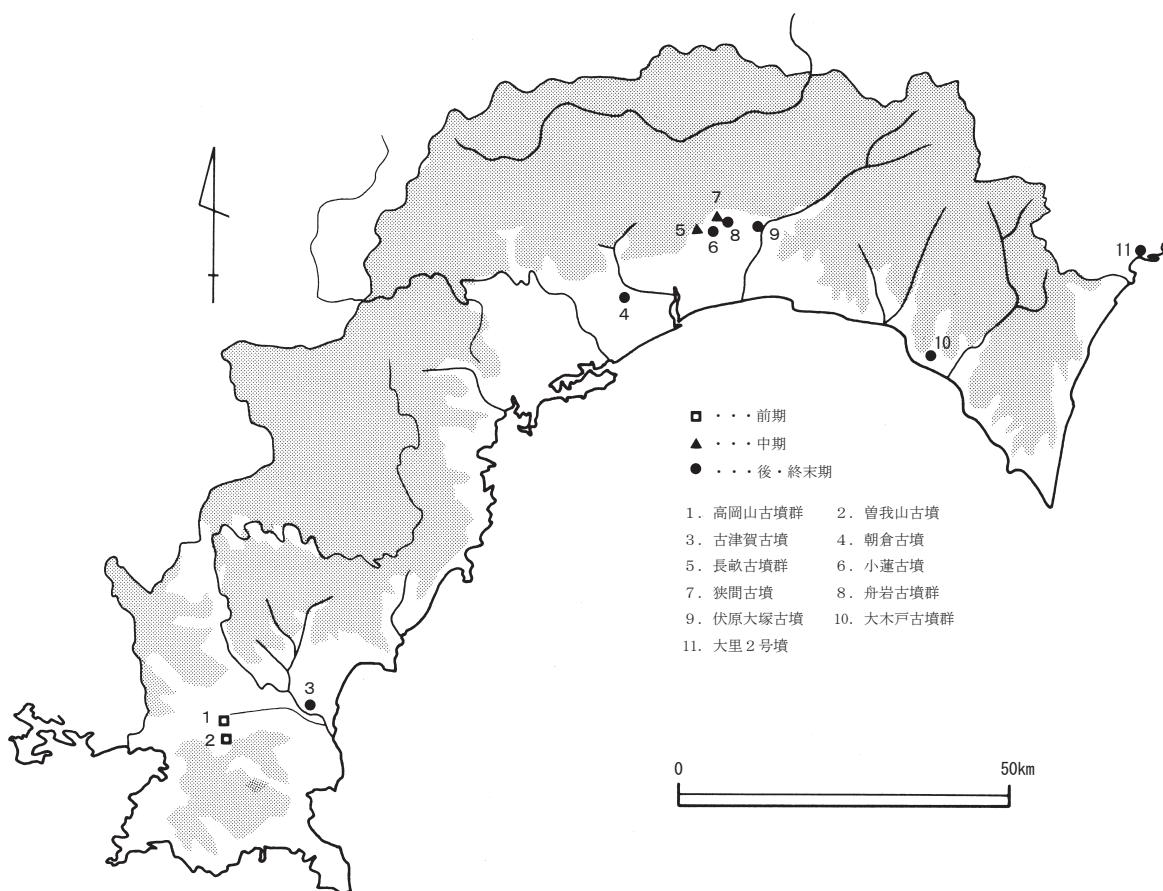


図1 南四国の主な古墳

その他の古墳 香南市香我美町に徳善天王古墳と呼ばれる古墳が存在したことが江戸時代の記録より知られている（岡本1968）。この古墳からは勾玉・管玉・銅鏡・土器が出土したとされるが、現在に伝わっておらず、墳丘・埋葬施設とともに不明なまま失われている。古墳の存否すら不明な古墳であり、遺物の内容も前期に特定できるものではない。この古墳の位置付けは困難である。また前期古墳とするならば高知平野において唯一の存在であって、幡多の前期古墳から見れば地理的に孤立した存在である。後世の交通路からも外れており、その存在した背景が推測しかねるところである⁽³⁾。このように信頼性を欠く資料であるので考察からは省くことが望ましい。

このように南四国において古墳が初めて出現するのは前期後半であり、幡多地域に集中する。高知平野においては、徳善天王古墳を除くと前期に古墳は築造されないという特徴を持つ。

（2）中期の古墳

高知平野には前期に遡ると考えられる確実な古墳は存在しない。確実な古墳は中期になってから認められる（図1）。南国市長畠古墳群である。高知自動車道建設に伴う調査によって3基の古墳が調査されている。一つの丘陵尾根上に近接して存在する、いずれも直径10m程度の小古墳である。2号墳は中期前葉、3号墳は中期後葉に属し、4号墳はTK10型式期に属する須恵器を出土するので、これは後期前半に属する。おおよそ一世代に小古墳が1基ずつ築造されているものと考えられる。

長畠2号墳は木棺が2基直葬されている。そのうち1号主体には、鉄剣2・鉄鏃10・鎌1・鍬1・斧1・刀子1が副葬されていた。頭位はN16°Eを指す。2号主体には副葬品はない。1号主体では鉄製品が副葬品の主体を占め、その中でも武器がやや多いといえる。

3号墳は小竪穴式石室を埋葬施設とする。内法長1.2m、幅0.8mと小型であり、頭位方向は不明であるが、主軸方向はN4°Eである。鉄鏃2点と土師器数点が出土しており、四国内の竪穴式石室の比較や鉄鏃の位置付けから中期後半に位置づけられている（廣田佳編1996）。4号墳は後期に属するので次節に譲ることにする。

長畠古墳群以外に狭間古墳が中期に属すると考えられるが、内容が判然としない（廣田典1979）。場所は長畠古墳群から東2.5kmの丘陵中にある。直径13m程度の小円墳で木棺3基が設置されていたようである。また、高知平野の西端にある朝倉南城山の谷古墳からは石製模造品が出土したとされる（安岡1952）が、古墳の内容が不明であり、信頼性を欠く。

いまだ未知の古墳が存在する可能性を残すとはいえ、中期の高知平野では直径（あるいは一辺）10m前後的小古墳が南国市を中心に密度薄く散在している状態であったと考えられる。近世には「北山越え」という南国市から瀬戸内へ抜けるルートがあり、このルートあるいはそれに近い交通路が古代にも存在する可能性が示されている（秋澤2006）。また、近世の豊永道や甲浦道も南国市を通る。このように南国市は交通の要にある。この立地により瀬戸内等の古墳文化の影響が及びやすく、小古墳が築造される要因になったと考えられる。

（3）南四国における前・中期古墳と瀬戸内

瀬戸内～南予と幡多の前期古墳 幡多地域において古墳が前期後半に出現する背景には、どのような影響があろうか。すなわち、畿内政権の影響が幡多に及んだのか、それとも異なる地域からの影響であろうか。資料を素直に解釈するならば畿内からの直接的な影響とは考えにくい。

高岡山古墳群の埋葬施設は基本的に東頭位であり、これは四国瀬戸内の前期古墳と共通する⁽⁴⁾。また礫槨は畿内前期古墳の典型的な埋葬施設とはいせず、竪穴式石室の簡略形態といえるものである。

腕輪形石製品の中で普及品とも評価（北條1990）される石鉈が補修されていたことも重要である。石鉈自体が、幡多の首長にとっては入手しがたい財であり、それを配布していた畿内政権との交流は密なものではなく、一時的な交流か間接的な交流であったことを示すものであるからだ。筒形銅器が極端に小型であることは石鉈と共に通した事情であるとも考えられよう。そもそも高岡山古墳群と曾我山古墳は方墳あるいは円墳であり、規模も大きくない。畿内政権と直接関わるような勢力でなかったからこそ、前方後円墳ではなく円墳あるいは方墳となった可能性も考えられる⁽⁵⁾。

以上の状況を鑑みると、幡多の首長墳は、南予を含んだ瀬戸内勢力の影響下で成立した可能性が高いと言えよう。少なくとも畿内政権との密な交流を伺うことはできないのである。

長畠古墳群と瀬戸内 では、中期に高知平野に出現する長畠古墳群はどのような勢力との関係を示すのか。橋本達也も示すとおり、長畠古墳群は、副葬品の鉄鏃や刀剣からその供与先を特定することは困難であるが、瀬戸内へぬける交通の要所に古墳はあることから考えるとやはり瀬戸内の勢力との関係が浮上しよう（橋本2010）。ただ、その橋本も評価するとおり、長畠古墳群に見られる武器の流入は一時的であり、武器に示される軍事的交流はきわめて低調で希薄であったと考えられる（橋本2010）。

前期から中期への画期 前期後半に南四国において古墳が築造され始めるという点は、全国的な古墳築造の動きと対応しよう。畿内の中においても、前期前半に古墳が築造される地域は限定されており、のちに首長系譜と認識されるような小地域ごとに古墳が築造されるのは前期後半である。

中期になると古墳築造が高知平野で始まる。その一方で、前期古墳が築造された幡多での古墳築造が停止する。このように南四国全体で見れば、首長墳の造営地が変化しているのである。こうした現象 자체は、都出が示した首長系譜の継続と断絶に大局的には一致するものと言えよう。時期的には都出の言う中期前葉の画期に相当する。

副葬品の内容が、高岡山古墳群の鏡・石鉈・筒形銅製品などの祭祀品から、長畠2号墳の武器主体の副葬品となっており、頭位方向が南北方向に変化することも興味深い⁽⁶⁾。祭祀的威信財から武器へ内容が変化しているわけで、その副葬品を供与した勢力が異なっていると考えられ、頭位方向の差異も異なる勢力の影響を考えることが可能だからである。

ただ、先述の通り、高岡山古墳群にせよ長畠古墳群にせよ畿内の諸勢力から直接的な影響や副葬品供与があったとは考えがたい。前方後円墳がなく、墳丘も小規模であり、副葬品も乏しいからである。むしろ、瀬戸内の勢力を介して間接的に南四国の勢力は影響を受けたと考えるべきである。その瀬戸内でも、古墳時代中期になると前期に比して前方後円墳が築かれる地域が限定され、あるいは前方後円墳が築造される地域が変化する。その中で幡多地域で古墳築造が停止し、長畠古墳群が新たに高知平野に出現するのである。このことは、少なくとも瀬戸内と南四国の首長墳が連動している可能性を示している。また、幡多地域の前期古墳と高知平野の中期古墳はその主要な交流先が瀬戸内であっても、その中で異なっていた可能性が考えられるのである。

3. 南四国における後・終末期古墳

（1）後・終末期古墳の概要

中期以前の南四国には十基未満の古墳しか知られていないかったが、横穴式石室導入後、古墳の数ならびに分布範囲は拡大し、後・終末期古墳は200基余を数える。横穴式石室導入後、最初は高知平野を中心に散在するように分布し、TK209型式期に古墳の数が急増する。ただその勢いはTK217段階には

早くも急速に衰えるようである。

南四国の横穴式石室は大きく3型式に分類される。明見3号型⁽⁷⁾・舟岩型(東1997)・角塚型(山崎2003)である。それぞれの詳細については前稿(清家2010)を参考にされたいが、その内容をかいつまんで説明すると以下のようになる。

明見3号型は玄室の長さが短く、玄室から羨道部に向かって段を有する石室である。玄室面積は4m²以下の小型に属する石室がほとんどである⁽⁸⁾。側壁と天井石が遺存する古墳は明見彦山3号墳しかないが、前後左右からやや急な持ち送りが行われている(図2)。

舟岩型は、畿内型横穴式石室に類似する石室で、これまで筆者も畿内系と呼称していた(清家2006・2007、図2)。玄室は、幅に比して長さが2倍以上の細長い形態を持つものが多い。南四国で最も数の多いタイプであり、その玄室面積から特大型(14m²以上)・大型(10m²以上14m²未満)・標準型(4m²以上10m²未満)に細分される。角塚型は、朝倉古墳だけがこれに該当する。香川県角塚古墳石室に類似し、奥壁が基本的に1枚で構成され、長方形の玄室と平天井を持つ。玄門立柱石が羨道部にせり出す(図2)。

(2) TK10型式期～TK43型式期の古墳とその展開

中期までと同様にこの時期における古墳の数は多くない。長畠4号墳・明見彦山3号墳・蒲原山東1号墳・同2号墳・高間原I号墳・伏原大塚古墳などがこの時期に所属しよう。伏原大塚古墳以外の古墳は規模や石室形態がよく似ており、平面形や遺存する壁体などから明見3号型に基本的に属すると考える。明見3号型の諸古墳は南国市明見・同市岡豊・高

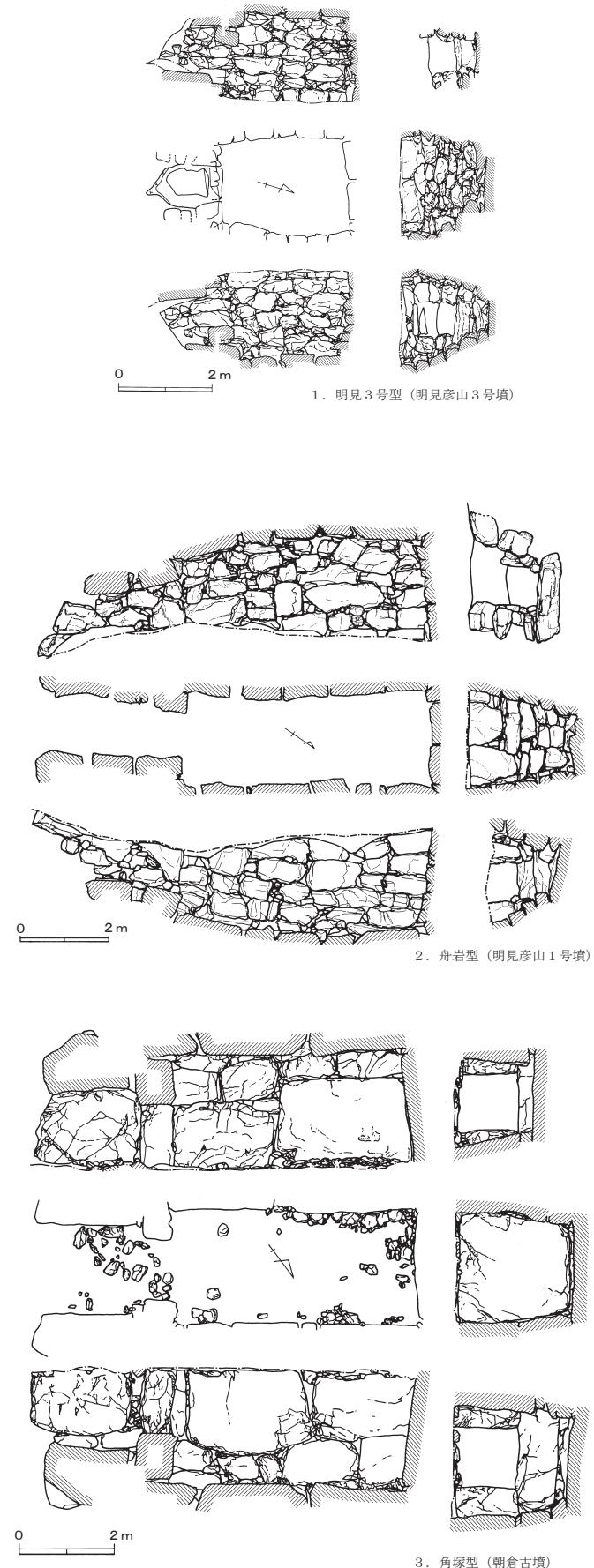


図2 横穴式石室の型式

表1 明見3号型石室墳副葬品

古墳名	副葬品
長畠4号墳	鉄鏃（長頸鏃含む）・馬具・鎌・鋤先・斧・刀子・耳環・管玉・ガラス玉・須恵器（高坏・短頸壺・広口壺ほか）ほか
明見彦山3号墳	須恵器（子持ち壺・高坏ほか）・勾玉・管玉・鉄鏃・耳環・大刀・刀・鋤先・轡・鎧
蒲原山東1号墳	須恵器・土師器・管玉・鉄鏃（長頸鏃含む）・刀・斧・刀子・鎌・ヤリガンナ
蒲原山東2号墳	須恵器
高間原1号墳	須恵器・土師器・管玉・小玉・鎌・鉄鏃・刀

知市大津という狭い範囲に分布する。

長畠4号墳は、これまで竪穴系横口式石室として評価されてきた（廣田佳編1996・清家2010）。長畠4号墳は削平によって天井部を失い、基底石から3～4段の石積みが残された状況であったため、その全体像の復元が難しい。しかしながらその玄室平面形や、玄門

部に段を持ち羨道部が短いという特徴は、明見3号型に類似する。明見彦山3号墳や蒲原山東1号墳と近接することから考えて、明見3号型あるいはその祖型に当たる可能性が高い。

明見3号型の古墳は、墳丘も直径10m未満がほとんどであり、石室自体が小型であるので高い階層に属するとは考えがたい。副葬品を見てみよう。蒲原山東2号墳は大きく破壊を受けており、その内容が不明であるが、それ以外の古墳は副葬品の内容がおおよそ判明している（表1）。いずれの古墳も金銅装馬具こそ副葬されないが、長頸鏃（長畠4号墳・蒲原山東1号墳）や装飾須恵器（明見彦山3号墳）を副葬する場合がある点は興味深い（表1）。

伏原大塚古墳の画期性 明見3号型石室が南国市を中心とした限られた範囲で分布する一方で、物部川右岸にある香美市土佐山田町に伏原大塚古墳がTK43型式期に築造される。墳丘は一辺35mを計る方墳とされ、墳丘規模は県内最大級の古墳である。また県内唯一の埴輪を持つ点も特筆される。発掘当初は竪穴式石室とされていたが、近年は長方形の玄室を持つ横穴式石室であったと考えられている。平面形は畿内型に類似する舟岩型石室であろうと推測される。舟岩型石室はTK209型式期以降に高知平野で主体となる石室であり、伏原大塚古墳はその導入期の古墳であると評価できよう。伏原大塚古墳石室は、玄室面積14平方m²の特大型石室になる可能性が高い。金銅装馬具・複数の装飾須恵器・多量の須恵器などの副葬品も、他の同時期の古墳を圧倒し、上位の古墳が持つべき副葬品をすべて取りそろえている。すなわち伏原大塚古墳は墳丘規模・石室規模ともに高知の古墳としては突出した大きさを持つ上、舟岩型石室の初現である可能性があり、県内唯一の埴輪を持ち、優秀な副葬品を持つ記念碑的な古墳であるわけである。

こうした記念碑的な古墳が、少ないながらもそれまでの古墳築造の中心地であった南国市市域ではなく、それを避けるように高知平野の東端に近い物部川右岸の土佐山田に築かれることは注目しておく必要がある。これ以降、土佐山田は南国市と同様に横穴式石室墳が築かれる有力な地域となるのである。

この時期の古墳の展開を総合すると、物部川右岸の土佐山田に突出した存在である伏原大塚古墳が存在し、それ以外の古墳は大きな格差を持って南国市を中心に散在しているとまとめることができよう。盟主的首長墳である伏原大塚古墳とそれ以外という2極化構造となっている。

（3）TK209型式期における古墳展開

TK209型式期段階になると、横穴式石室墳が高知平野全体に展開する。明見3号型のほとんどが前段階に属すると考えられ、角塚型の朝倉古墳が次段階に属するので、本段階には基本的に舟岩型石室が展開していることになる。未調査の古墳が多いので、明確な時期が判明する古墳は少ないが、調査が行われた舟岩型石室の大部分がこの段階に属しているので、多くの舟岩型石室墳はこの段階に属している。舟岩型は特大型・大型・標準型に分けることができる。その分布と展開の状況から、石室

の規模が階層差を示し、それぞれが配下に置く領域や集団の規模が異なることは筆者がこれまでにも繰り返し述べてきたところである（清家2006・2007）。すなわち大型石室は南国市岡豊を除いて散在的に分布することが明らかである。試みに大型石室墳分布のティセンポリゴンを作成したところ、大型石室墳が河川や丘陵で区画される領域毎に存在する様子がうかがえる（図3、清家2006・2007）。大型石室墳はそうした領域を代表するレベルの首長墳であるといえる。

TK209型式期段階では特大型は小蓮古墳1基だけであり、その周辺には大型石室墳を複数含む舟岩古墳群が存在する。大型石室墳が河川や丘陵で区画される領域を代表する首長の墳墓であるとするならば、その大型石室墳に近接しながら隔絶した規模の石室と墳丘を持つ小蓮古墳は、さらに広い地域を代表する首長である可能性が高い。その範囲がどの程度であるかは古墳調査が少ないので容易に判断はできないが、少なくとも高知平野レベルの範囲を代表し、領域首長を統合する盟主的存在であったのである。すなわち高知平野を代表する盟主的首長墳としての小蓮古墳、河川・丘陵で区画される領域の首長墳たる大型石室墳、さらに下位に位置する標準型石室墳という階層構造が成立していた。

なお、舟岩古墳群の評価をしておきたい。舟岩古墳群は土佐最多の古墳から構成される古墳群であり、大型石室が4基も存在する。他の大型石室墳は分散して分布し、河川や丘陵で区切られる領域に1～2基しか存在しないことと比較すれば特異である。長頸鏡や金銅装馬具が副葬される標準型石室墳がごくわずか存在するが、それらの大部分は舟岩古墳群に属している。舟岩古墳群は、盟主的首長墳である小蓮古墳と指呼の位置に存在し、石室石材の積み方などにも共通点がある。すなわち、高知平野の盟主的首長を支える有力集団の古墳であって、それが故に石室や副葬品が他の古墳よりも優位にあるのだと考えられる⁽⁹⁾。

このようにTK209型式期では高知平野において急速に古墳数が増加し、少なくとも3段階以上の階層構造も成立するのである。小蓮古墳と舟岩古墳群の存在から、高知平野の盟主的存在は南国市岡豊にあったことが明らかである。

（4）TK217型式期以降の古墳と階層秩序

TK217型式期段階になると築造される古墳数は少なくなるようである。これまで知られている中ではTK217型式期段階まで下る大型石室墳は朝倉古墳だけのようである。それ以外は標準型石室がわずかに存在しているだけに過ぎない。その朝倉古墳は、これまでの舟岩型石室とは異なり、角塚型石室である。巨石を用いて玄室・羨道を造る。開口後幾度も人の手が入ったようで、2008年から2009年にかけて行われた高知大学の調査では須恵器が20点弱と鉄鏃・刀子の破片等が出土したにとどまっている。

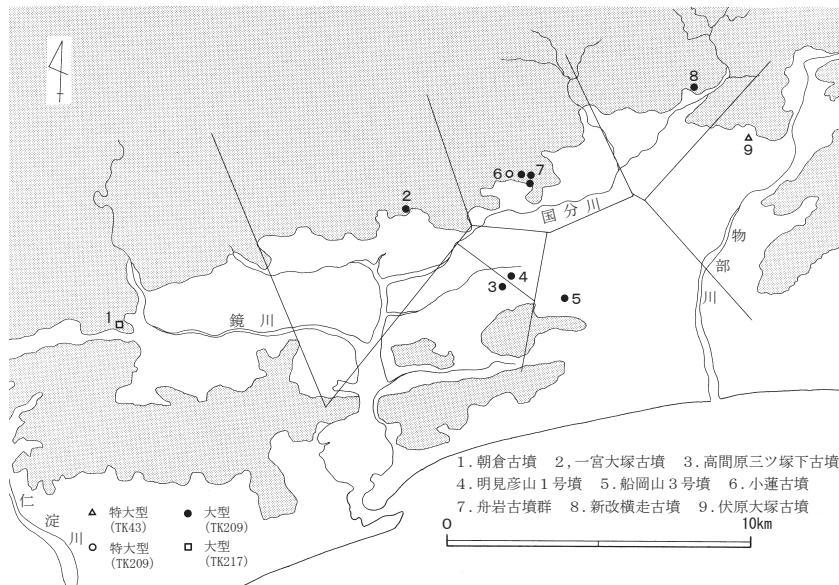


図3 高知平野における特大型・大型石室墳の分布とティセンポリゴン

る。しかし明治時代の青年団による調査によれば「銀装の馬具」・甲冑・鉄鏃・須恵器が出土したとされる。当時の出土遺物は現代に伝わっておらず、出土遺物の内容をそのまま受け取るわけにはいかないが、金銅装馬具が副葬されていた可能性は高いと言えよう。高知大学の調査では長頸鏃の頸部が出土している。このように見ると大型石室に金銅装馬具と長頸鏃という組み合わせは引き続いて存在したといえよう。前段階と異なるのは大型石室が朝倉古墳だけとなったことである。朝倉古墳は大型石室の中でも特大型に近い規模を持つ。この段階の盟主的首長墳と言えよう。

また、朝倉古墳以外に大型石室墳がなく、標準型石室が数基点在している様相も前段階とは異なる古墳分布である。この段階の古墳の副葬品は判然としないが、前段階の副葬品と大きく異なることは考えにくい。このように考えると盟主的首長墳と少数の標準型古墳という2極化が進んだと評価できるであろう。この状況はTK43型式期段階の状況と似ているように見えるがそうではない。TK209型式期段階に存在した領域首長が姿を消したところ見ると、朝倉古墳被葬者が盟主的首長の地位に就くと同時に高知平野の諸地域をも直接掌握していた可能性が考えられるのである。TK217型式期段階とTK43型式期段階とは2極化している点で状況としては似ているが、その内実は大きく異なるものと言えよう。

4. 首長権の移動とその背景

(1) 不安定な首長権継承

これまでにもいくつかの論考で繰り返し指摘したところであるが（清家2006・2007）、古墳時代後期以降、高知平野の盟主的首長墳は同一地域に安定して築造されず、時期毎にその築造地域が変化しているのである。

まず高知平野の東部に伏原大塚古墳が築かれる。他の領域では、小型の古墳が築造されているものの明確な大型古墳の存在は知られていない。伏原大塚古墳は高知平野に大型古墳が築造される端緒となる古墳であり、TK43型式期段階では高知平野最大の古墳であり高知平野の盟主的首長墳といえる。

次の段階には、最大規模の古墳は小蓮古墳であり、高知平野の中部北側にある岡豊に築造される。小蓮古墳の東側500mには大型石室墳を複数含む舟岩古墳群が築かれている。高知平野の勢力の中心は岡豊にあることは明白である。この段階における最大規模墳の小蓮古墳が盟主的首長墳であることは間違いない。

TK217型式期段階になると、大型古墳は多くの地域で築造を停止する。しかし、この段階において平野西部で大型石室墳の朝倉古墳が築造される。高知平野西部においては朝倉古墳以外の古墳については詳しいことが知られていないので、詳述はできないがこの段階にいたって初めて大型古墳を築造した可能性もある。

さらに付け加えれば、朝倉古墳以降、7世後半には古墳築造は行われず盟主的首長の動向を考える資料を欠いてしまう。さらにその後、国府は南国市岡豊に営まれる。盟主的首長墳の築造場所が政治的中心を反映するとすれば、政治的中心は、7世紀後半の空白を経て、朝倉古墳のある高知平野西端から国府のある高知平野中央部に移動すると言えるのだ。

このように後期から終末期においては盟主的首長権の継承が不安定であり、あるいは政治的中心が移動することは明らかである（図4）。

盟主的首長墳が移動する背景を特定することは困難であり、多様な要因が考えられる。考えられる要因の一つには、中期以前に古墳築造がなかったことに示されるように、地域的政治秩序が整えられ

ていない中で、急速に階層秩序が構築されていったことにあると考えている（清家2011印刷中）。畿内を中心として本格的な国家形成が進行し、政治組織や地方支配の体制が急速に整えられていく。高知平野においてもその対応が求められる。こうした状況下で、秩序構築の主導権をめぐる争いが首長間にあった可能性を考えるのである⁽¹⁰⁾。

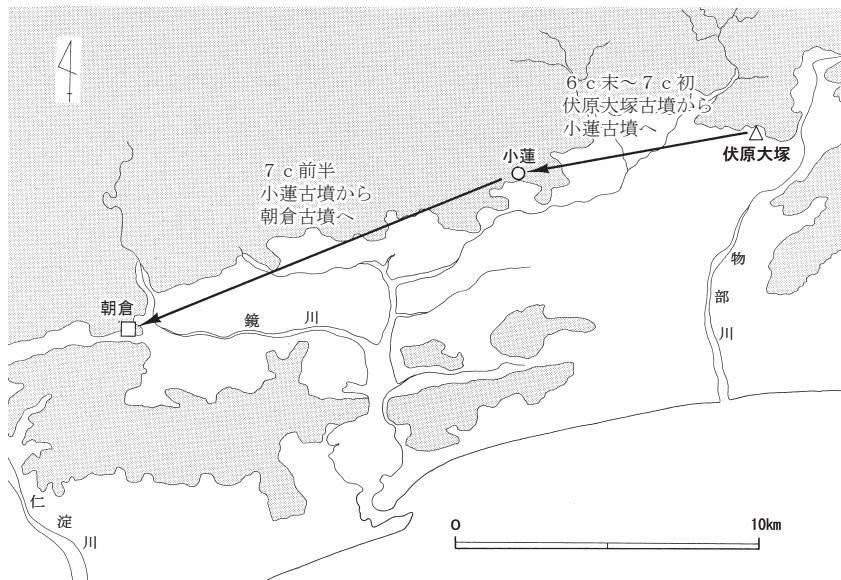


図4 盟主的首長墳の移動

（2）角塚型石室の分布にみる首長系譜変動の連動性

盟主的首長墳が移動する背景には内的な動きだけではなく外的な刺激も考えられる。TK209型式期段階で小蓮古墳を頂点とした階層秩序は持続しないことは先に述べたとおりである。盟主的首長墳は高知平野西端の朝倉古墳に移動する。

先述の通り、朝倉古墳は角塚型に所属する。角塚型は香川県観音寺市にある角塚古墳を標識とし、瀬戸内を中心に分布する石室型式である（図6）。朝倉古墳の石室は瀬戸内の影響を受けて成立した可能性が高い。朝倉古墳は高知平野の西端に位置する。朝倉古墳のさらに西側にある仁淀川を遡上して瀬戸内へ抜けることも可能である。

大久保徹也は四国各地に角塚型石室が拡散する動向から、四国全体につながりができる際の新たな活動をみる（大久保2009）。四国全体につながりができる際に、土佐の勢力にあっても対応が迫られることになる。

筆者は前稿において、小蓮古墳は南四国太平洋沿岸にある四万十市古津賀古墳や海陽町大里2号墳と石室が類似していることから、小蓮古墳被葬者は太平洋沿岸のルートを掌握していたとの見解を示している（清家2010）。TK217型式期段階になって、四国全体のつながりや瀬戸内沿岸交流がより重視される中で、太平洋沿岸を重視する小蓮後継勢力から、瀬戸内との繋がりの強い朝倉の勢力が盟主的首長の地位を奪取したと考えている。

角塚型石室の分布にみる広域的政治変動 朝倉古墳が瀬戸内の勢力と結びついていることから、広域的政治的変動と連動して盟主的首長墳の移動が行われたことが推測できる。角塚型石室の分布をさらに詳しく見ることによって、この点をさらに掘り下げたい。

角塚型石室は九州からの系譜をひきつつ、複室構造石室が瀬戸内で独自に変化した石室であることが知られる（中里2009）。分布を見ると瀬戸内に点的に分布している様子が理解できる。これらの石室は地域を隔てていても、平面規格や構築方法に共通点があるので石室築造に関し情報が共有されていたことが明らかとなっている（中里2009）。

そこで注目したいのは角塚型石室墳のそれぞれの地域における築造場所である。角塚型石室の標識となった角塚古墳は香川県観音寺市に所在する。讃岐では古墳時代前期以来、東讃が古墳築造の中心地であった。古墳時代後期、とくに後期後半以降、寒川・高松東部・高松西部・阿野・仲多度・三豊

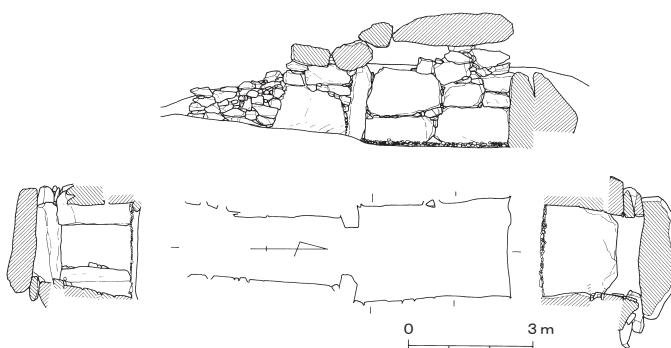


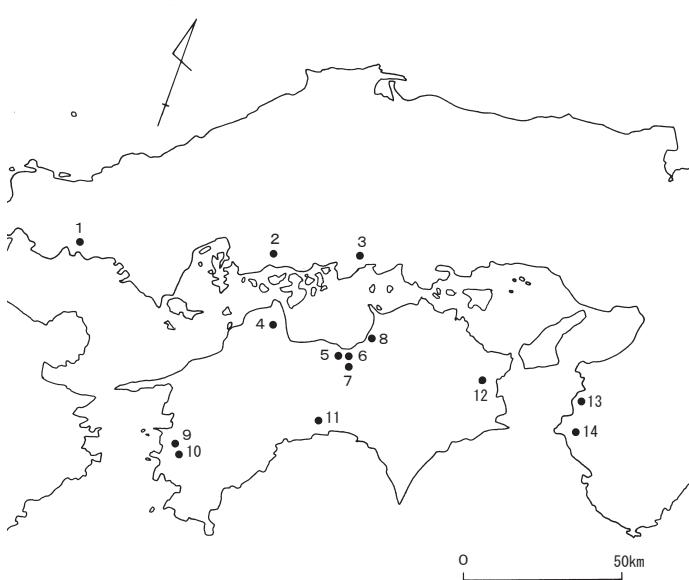
図5 天満1号墳石室

した規模の古墳となる。

伊予においても基本的な現象が認められる。角塚型石室を内包する宇摩向山1号墳は1辺70m×55mの巨大方墳である。宇摩地域は古墳時代後期に東宮山古墳や経ヶ岡古墳という首長墳が築かれ始める新興勢力であり、TK209型式に至って向山1号墳という東予全域あるいは伊予の盟主的首長墳を輩出する。

すなわち、讃岐・伊予・土佐では6世紀以降に台頭し盟主的位置を奪取した首長墳に角塚型石室が導入されているという共通点がある。

さらに注目すべきは角塚型石室あるいは角塚型と関係を持つ石室が近畿地方にも存在することである。紀伊にある有田川町・天満1号墳（図5）は、やはりTK209型式～TK217型式の須恵器を出土する。奥壁は大きな正方形の鏡石を置き、天井石までの間に補助的な石材を積んでいたと推測される。玄門は、立柱石が羨道側にせり出し、楣石を持つ。これまで天満1号墳は岩橋型石室の変容として理解されてきた⁽¹¹⁾が、むしろ角塚型との類似点に着目したい。少なくとも角塚型の影響を認めるべきである。また、石室の上半部を失って不明な点は多いものの、奥壁や玄室平面形などの類似から御坊市・岩内



1. 岩畠1号墳 2. 大坊古墳 3. 梅木平古墳 4. 七間塚古墳 5. 原峯1号墳 6. 宝洞山1号墳 7. 向山1号墳 8. 角塚古墳 9. 松ノ本古墳 10. 榎木駄馬古墳 11. 朝倉古墳 12. 大坊古墳 13. 天満1号墳 14. 岩内1号墳

図6 角塚型石室と関連する石室の分布

に大型古墳が併存するが、その中でも三豊地域では母神山・椀貸塚・平塚・角塚という大型石室墳が継起的に築造され、他地域と比較しても突出した勢力を誇る（大久保2004）。三豊地域は後期前半までは顕著な首長墳が作られない地域であって、後期後半の大型古墳は新興の勢力と呼べるものである。TK217段階には、他地域で大型古墳の築造が停止し、角塚古墳が讃岐で突出

1号墳も天満1号墳がさらに変化した石室の可能性が高い。これらの古墳は紀ノ川流域ではなく、前者は有田川、後者は日高川流域にある。すなわち紀中に位置している。紀中は古墳時代を通して顕著な首長墳が築かれず、古墳時代後期の紀伊では岩橋千塚古墳群に代表されるように、首長墳はおもに紀ノ川流域に築造される。その岩橋千塚古墳群は6世紀末には衰退する。それに代わるように紀中に天満1号墳や岩谷1号墳が築かれるのである。両者は墳丘規模がそれぞれ直径約20m・1辺19mと大きくなないので紀伊の盟主的首長墳という評価を行うには躊躇を覚えるが、6世紀代に隆盛を誇った岩橋千塚古墳群が衰退する中で出現した新興勢力との評価をおこなうことは妥当で

あろう。

大久保の言う角塚型石室の拡散（大久保2009）は四国にとどまらず、紀伊にも及び、新たな繋がりは近畿の勢力にも及んでいることが明らかである。他地域での首長墳の築造が停止される中、後期後半以降に台頭してきた新興勢力がTK209型式期以降に盟主的地位を獲得しつつ、そうした新興勢力に角塚型石室が採用されているのである。まさに首長系譜の変動がここに認められ、そうした変動が瀬戸内から紀伊にかけて連動して存在し、南四国においてやや遅れる形で追随するという様子が観察されるのである。

7世紀において紀伊の岩橋千塚古墳群が衰退したと述べたが、岩橋千塚古墳群は紀氏の奥津城であったと考えられる。紀氏は畿内政権下にあって瀬戸内航路を掌握した氏族である（岸1963・栄原1999）。それに代わるように新興勢力が紀伊から瀬戸内の盟主的位置を占めたことから、当時の交通の大動脈である瀬戸内の交通路の掌握についても、新興勢力が大きく関わることになったことは想像に難くない。瀬戸内の交通路は畿内政権にとっても外交や流通にきわめて重要なルートである（図6）。そこに新興勢力が台頭してくることは畿内政権と無関係に起こることではないであろう。すなわち角塚型石室墳で認められる首長系譜の変動は畿内政権の動向と連動する可能性が考えられる。その具体相については今後の課題としたいが、小野山節の古墳規制論の中では、6世紀末～7世紀初頭にも蘇我氏の台頭による規制があったことが指摘されていることが想起される（小野山1970）。今後検討に値する課題と言えよう。

5. まとめ

南四国における首長墳の築造動向を示した上で、首長墳の築造地域が変動する実態を明らかにしつつ、その背景を探った。首長墳の築造地域の変動という点で本項の内容をまとめ直すと以下のようになろう。

- ①古墳は前期後半に幡多地域に出現する。
- ②中期前葉には幡多地域での首長墳築造は途絶え、新たに高知平野に古墳が築造される。
- ③後期になると横穴式石室墳が高知平野を中心として展開し、古墳数が増加する。
- ④後期後半から終末期にかけて伏原大塚古墳→小蓮古墳→朝倉古墳と高知平野の盟主的首長墳は築造場所を移動する。
- ⑤朝倉古墳は角塚型石室を持ち、この石室は瀬戸内の勢力と関係し、近畿の勢力にも通じることから、小蓮古墳から朝倉古墳への盟主権の移動は、畿内勢力の動向が影響を及ぼしている。
- ⑥における画期と変化は、都出比呂志のいう首長系譜の画期と一致する（都出1988）が、南四国の前期古墳と中期古墳について、畿内政権との直接的関係を問うことは難しい。むしろ瀬戸内勢力との関係で理解をするべきであろう。瀬戸内勢力自体が畿内政権との関係や影響をどのように被っているかは今回は示すことができなかった。ただ、都出のいうように畿内政権の勢力交替が地方に波及する場合も、南四国には二次的・三次的な影響を被った可能性が高い。首長系譜論の変動には二次的影響という視点も今後加えていくべきと考える。
- ⑦における盟主的首長墳の移動は、古墳時代後期以降においても政治的中心が安定しない地域も存在するということを示していることで重要である。国家形成の画期を古墳時代中期後半や後期に求める研究者が多いが、南四国では政治的安定が未だなされていない。

こうした状況下で⑤の小蓮古墳から朝倉古墳に認められる盟主的首長墳の移動については、瀬戸内

における盟主的首長墳の変動と連動した動きであることを示し、この背景には畿内政権の動向が影響しているとしたのである。首長系譜変動論では、その変動に畿内政権の関与や影響があったかどうかが一つの焦点であったが、少なくとも朝倉古墳の段階にはそれは認められるのである。

以上、南四国における首長墳の動向から首長系譜論を再検討してきた。乏しい資料ながらも、前・中期古墳の検討から畿内政権とともに瀬戸内との関係を明確にする必要性が顕在化した。また、南四国ならではの盟主的首長墳の移動の実態も明らかにできたといえる。これらのことから、首長系譜論を検証し、畿内政権と地方勢力の関係を再構築するためには、地方からの視点と地域の古墳研究を地道に行うことが重要であることがあらためて明確になった。その意味で本稿は研究のスタート地点に立ったに過ぎないが、上記の必要性が伝われば幸いである。

本稿を執筆するにあたり、福永伸哉氏と大久保徹也氏から格別のご教示を、荒井順子氏には製図作業にご協力いただいた。心より感謝申し上げます。

注

- (1) 都出1988には「5世紀前葉」・「5世紀後葉」・「6世紀前葉」と記されているが、相対編年表記に改めた。
- (2) たとえば杉井は、肥後の古墳編年についてそのような懸念を表している（杉井2010：p.134）。
- (3) 中期や後期以降の古墳分布から外れた位置にある。
- (4) 宿毛の西側には海を挟んで日向がある。しかしながら、日向における前期古墳の埋葬頭位は北方向が卓越している。このことから幡多の古墳は日向の影響を受けたのではなく、瀬戸内～南予の影響を受けたと考えるのである。
- (5) 大久保徹也も土佐のような前方後円墳不在地域は、前方後円墳が存在する瀬戸内を介して四国外と間接的・二次的につながると言う（大久保1997）。
- (6) 畿内においては、頭位方向の規則性は中期に弱くなるので確たることはいえないが、幡多の前期古墳が東頭位であるのに長畠古墳群の埋葬施設が北頭位中心であることは、両地域の古墳と交流があった地域を明らかにしていく上で今後注意していく必要がある。
- (7) 明見3号型は、前稿（清家2010）では明見彦山3号墳型と呼んでいたが、名前がやや長すぎて使いづらいので改称する。
- (8) 明見彦山3号墳石室は5平方メートルであるが、標準型の中でも小規模である。
- (9) なお、標準型石室墳でありながらも金銅装馬具を持つ高松古墳も小蓮古墳からやや離れてはいるものの、図3にあるよう小蓮古墳を中心としたティセンポリゴンの中に存在するので、小蓮古墳の被葬者を支えるものとして優遇された可能性が考えられよう。
- (10) ただ、この時期の盟主的首長墳の移動に畿内政権の影響などの外的要因があった可能性を否定しない。
- (11) 黒石哲夫によって、天満古墳群・岩内古墳群は擬似岩橋系石室に分類されている（黒石2005）。

参考文献

- 秋澤 繁 2006 「阿波・伊予に至る諸道を歩く」『土佐と南海道』街道の日本47 吉川弘文館：pp. 5-40
東 潮 1997 「大里2号墳をめぐる諸問題」『海南・大里2号墳発掘調査報告書』海南町教育委員会、徳島：pp. 66-83
大久保徹也 1997 「四国における前方後円墳の不均等分布」『中四研だより』第4号 中四国前方後円墳研究会、香川：pp. 3-5
大久保徹也 2004 「讃岐の古墳時代政治秩序への試論」『古墳時代の政治構造』青木書店、東京：pp. 80-104
大久保徹也 2009 「大野原古墳群の基礎的検討」『一山典還暦記念論集 考古学と地域文化』一山典還暦記念論集刊行会、徳島：pp. 501-510
岡本健児 1968 『高知県史』考古編 高知県

- 小野山節 1970 「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』第16巻第3号 考古学研究会、岡山：pp. 73-83
- 岸 俊男 1963 「紀氏に関する一考察」『近畿古文化論攷』吉川弘文館、東京：pp. 407-450
- 黒石哲夫 2005 「紀伊における後期古墳時代の集団関係」『待兼山考古学論集－都出比呂志先生退任記念－』大阪大学考古学研究室、大阪：pp. 697-730
- 栄原永遠男 1999 「古代豪族紀氏」『謎の古代豪族紀氏』清文堂出版、大阪：pp. 59-71
- 杉井 健 2010 「肥後地域における首長墓系譜変動の画期と古墳時代」『九州における首長系譜の再検討』第13回九州前方後円墳研究会鹿児島大会発表要旨集、鹿児島：pp. 131-184
- 清家 章 2006 「まとめと若干の考察」高知大学考古学研究室編『南国市における大型後期古墳の調査』高知大学考古学調査研究報告第三冊 高知大学人文学部考古学研究室、高知：pp. 23-29
- 清家 章 2007 「高知平野における大型後期古墳の動向」『考古学論究－小笠原好彦先生退任記念論集－』真陽社、京都：pp. 447-464
- 清家 章 2008 「考察：土佐山田における古墳築造と大元神社古墳」『大元神社古墳発掘調査報告書－総括編－』高知大学考古学調査研究報告第5冊 高知大学人文学部考古学研究室、高知：pp. 37-46
- 清家 章 2010 「横穴式石室にみる南四国太平洋沿岸地域の諸関係」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文社会科学系、高知：pp. 131-143
- 清家 章 2011 (印刷中) 「高知平野における古墳秩序の成立過程」『臨海地域における戦争と海洋政策の比較研究』(仮題) 高知大学人文社会科学系人文学部門、高知
- 都出比呂志 1988 「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』第22号史学篇 大阪大学文学部、大阪：pp. 1-16
- 中里伸明 2009 「四国北東部における横穴式石室構築に関する情報共有－地域差に基づく型式組列への試み－」『九州系横穴式石室の伝播と拡散』北九州中国書店、福岡：pp. 73-99
- 西川 宏 1964 「吉備政権の性格」『日本考古学の諸問題』河出書房新社、東京：pp. 145-171
- 橋本達也 2000 「四国における古墳築造地域の動態」『前方後円墳を考える－研究発表要旨集－』古代学協会四国支部第14回大会 古代学協会四国支部、徳島：pp. 17-42
- 橋本達也 2001 「四国における後期古墳の展開」『東海の後期古墳を考える』東海考古学フォーラム：pp. 93-103
- 橋本達也 2010 「古墳時代交流の豊後水道・日向灘ルート」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文社会科学系、高知：pp. 91-107
- 廣田典夫 1979 「第三編第一章 古墳時代」『南国市史』上巻 南国市：pp. 181-316
- 廣田佳久 1995 「高知の横穴式石室」『四国における横穴式石室の成立と展開』古代学協会四国支部第九回徳島大会資料 古代学協会四国支部、徳島：pp. 80-95
- 廣田佳久 1996 「南四国の前半期古墳」『遺跡』第35号 pp. 106-116
- 廣田佳久編 1996 『長畠古墳群』高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第25集 高知県文化財団埋蔵文化財センター、高知
- 北條芳隆 1990 「腕輪形石製品の成立」『待兼山論叢』第24号史学篇 大阪大学文学部、大阪：pp. 73-96
- 安岡源一 1952 『高知県縄文式・弥生式・古墳文化遺跡地名表』私家版
- 山崎信二 2003 『古代瓦と横穴式石室の研究』同成社、東京

遺跡文献

- 朝倉古墳：高知大学考古学研究室編 2005 『朝倉古墳測量調査報告書』高知大学考古学研究室、高知・高知大学考古学研究編 2009 『朝倉古墳発掘調査概要報告書』高知大学人文学部考古学研究室、高知・高知大学考古学研究編 2010 『朝倉古墳発掘調査概要報告書II』高知大学人文学部考古学研究室、高知
- 岩内1号墳：御坊市教育委員会 1980 『岩内古墳群発掘調査概報』、和歌山
- 宇摩向山古墳：中勇樹ほか編 2009 『宇摩向山古墳発掘調査報告書』I 四国中央市教育委員会、愛媛
- 角塚古墳：森下英治 1995 『角塚一大野原町中央公園造成工事に伴う確認調査概要報告－』大野原町教育委

員会、香川・久保田昇三 2009『香川県指定史跡椀貸塚、角塚及び平塚古墳保存・活用検討委員会報告書』観音寺市教育委員会、香川

蒲原山東古墳群：廣田典夫 1979「南国市蒲原山東一号・二号古墳の調査概報」『高知県文化財調査報告書』22 高知県教育委員会、高知

小蓮古墳：廣田典夫 1972「高知県南国市小蓮古墳」『古代学研究』第65号 古代学研究会、大阪：pp. 24-28・高知大学考古学研究室編 2006『南国市における大型後期古墳の調査』高知大学考古学調査研究報告第3冊 高知大学人文学部考古学研究室、高知

新改横走古墳：土佐山田町史編纂委員会編 1979『土佐山田町史』土佐山田町教育委員会、高知

曾我山古墳：岡本1968（前掲）

高岡山古墳群：高知県教育委員会教育委員会 1985『高岡山古墳群発掘調査報告書』、高知

高松古墳：岡本健児ほか 1964「南国市久礼田高松古墳」『高知県文化財調査報告書』第14集 高知県

高間原古墳群：廣田典夫 1967『とさ高間原古墳群』四国考古学叢書1

天満1号墳：吉備町教育委員会 1994『天満1号墳（泣沢目の古墳）』和歌山

長畠古墳群：廣田佳編1996（前掲）

伏原大塚古墳：廣田典夫 1984「高知県土佐山田町大塚古墳」『古代学研究』103号 古代学研究会、大阪：29-32・土佐山田町教育委員会 1993『伏原大塚古墳』土佐山田町教育委員会、高知

舟岩古墳群：高知県教育委員会編 1968『高知県舟岩古墳群』高知県文化財調査報告書第一五集、高知

狭間古墳：廣田典1979（前掲）

明見彦山1号墳：高知大学考古学研究室編2006（前掲）

明見彦山3号墳：清家章編 2010「第III部 資料紹介—明見彦山3号墳測量調査報告—」『弥生・古墳時代における太平洋ルートの文物交流と地域間関係の研究』高知大学人文社会科学系、高知

挿図出典

- 図1：高知県立埋蔵文化財センター2010『高知県文化財団埋蔵文化財センター2010年度特別展土佐の古墳』より再トレース
- 図2：高知大学考古学研究室編2006・2010ならびに清家編2010より再トレース
- 図5：吉備町教育委員会1994より一部改変の上、再トレース

5. 古墳時代政権交替論をめぐる二、三の論点 —河内政権論を中心に—

高橋 照彦

はじめに

本稿は、古墳時代の政権交替をめぐる学史を振り返り、その問題点を整理することが主目的である。ただし、それにかかわる研究はあまりに膨大であり、また既に詳細な研究史の分析もなされている（鈴木1980、直木ほか1992、下垣2004ほか）。そのため、本稿では研究成果を網羅することよりは、むしろ筆者が重要と考える論点に絞り、若干なりとも私見を加えていくことにしたい。

この古墳時代の政権交替論に関する研究は、文献史学と考古学の2つの領域にまたがっている。ただ、学問分野を越えて成果が十分に共有されているとは必ずしも言えない。研究現状としては、考古学でなおも論議が比較的盛んであるように思うが、文献史学では史料の解釈の段階で決定的な判断が下せないまま、やや膠着状態に陥っているようにも感じられる。現存史料や方法論の制約を越えて、記紀などの信憑性を検証しつつ時代像を解明する上で、文献史学と考古学の双方から複眼的に考究を進めていくことがさらに必要だろう。

本書では考古学的な検討が他に用意されているので、本稿は文献史学の成果を中心に学史の再整理を試み、適宜、考古学的成果と付き合させ、確実な到達点や深めるべき観点を見定めるように努めたい。文献史学と考古学の両者を見渡す「歴史考古学」的な観点からの展望を目指すこととする。

1 古墳時代政権交替論をめぐる研究の流れ

（1）騎馬民族征服王朝説と王朝交替論

まずは、簡略に研究史の流れをまとめておきたい。本稿は、プロジェクト名に合わせて、古墳時代政権交替論という用語を論文名に掲げたが、それは学史的に言えば、王朝交替論、王朝交替説と呼ばれてきたものを淵源を持つ。この王朝交替論は、江上波夫氏の騎馬民族征服王朝説（江上1949・1966ほか）を契機に、水野祐氏が唱えた王朝史論（水野1954ほか）へと発展した。それらの学説は、天皇の万世一系史觀を学問的に問い合わせた点で、画期的な意味をなしたものと言える。

そのうちの騎馬民族征服王朝説については、大陸の騎馬民族が4世紀ころ朝鮮半島を南下して北九州に侵入し、その後に畿内に進出して征服王朝を樹立したというものである。しかし、早くから日本考古学の立場より批判があり（小林行1951）、現在の日本考古学においてそのまま認める論者はいないのが現状であろう（田中琢1991、佐原1993ほか）。

一方、水野祐氏は仁徳から新しい王朝が始まると主張し、仲哀以前を古王朝、応神・仁徳以後を中心王朝、繼体以降を新王朝とする、新たな王朝史論を提唱した（水野1954）。この水野説は、井上光貞氏に受け継がれ、井上氏は応神が九州に起った豪族で、畿内を征服したと推測する（井上1960）。その根拠としては、仁徳の皇后である磐之媛の父、葛城襲津彦の「襲」が熊襲とみられる点などを挙げている。しかし、襲津彦はいわゆる葛城の豪族の首長と考えざるを得ず、仁徳と南九州に關係が深いとみなした点は根拠が薄弱である。現在の考古学的知見からも、この仮説は認めがたい。

ただ、井上説自体は同意できないにしても、記紀の伝承に応神に召され仁徳の妃となる日向の諸県君の女、髪長媛が登場し、やや唐突にも日向との関係が語られる点は改めて注目しておいてもよいだろう。この髪長姫や諸県君牛諸井については、宮崎県の古墳、例えば西都市の女狭穂塚古墳などとの対応が指摘されている（北郷2005ほか）。女狭穂塚古墳は九州最大の前方後円墳であり、その墳形も古市古墳群に属する藤井寺市仲津山古墳と類似している。しかも、その女狭穂塚古墳では古市古墳群でみられる畿内で定型的な埴輪が用いられている。このように応神・仁徳段階墳の河内の古墳と日向とに深いつながりが認められることから、髪長媛の説話も単純に記紀や帝紀・旧辞段階の後世の造作とみなすことはできず、その伝承の背後に史実を含んでいた可能性が十分に高い。一般に信憑性が問われるがちな記紀伝承も無碍に捨て去れないだろうし、考古学から検証しうる側面は批判的に活用していくことが必要であろう。この点は、本稿の後でも改めて触れたい。

（2）河内王朝論とその後

西方勢力が東遷したとみる水野祐氏や井上光貞氏の王朝交替論に対して、直木孝次郎氏、上田正昭氏、岡田精司氏などは、5世紀代の王権が応神を開祖とする河内王朝（応神王朝）であったと主張し、それまでの王朝交替論を批判的に継承発展して、それ以前の崇神王朝（三輪王朝）、それ以降の繼体王朝などと対比しつつ分析を深めた（直木1964、上田1967、岡田1968ほか）。この河内王朝論の論拠の1つとしては、百舌鳥・古市古墳群という巨大古墳群の成立があることも手伝って、考古学としてもこの河内王朝論の一端を担うことになる（白石1969、小野山1970ほか）。

その後は、文献史学の側から門脇禎二氏や和田萃氏、熊谷公男氏をはじめとして多くの研究者から王朝交替論、河内王朝論への反論がなされている（門脇1984、和田萃1973・1988a、熊谷1991ほか）。それらに対しては、直木孝次郎氏も再反論をしている（直木2005）。ただし、直木氏は従来の河内王朝論を河内政権論という形に組み替えるなど、部分的な方向の修正をしていることもあり、見解の振れ幅は少なくなっているようにみえるが、いまだ一致した結論が得られているわけではない。直木孝次郎氏の所見やそれへの反対意見などの一部は、後で取り上げたい。

古墳時代の政権交替の問題においては、いまみてきたように、河内王朝論、河内政権論の正否にかかる論考が多い。それより前の崇神（三輪）王朝論は、確実な文献史料が乏しいため、近年の文献史学からの検討は少ないようである。もちろん、邪馬台国論争との関係では諸説があり、さらなる検討が必要だが、この点は別の論点にも発展する大きな研究課題なので、本稿では触れない。

その一方で、繼体大王の即位に伴う政権交替に関しては、論著が少なくない。ただ、『釈日本紀』所引の「上宮記一云」の記載を史実とみて、繼体を応神の五世孫と位置付けるかどうかにより、血脉上の評価は変わるにしても、仁徳以来の王統との差異はほとんどの研究者が認めるところであろう（水谷1999ほか）。また、摂津、現在の大坂府高槻市の今城塚古墳は、異論がなくはないものの（北2007）、繼体陵とみてほぼ間違いない（森田2006ほか）、百舌鳥・古市古墳群とは地理的に大きく隔していることからも、王権の変化としての位置付けに古墳と文献史料の双方で齟齬はない。

しかしながら、文献史学からみると、繼体朝は磐井の乱の勃発をはじめ、国内外の危機による動揺期としての評価が一般的であり、世襲王権の成立など、むしろ欽明朝ころに王権の大きな画期を求めることが多い（山尾1983、大平2002、仁藤2005ほか）。この点は、文献史学での雄略朝の画期論（岸1984ほか）と、それに呼応するような古墳時代後期の設定（和田晴1987ほか）の是非などとも連関し、王統の変化と時代や社会の画期をいかに捉えるかという、より重要な課題も突きついている。これは非常に大きな争点ではあるが、王統の交替そのものの真偽に論が及ぶものではなく、より大きな歴史

的評価に対しては筆者も十分に弁じるほどの用意ができていないので、以下では、これまで見解が分かれてきた、河内王朝論、河内政権論を中心にみていくことにしたい。

2 河内政権論と非河内政権論

(1) 河内王朝論と河内政権論

まず、用語の問題から触れておきたい。河内王朝論と河内政権論という名称であるが、近年でも上田正昭氏は河内王朝という用語を踏襲するものの（上田2003）、直木孝次郎氏は先述のように河内政権論という呼称を用いるようになっている。直木氏の変更の理由は、王朝と言うと朝廷に結び付き、朝廷は組織化された政治機構の成立段階であって、不適切とみる点にある（直木ほか1992・直木2005）。また、河内王朝論を支持しない立場からは、中国史での「王朝交替」は、まったく異なる氏族による皇帝位の簒奪を意味することから、日本古代史の場合に安易に当てはめるべきではないとの批判もある（平野1985）。平安時代の王朝文化や王朝国家論のような用法もあるので、日本史の中の用語として王朝が妥当かは異論が残るかもしれないが、同一用語に中国史と異なる日本史独自の用法を適用するのは、確かに好ましいことではないだろう。

ここで改めて確認しておくべきなのは、王朝交替論が、記紀にみえる血縁継承による王統譜を批判しながらも、それを前提にしている点である。記紀の王統譜については、近年の古系図研究の成果などから血縁継承系譜ではなく、地位継承系譜であった可能性が指摘されているため（義江1988・1992ほか）、その根本的な前提も問い合わせなければならない事態になっている。ただ、王位継承として父系の血縁継承を重視する異論もあり（水谷1995ほか）、未確定の要素も強い。

また、記紀にみえる王統譜からは、実に様々な原系譜の復元が試みられているが（川口1981ほか）、仁藤敦史氏が指摘するように、「極論すれば恣意性を完全には排除できないのが現状」であり（仁藤2005）、本来の原系譜を提示し証明するのは、記紀のみではおそらく不可能であろう。その点では、不確実な王統の実態をひとまず棚上げにして、政権論としてやや包括的に検証を進めるのも、次善の便法ながらも不適切ではなかろう。

次に触れておきたいのは、政権という用語の一方で、近年では王権という概念で、非常に幅広い論議がなされている点である（角田ほか2003ほか）。ここにも論者によって意味付けに差異がある。政権という語については、畿内貴族政権論などのように王の専制君主体制を重視しない立場から用いる場合もある一方で、白石太一郎氏のように地理的な差違により王権と区別し、ヤマト王権を畿内の政治集団に限定するとともに、ヤマト政権は日本列島の北と南を除いて「倭国」と呼ばれた広い範囲の政治連合を想定する場合もある（白石2006）。

本稿では、王権と政権を厳密には区別しないつもりだが、考古学的な適用を考慮し、白石説を踏まえて用いることにする。すなわち、基本的には倭王（大王）の権力と直接的にかかわるものに王権を当て、政権は王権を包含しつつ、各地の豪族層などを含めた倭国全域のより広い用語と位置付けておく。そして、河内政権論についても、論者によって各種の用語が使用されているが、本論では煩雑な区別はせずに、河内政権という広義の用語で一括し、その適否をみていくことにする。なお、河内という地域名称については、令制期の河内や和泉のほか、摂津の一部を含めておく。

この河内政権にかかわる研究現状としては、先にもみたように、大きく2つの見解に分かれている（白石2000ほか）。その一つは河内勢力勃興説で、河内勢力が新たに政権の中心を占めたとみるものに当たる。文献史学では、先に挙げた直木孝次郎氏、岡田精司氏、上田正昭氏などで、最近では積極

的論者が少ないようである。考古学分野では、白石太一郎氏、都出比呂志氏、田中晋作氏、藤田和尊氏などが挙げられる（白石1969・2006、都出1988、田中晋1990・1993、藤田1998・2009ほか）。

もう一つは大和勢力継続支配説とも呼びうるもので、例えは河内の巨大古墳も、大和に基盤を置く倭王勢力が墓のみを河内に営むようになったとみる。和田萃氏、熊谷公男氏、吉村武彦氏など、近年の文献史学ではこの説を探る論者が多い（和田萃1988a、熊谷1991・1997・2006、吉村2003・2010ほか）。考古学では近藤義郎氏、関川尚功氏、広瀬和雄氏などがこの立場になるだろう（近藤1983、関川1985、広瀬1987）。

ただし、河内勢力勃興説では、大和と河内が対立し、河内が政権を奪取するものと想定されることがかつては多かったが、近年では同じ政権の内部で河内勢力が盟主権を握ったとみる、政権内部盟主権移動説を探る場合も少なくない。また、大和勢力継続支配説の立場で大和の基盤を重視する文献史学の和田萃氏も大和・河内連合政権を提唱しており、政権内部盟主権移動説に近い。細かくみれば一括りにできない部分も多いが、先の前者を河内政権論、後者を非河内政権論としておきたい。

（2）河内政権論と応神・仁徳

河内政権論を探る論者は、応神がその始祖としての扱いを受けて画期をなすとみるのが一般的である。ただし、応神にかかわって見解の差違も生じているため、この点を次に確認しておきたい。

まず、王朝交替を最初に提唱した水野祐氏は、もともと仁徳王朝と命名しており、仁徳朝に画期を設定している（水野1954）。また、吉井巖氏は応神の実在性そのものに疑問を提示している（吉井1967）。直木孝次郎氏も吉井説を受けて当初の見解を改め、応神と仁徳が同一人物であるとする説を展開している（直木1974）。応神の存否は、記紀にみえる王統譜がどれだけ史実かが問われる現状では、分析するにも限界が少くないが、この時期を解釈する上での前提になるため、既往説の論拠を整理しておくこととする。

応神が非実在あるいは応神と仁徳が同一人物とみる根拠としては、記紀において応神と仁徳にかかる記載内容が類似している点が注目されている。確かに、その要因として人為的に2つに分けたという解釈は成り立ちうるのかもしれない。しかしその一方で、伝承としての混乱が意図とは別に結果的に類似する記載を招いたことなども考えられなくはない。

応神・仁徳同一人物説の最も主要な根拠は、『古事記』応神段にみえる歌謡である。「品陀（ホムタ）の日の御子（ミコ）、大雀（オオサザキ）、大雀…」を「品陀（応神）の皇子である、大雀（仁徳）」と解釈していたのに対して、直木孝次郎氏は品陀の日の御子が応神を指し、それと仁徳が同格とみている（直木1974）。しかし、和田萃氏などの批判があるように多様な解釈ができ、日の御子の表現も舒明以降にみられるものであって、この歌謡が古くに遡らない可能性も高い（和田萃1988a）。

また、直木氏は同一人物とみなす応神・仁徳の本来の名がホムダワケ（ホムダノミコト）で、別称がオオサザキと推測して、後に両者が分離したとみている。しかし、小林敏男氏は、応神には実名としての大鞠和氣（オオトモワケ）命と通称の品陀和氣（ホムダワケ）命があることから、実名にオオサザキ（ササギ）とある仁徳とも区別すべきだと論じている（小林敏2006）。また、古市晃氏はオオサザキに対応する雀（サザキ）部などの存在に注意しており（古市2010）、仁徳の独自の存在を考えるのがむしろ適切であろう。

さらに直木氏は、『日本書紀』に応神陵の記載が欠けているのも、応神陵がもとから存在しないことを示すと主張している。しかし、『古事記』や『延喜式』に応神陵の記載がみられ、その点を根拠にするのは難しい。また、同一人物を分けたにしては、異なる古市と百舌鳥に陵を設定していること

も不自然である。ただし、『古事記』の古写本のうちト部本系統には「御陵在川内惠賀之裳伏」の註記に「百舌鳥陵也」とあり、別人物説への反証になりそうだが、これは直木氏自身も記すように『古事記』で用いられた「毛受」の表記ではないことから、挿入の理由は不明としても、原文でないことが明らかであり、重視することはできない。また、『日本書紀』には雄略9年7月壬辰朔条に、田辺史伯孫が夜道で馬形埴輪と実際の馬を取り換える話が出てくるが、その舞台が古市に所在した「蓬藋丘誉田陵」(イチビコノヲカノホムタノミササギ)である。雄略朝より後に創作された伝承であろうが、『古事記』以外にも『日本書紀』成立以前に応神の陵の認識が確実に存在したことを示している。

以上、いくつかの根拠をみてきたが、研究現状からすれば、応神が非実在、あるいは仁徳と同一人物であることを積極的に支持する史料はないと言るべきだろう。比較的最近、直木孝次郎氏は、仁徳を含めた応神の3皇子をめぐる伝承について新たな分析を行っており（直木2006）、その研究成果は直木氏の意図するところではないのかもしれないが、むしろ応神と仁徳を別人物として分けたほうが理解しやすい。その直木氏の分析などについては、本稿の最後で触れることにしたい。

この論点とからめて、陵墓の所在地について考古資料を瞥見しておく。『古事記』では応神陵が川内に、仁徳陵が毛受にあったと区別されており、さらに応神の父に位置付けられている仲哀の陵も川内とされている。まず言うまでもないが、宮内庁によって応神陵と仁徳陵にそれぞれ誉田御廟山古墳と大仙（陵）古墳が治定されており、埴輪など考古学的観点から前者が後者より古いといったことは、比定そのものの揺らぎからすれば、あまり意味をなさない。しかし、古市古墳群の誕生、すなわち津堂城山古墳の築造が百舌鳥古墳群の形成にやや先立ち、その後は古市古墳群と百舌鳥古墳群とが併存しつつも離れて群形成していることには改めて注意してよかろう。倭の五王の讚・珍に当てられる可能性がある仁徳・履中・反正の墓が百舌鳥にまとまり、仁徳以前に当てられている仲哀や応神、あるいは反正より以後の允恭・雄略などの墓は古市周辺に設定されている。個別の王陵名の特定については、ごく近年でも意見が大きく分かれているが（菱田2007・2010、岸本2010）、解決の難しい王陵名比定をひとまず棚上げにすれば、古墳の概況と記紀とは齟齬をきたさず、そこになんらかの史実を反映する伝承が残存したとみたほうが良かろう。

むろん、この時期の記紀の記載に全面的に信を置くべきではなく、なじうる限り種々の検証を進めるべきであるが、考古資料の現況からも、記紀で応神や仁徳の名のもとに託されて、古市や百舌鳥の巨大な古墳に葬られた人物がそれに存在したことを認めたほうが理解しやすいように思われる。

3 河内政権論と王宮・王陵

（1）非河内政権論と王宮の所在地

以下では、河内政権論の争点を再整理してみたい。まず本節では、王宮の問題をみていく。

非河内政権論者は、王宮が基本的に大和に継続する点を重視し、古墳の所在地よりも王宮の所在地のほうが本拠地であると指摘する場合が多い。例えば、和田萃氏は埼玉稻荷山古墳出土鉄剣銘から、ワカタケルの斯鬼宮（シキノミヤ）がみえ、記紀以外の史料からも、雄略が大和に宮を持っていた可能性が高い点に言及している（和田萃1988a）。ただ、厳密には斯鬼宮が志紀宮であって、河内でないとも限らない。また、河内政権論の立場から直木孝次郎氏が5世紀半ばか後半の変容を考えており、その時期に河内政権が初期のヤマト政権を打倒して、大和に進出したものとみなしている点にも注意が必要である（直木2005ほか）。倭の五王のうち済・興・武を允恭・安康・雄略に当てるることは穩当であろうし、『宋書』倭国伝を重視すれば、讚・珍と済・興・武の間には血縁関係が記されていない

ことから、反正と允恭の間に王統としての断絶や対立などがあった可能性は十分にある。その状況の中で王宮が大和に営まれる契機が生じたとしても、なんら不思議ではないだろう。

また非河内政権論者は、応神が輕島之明宮を営み、履中も伊波礼之若桜宮（磐余稚桜宮）を置いた点に着目し、応神から反正の段階でも必ずしも河内に王宮があるわけではないことからも、河内政権論に反対している。それに対して直木孝次郎氏は、軽の地が重視されるのは藤原京期か、遡っても6世紀後半以降であることから、応神段階での軽の宮は不自然であり、信用できないとしている（直木ほか1992ほか）。また、磐余に置かれる宮は5世紀末から6世紀に多く、5世紀初め頃の磐余宮は特異であること、履中の名が大江之伊耶本和氣（オオエノイザホワケ）であり、この大江が淀川とみられること、『古事記』によれば履中が即位したのが難波であることからも、履中も難波に本来の宮を置いていたと考えている。

この直木説は十分に成り立つ可能性もあるが、その一方で後でも触れるように、応神から反正の時期に大和に王宮がなかったとも断言し難い。近年の文献史学の研究においても、仁徳の宮が大和の磐余にあったという仮説も呈示されており（古市2010）、なおさら吟味が必要である。

考古学的には、大型建物群を検出した纏向遺跡第166次調査の例などからすれば、王宮レベルの遺跡の存在を明確化できる可能性はあるため、古墳時代王宮跡の検出は考古学としての今後の大きな課題である。むろん、存在しないことの証明は考古学では非常に困難であるが、応神の宮が大和畠傍山の麓、軽の周辺にあったかどうかなど、地道な資料の積み重ねが考古学に課されているものと言える。ただし、考古学によって宮処の存否が確定できない現状では、史料上での別の事例もあわせて考えておくべきであろう。例えば、繼体は樟葉や筒城、弟国に宮を構えているが、磐余玉穗宮にも宮を置いている。このことから、新しい王統の場合であっても旧来の王宮の付近に宮を営み、前代を継承する場合があるものと言える。つまり、王宮の場所がたとえこれまでと同じであっても、異なる王統や新たな政権が成立していなかつたとまでは判断できない。

一方、応神の難波大隅宮や仁徳の難波高津宮、反正の丹比柴籬宮など、この時期に河内（摂津）に宮が置かれるようになったことは、非河内政権論者の多くも基本的に認めるところであろう。この現象に対して、非河内政権論者である吉村武彦氏は、孝徳の難波遷都や天智の近江大津宮遷都と対比させ、それらと同様に海外との関係などから宮を大和から難波などに移動した可能性を説いている（吉村2010）。ただし、先述の通り、繼体が樟葉や筒城、弟国などに宮を構えているように、大和以外の王宮が王統の変化の一端を示す可能性も完全には否定できない。

以上をまとめれば、言うまでもないかもしれないが、王宮の所在地だけでは種々の解釈の可能性があるため、河内政権論の当否を論じることは難しいものと言える。応神や履中の段階に大和に宮が置かれていたのか、そうであった場合に難波や河内の宮が特殊な政治的な要因などで一時的に置かれた宮であったか、といったことが、解決は難しいものの、解釈の分岐点になってくるだろう。

このように個別に断案を下すことができない現状を踏まえ、以下では王宮の事例を全般的に概観することにより、その所在地の特徴に関して基礎的な確認をしておきたい。まず、履中以降の5世紀から6世紀初め頃の宮としては、記紀による限り、磐余（履中）—丹比（反正）—遠飛鳥（允恭）—石上（安康）—泊瀬（雄略）—磐余（清寧）—近飛鳥（顯宗）—石上（仁賢）—長谷（武烈）—磐余（繼体）というように、大和の磐余・石上・泊瀬（長谷）に繰り返し宮が置かれていることになる。

これらの宮名は、厳密に言えば史実を伝えていくか確証がない。その点で、やはり遺跡の調査などによる別資料からの裏付けが好ましい。ただ現状では、例えば泊瀬の宮の可能性がある桜井市脇本遺跡などの事例がなくはないが、考古学からの個別の判定は、今後に期待せざるを得ない。一方で、文

文献学からすると、上記の宮の循環とも言うべき状況に対して、作為性を読み取る見解もあるが（原島1970）、子代・名代の側面から史実の反映とみる説もある（鬼頭1992）。

後者は、木簡などにより造籍以前から子代・名代の存在が裏付けられ、その子代・名代と一致する宮号や大王の諱も存在することから、単純に記紀などが編纂された際の造作では説明が付きにくいと判断している（鬼頭1992ほか）。近年でも7世紀の木簡に、某王部という特定の王族へ奉仕する名代が確認されており、その資料的価値が高まっている（古市2010ほか）。子代・名代として宮号や王名を付けた部を設置したのは、原帝紀・旧辞の作成の後である可能性も考慮すべきであり、子代・名代を初めとする部民制の理解もあまりに多様で難解でもあるため安易な判断は下せないが、記紀より遡る伝承として、ある程度の史実が残されていることは考えておくべきだろう。また、後の時期の王宮や皇子宮などから考えても、王権により数代にわたって伝領されるような根拠地が存在したことは不自然ではない。個別の王宮が正確かはともかくとして、そのような根拠地が5世紀代に遡る可能性は十分にあるものと推測される。

また、鬼頭清明氏は丹比など繰り返し宮とならなかつた地域でも、大王家の拠点が存在したとみなしている（鬼頭1992）。例えば丹比は、付近に王陵が多く築かれていることからも、拠点の一つとみなすことに問題はなかろう。難波大隅（応神）や難波高津（仁徳）については、宮が確実に存在するか不明だとして鬼頭氏は留保しており、古市晃氏も仁徳の主たる王宮が難波ではなくて、先に触れたように大和の磐余にあったと推測している（古市2010）。ただ、応神・仁徳と連続して難波に複数の宮が確認されることや、宮そのものではないものの5世紀代の大型倉庫が並ぶ法円坂遺跡などの存在からすれば、本拠地であったかは別としても、難波に倭王の一拠点があつたことまでも否定すべきではないだろう。もちろん、難波や丹比の宮が反正以前の段階に限定されており、時期的に偏ることからすると、拠点の中での宮としての選択地としては、允恭以降とは変質している可能性も考えておくのが望ましいかもしれない。いずれにせよ、鬼頭氏が想定するように、大和や河内の各所に伝領される王権の根拠地があり、王宮として使用した代表例のみ帝紀に残されたとみるのは穩当であろう。

この点をより具体的に考えるため、先にも触れた継体が磐余の地に玉穂宮を構えたとされている点をみておきたい。この点に関して、鬼頭清明氏は大きくみて2つの要因を掲げている（鬼頭1992）。第一に、大和盆地の東南隅は大伴氏の根拠地とみなされることから（岸1966）、継体の擁立を支持した大伴氏が関与していたためと考えている。また、『日本書紀』垂仁39年10月条の分注にみえるように、磐余に近接する忍坂には石上に移される以前に王権の武器庫が置かれており、その管理に大伴氏や久米氏がかかわっていた可能性が高い点（和田翠1988a）なども顧慮すべきだろう。

ちなみに、大伴氏の大和の本拠については、加藤謙吉氏が推測するように、本来の氏名が「来目」であり、高市郡の築坂邑付近である可能性が十分にある（加藤2002ほか）。この氏族分布を古墳に適用すれば、築坂邑の比定地に近い橿原市の新沢千塚古墳群と大伴氏との関係は対応が可能であろうし、その勢力の起源が5世紀前半頃に遡る可能性も出てくる。加藤氏は、王宮が磐余に集中する5世紀後半から末葉以降に大伴氏が拠点を移したという考えを提出しているが、大伴氏が後に磐余に進出したのか、その時期はいつかなどについても、磐余の古墳や集落の動向から検証が必要である。

鬼頭氏は、継体が磐余の地に宮を置いた第二の要因として、磐余が既に履中の若桜宮の所在地であったことにも注目している。履中の子が市辺之忍歯王（磐坂市辺押磐皇子）、押磐皇子の子が仁賢であり、その子が継体の妃となる手白髮（手白香皇后）であるから、磐余の地もこの王族に伝領されていた可能性が十分にあるとしている。押磐皇子の磐坂は泊瀬谷へ出入りする要地とみなされ（古市2010）、その点でも上記の継承は矛盾がない。また古市晃氏は、仁徳の宮が磐余にあったと推論して

いるが（古市2010）、履中が大和へ逃げて磐余宮で即位するという伝承も、もとから王宮を企図した地点であったかは別にしても、既に仁徳の段階に磐余に王権の拠点が存在したとみると整合する。

鬼頭氏と位置付けは異なるが、近年の研究を踏まえれば、上記の他に隅田八幡宮所蔵画像鏡にも注意を向けるべきであろう。この鏡の銘文は解釈が分かれているため、扱いが難しいものの、考古学的にみて、鏡そのものが5世紀後半以降のものとみてほぼ間違いない（森下2004ほか）、その銘文にある癸未は503年に相当することになる。このように年代を押さえれば、加藤謙吉氏の解釈（加藤2010）のように、その銘文の「孚弟」（フト）が継体、「曰十」（オシ？、仁賢か）大王の在位中であるから、即位前の継体が「意柴沙加宮」、すなわち大和の忍坂の宮にいたことになるとみて、異論は少ないであろう。そして、『釈日本紀』所引の「上宮記」の一云によれば、乎富等大公王（継体）の一族（曾祖父の妹）に践坂大中比弥王（忍坂大中姫）がいるが、この忍坂大中姫の宮が忍坂である。継体にどういう形で伝領されたかは明確ではないが、一族であった忍坂大中姫より受け継がれた拠点に即位前の継体がいた可能性が出てくる。もしもそうだとすれば、忍坂は磐余とも近接しており、継体が磐余を王宮としたのも不自然でなくなるだろう。

鬼頭清明氏は、上に掲げた要因をもとに、継体への王位継承のためには、手白香という倭王の娘を妃とすることや磐余の地に宮を置くことが必要であったと推測している（鬼頭1992）。磐余が仁徳や履中以来の王権の伝領地かは未確定だが、清寧段階でも磐余に宮があることからすれば、磐余は5世紀後半には王権にとって重要な土地で、王位や宮処にふさわしい場所であったとみられる。それがために、王権を支える大伴氏なども、この地域を一つの本拠としていたのであろう。

いずれにしても、継体の例では、大和における宮の所在地である磐余は、その王の生育地そのものではない。むしろ王族の伝領地あるいは王権を支える豪族などの拠点であって、王権の政治・軍事等の基盤となる地域である。王権の維持や継承などを明示する上で、むしろ政治的に選ばれた土地であったものと言える。磐余などに宮を置くことは、倭王としてふさわしい行為だったとも評価できよう。その一方で、同様の視点でみれば、継体朝の樟葉や孝徳朝の難波なども、一時的で特殊な状況の宮にはあるが、支持勢力などの拠点や政治的な意図のもとでの選択地という観点からみれば、大和などの諸宮とも共通する様相を持ち合わせているだろう。

さらにその目でみれば、記紀伝承を史実とはできないが、成務や仲哀などの宮が仁徳・履中あるいは雄略以降の宮とつながっておらず、記紀などでもがりなりにも伝承が現実味を帯びる応神・仁徳朝以降との断絶の深さと連関しているようにみえる。そして、垂仁や景行などの纏向の宮そのものはその後に確認できない一方で、仁徳朝に遡りうるか、雄略朝頃からかは問題になるが、纏向からもそう遠くはない磐余周辺地域に宮が盛んに営まれる。この点は、次章で述べるように、5世紀の王権が大和東南部という4世紀以前に拠点を置いた政権基盤地へ接近していくことを示唆している。

（2）河内政権論と王陵の所在地

次に取り上げるのは、5世紀代の巨大古墳を多く含む百舌鳥・古市古墳群についての評価である。これは、河内政権論が生みだされるきっかけになったもので、考古学的にも関心が集中している論点である。ここで見解が分かれてきたのは、王陵を含むとみられる巨大古墳の所在地が、その当時の政権の基盤地とみなしうるかである。近年でも、白石太一郎氏は考古学の立場から「古墳とはそれを営んだ政治勢力の本拠地に営まれるものであるという前提」があり、その前提をもとに各地の考古学研究がなされてきた点を記している（白石2006）。しかし、まさにそこにこそ文献史学の研究の批判が集中しているのであり、改めて基礎的な整理をしておくことが必要であろう。

例えば非河内政権論の立場にある吉村武彦氏は、百舌鳥・古市古墳群における王陵と想定される古墳の類型は、それ以前の巨大古墳がある大和東南部や大和北部と同じ前方後円墳であることから、葬送儀礼や首長権の継承儀礼などの変化を伴うような、文化的・政治的な変動はなかったとみなしている（吉村2010）。

ただし、吉村氏は同じ著書の中で、繼体について応神の五世孫を事実と認めつつも、王陵の所在地が摂津に作られた唯一の事例であることも考え合わせて、仁徳系の血統に繋がらない新しい王統であったと評価している。この繼体陵は大型前方後円墳としてその前代の王陵とみられる古墳から継続するにもかかわらず、立地の変化という点に王統の差があるとすれば、同様の観点により、百舌鳥・古市古墳群の成立にも王統を含む変動が存在したことは、十分に考慮せざるを得なくなる。

しかしその一方で、6世紀後半以降の状況からすれば、王陵の変化が王統の変化だと単純に考えることもできない。敏達陵・用明陵や推古陵は、記紀や『延喜式』などからも河内磯長に所在したことが確実であり、そのそれぞれが現在宮内庁により治定されている太子西山古墳、春日向山古墳、山田高塚古墳の可能性が十分に高い。そして、それらの大王の前代である欽明は大和の飛鳥周辺に王陵が築かれており、明らかに王陵の所在地が移動している。しかし、敏達・用明や推古はいずれも欽明の子や孫であって、王系としても連続しており、その王権の拠点も磐余や飛鳥に置かれている。つまり、王陵の所在地の変化は、王統の変化に直接結び付くとは必ずしも言えないことになる。

また、王陵の立地する河内磯長は、政権の所在地とみなすこともできない。むろん、河内磯長はやはり時代が下る事例のために5世紀と同一視はできないかもしれないが、少なくとも百舌鳥・古市古墳群が所在するからといって政権の基盤地であるというように即断することはできない。この河内磯長への墓域の移動については、その背景に意見が分かれるだろうが、筆者は政権における蘇我氏の台頭などを無視できないと考えている（高橋2007a）。その点からすれば、王陵の所在地の変化は、王統が交替する場合も含め、なんらかの政権の変動を反映していることだけは考えられよう。

ここで、陵墓の所在地全般の意味を考えるために、平野邦雄氏の見解（平野1985）を筆者なりに補足しながらみておくことにしたい。平野氏は、陵墓がいかなる地に営まれたかについて、敏達—忍坂日子人（押坂彦人大兄皇子）—舒明という父子関係の中で分析している。

まず、敏達の後で、息長真手王の女である比呂比売（広姫）は、息長の出身地とみられる近江坂田に葬られており、墓がその出身地に造られる事を示している。他にも、白石太一郎氏も注目するように、『日本書紀』雄略9年5月条には、紀小弓宿禰の墓を紀氏の本貫地と想定される田身輪（淡輪）邑に墓を営んだ事例もある（白石2006）。このように男女を問わず出身地への帰葬が古墳時代に一般的であった可能性が高いであろう。ただし、厳密に言えば、それらが皇子や天皇（大王）の動向とは異なる可能性もなくはないので、その点は検討が必要になる。

そこで次に、押坂彦人大兄皇子をみてみると、押坂彦人大兄は息長の女である広姫と敏達との間に生まれたが、その名から考えて、息長氏が皇室財産の維持管理にあたったとされる大和の城上郡の忍坂宮（菌田1968）で養育されたものとみられる。そして、大兄の地位を得た後は、城上郡と離れた広瀬郡にあったとみられる水派宮（ミマタノミヤ）へ移り、死後は水派宮とも近かったと推測される成相墓（奈良県広陵町の牧野古墳か）に葬されることになる。養育された地ではなく、宮を置いて本拠となった地域の付近に墓を営む事例と言える。

押坂彦人大兄の子である舒明は、息長足日広額（オキナガタラシヒヒロヌカ）の名からも、息長氏の忍坂宮で養育されたものと推測される。そして、皇位に着いた後は敏達の百濟大井宮の付近とみられる百濟宮へと移る。死後の初葬は滑谷岡（高市郡冬野と伝えられるが、所在地不詳）であり、後に

は押坂陵（奈良県桜井市の段ノ塚古墳か）に埋葬されることになる。平野氏は百濟宮の所在地を広瀬郡に求めるが、発掘調査により百濟大寺が桜井市の吉備池廃寺とみる見解が有力になっていることからすると、押坂宮と百濟宮はそれほど離れていないことになる。したがって、この場合の最終的な王陵は、宮の近くあるいは養育地の近辺ということになる。

記紀や延喜式に基づかざるをえないが、改めて王宮と王陵の位置関係をみてみると、応神から反正段階では王宮が主に難波や河内で、王陵が百舌鳥や古市にあり、允恭から清寧では王宮が大和東南部の石上・磐余・泊瀬などで、王陵は河内が主である。顯宗から武烈では王宮は以前と変わらないが、王陵には大和西部の傍丘がみられるようになる。河内の王陵は、大津宮と天智陵のような特殊な一回的なものでもなく、また必ずしも宮の近接地でもないことからすると、王が誕生あるいは生育したような王に関連が強い拠点という可能性が出てくるだろう。もちろん、河内磯長のような墓葬地とみる考え方もあるかもしれないが、反正の丹比柴籬宮（大阪府松原市上田町付近か）のように古市古墳群と百舌鳥古墳群に挟まれるような位置に宮が築かれる事例からも、単なる葬地ではなく、宮などの拠点をおきうる地域であることを示している。その点は、考古学的にも両古墳群の周辺に集落遺跡が存在することからも問題なかろう。

先の宮と陵の所在地に関して、時期ごとのパターンから外れるものが幾例かあるので、その点も少しみておく。まず、履中の宮が磐余にあったとされるが、これは先に述べた通り直木孝次郎氏の反対意見もあって、検討を要するところである。履中あるいは仁徳の宮が大和に確実にあるとすれば、この時期の王権は大和と河内の双方に宮を置きうる拠点を有していたことになろう。また、安康については、その陵が菅原伏見だが、奈良市の菅原付近にこれに相当する古墳として確実な候補がないため（中島1993ほか）、史実かは疑われるところもある。ただ、記紀などの通りの王陵があったとしても、宮が置かれた石上との関係が考えられるところであろう。

さらに、顯宗や武烈などは王陵がそれ以前と異なることになるが、王統的に履中に連ねられているものの、これも史実かは問題が残る。少なくとも記紀からみて直前の王系とは異なっている点で、王統の断絶と王陵の立地の変化が呼応している可能性がある。この後の継体についても、藍野陵がやはりそれ以前と立地が異なるが、王統の相違とともに、王宮が楠葉宮などの隣接地であったとも評価できる。近年の研究では、継体の出自として記紀にみえる近江や越前よりも、この藍野周辺を含む摂津や河内に本来の拠点があったと想定する見解も出されており（仁藤2009、加藤2010）、その点でも王陵の一般的選地のあり方と整合する可能性が出てきている。つまり、履中の王宮や安康の王陵などは史実か留保が必要だが、いずれの事例を探っても、先に提示した範疇で捉えることができる。

このように、宮処は政治的意図などによる選択はあるが、倭王権や支持勢力の拠点など、政権にとっての基盤となる重要な土地から選ばれ、陵墓は王宮あるいは王が誕生あるいは生育した場所の近接地に造られることが多かったと評価できるだろう。つまり、政権の拠点とは言っても、王宮と王陵には多少なりとも性格差を含んでいることがあり、王権にとってどちらかが重視されているという二者択一の問題でもないのである。また、上記の点を考えれば、王陵や王宮はいずれも王統と無関連であるわけではないが、王統と一对一で対応するものでもないことを指摘できる。

ただし、改めて注意しておきたいのは、応神や仁徳という倭王が統治したとされる時期の頃に、王宮と王陵の双方の所在地に変化を見せていることである。そこには何らかの大きな歴史的変質が潜んでいたことだけは想像に難くない。河内政権論か否かをたとえ棚上げにしたとしても、その歴史的な画期性が存在したことはやはり認めねばならない。

4 河内政権論をめぐる諸論点

(1) 河内政権と王統の問題

前章にも記したように、墳墓や宮の所在地は、王統を反映している場合もあるが、多様な要素が入り込むため、王統のみを示す指標にはならない。そして、考古学的な側面のみから王統を証明するのではなく、個別の王の人骨資料でも確認されない限り、あるいは人骨が残されたとしても、まず不可能に近いであろう。文献史料としても、記紀にみえる王統譜の作成性が否定できない現状では、やはりかなり困難にならざるを得ない。そうすると、間接的な文献史料も含めて取り上げることで、王統の変化あるいは王位継承の対立や断絶の有無を推し量るしかすべがないだろう。

文献に残る伝承は、もちろん後世の変容を受けていた可能性があるため、かなり慎重に扱わざるを得ないが、これまでの研究で扱われてきた中で筆者が注意すべきと考えるのは、三輪山の問題である。三輪山は、既に直木孝次郎氏や和田萃氏など多くの研究者が注目してきた対象であるが（直木1977、和田萃1985・1988b）、改めてその問題を整理してみたい。

三輪山をめぐっては、以下の2つの伝承が特に良く知られている。まず1つめは、『日本書紀』崇神7年8月己酉条において、三輪山の大物主神を祭るのに、茅渟県陶邑において神の子である大田田根子を見つけ出すという伝承である。ここにみえる陶邑は須恵器の大生産地として著名な地であり、崇神代として伝承されてはいるものの、5世紀代以降に大物主神を祭るために須恵器などを用いた新しい祭祀が始められたことと連関するものであろう。

もう1つ注目されるのは、『日本書紀』雄略7年7月丙子条である。雄略が少子部連螺蠃（スガル）に三諸山（三輪山）の大蛇を捕ってこさせたが、雷のような音や眼の光に恐れて放してしまうという説話である。雄略が三輪山の神を服従させようとして失敗したことになる。この記載をもとに、直木孝次郎氏は、河内政権が三輪山の神を信仰の背景とする旧勢力（第一次大和政権）を打ち倒すことにより大和を勢力下に入れたが、三輪山信仰の力は根強く残って天皇家の支配を脅かしたと解釈する（直木1977）。その一方、和田萃氏は、三輪山祭祀と雄略との関係はあまり強調せず、むしろ仏教伝来や伊勢神宮の創祀など欽明朝以降の変化を重視する（和田萃1985）。この点に対しては詳細な吟味が必要だろうが、ここでは私見（高橋2007b）に基づいて、その意味するところを推測してみたい。

記紀には景行などの宮が纏向にあり、陵が近辺の山辺にあると記されている点は、既によく知られている通り、考古学的にみれば、桜井市の纏向遺跡や天理市の渋谷向山古墳をはじめとする柳本古墳群など、古墳時代前期頃の遺跡の状況と非常に整合的である。そして、当該期の王権にとって、考古学的な遺跡立地から考えても、三輪山は不可欠の存在であったと考えざるを得ない。

ところが、5世紀の宮の伝承地としては、先にみたように磐余・石上・泊瀬などがみられ、直木孝次郎氏も指摘するように、そこには景行などの宮があつた三輪山山麓の纏向地域を含んでおらず、むしろそれを避けるような位置にある（直木1977）。遺跡からみても、弥生終末期からの政治的中枢とみられる纏向遺跡も古墳時代の前期後半には衰退していき、大和の北部、さらには河内での巨大古墳群の盛行と入れ替わるような現象がみられる（石野ほか2005、坂2008ほか）。今後、奈良盆地内の集落遺跡の調査がさらに進展することにより明確化していくはずであるが、現状からしても、古墳前期以来の王権の勢力基盤として、三輪山麓の地域は後まで維持されていたわけではなかつたと考えたほうが良い。文献史学では、三輪山西麓が一貫して大王家の本拠地として想定されることが多いもの（岸1959・1966、熊谷2006ほか）、時期的な変化を考慮すべきであろう。

その点で注意すべきは、ある段階から三輪山西麓域を本拠地として蟠居したとみられる三輪君である。三輪氏の登場は、他の氏の成立とも呼応する6世紀以降と一般的には考えられている（和田萃1988bほか）。しかし、氏姓としての「三輪君」に先だって、後の三輪氏となる勢力が5世紀末よりも古くに拠点を置いていた可能性は十分に高い。考古学からみると、柳本古墳群の衰退以降に、三輪山のごく近接域で4世紀末か5世紀頃から6世紀以降にかけて連続的に古墳が築かれている（橋本1996）。6世紀に存在が確実な三輪氏は、史料から5世紀以前に確実な系譜を辿りにくいものの、古墳からみれば5世紀にまで遡るとみて、ほぼ間違いないだろう。

そのような古墳のなかで最も古い時期のものは、4世紀末から5世紀初め頃の築造とみられる茅原大墓古墳である。その墳形は、いわゆる帆立貝式と呼びうる範疇であるため、この三輪の勢力が百舌鳥・古市古墳群を造営する王権と直結せず、大和の諸勢力の中でも劣位に位置付けられていたものとみられる（小野山1970、坂2005）。三輪氏が後のこととしても君姓を与えられている要因としては、応神以降の王権に直属するような豪族ではなかったとみれば矛盾はなく、茅原大墓古墳の築造様相や三輪山直近を避けるかのような王宮の分布などと整合的である。三輪と王権とが対立するような雄略紀の伝承が生まれたのも、このような遺跡から窺われる状況を背景とするものだろう。

また、纏向遺跡の存続期において三輪山での祭祀遺物はほとんど出土しておらず、三輪山に近接する山麓には古墳を築造しないが、後に三輪氏となる勢力は三輪山のごく近接域に古墳を築くことなどからも、三輪氏による三輪山信仰は古墳時代前期頃の王権が三輪で執り行っていた祭祀と異なっていたであろう。三輪の祭神が国津神とみなされるのも、それ故と推測される。

三輪山祭祀遺跡では陶邑産の須恵器が多く用いられているが、現状の資料からみる限り、その須恵器の使用開始は、陶邑において須恵器の生産が始まった4世紀末や5世紀初め頃からではなく、それよりやや遅れた5世紀中頃以降である（佐々木1979・1980・1981・1986ほか）。5世紀前半までの陶邑で作られた須恵器は、各所へも供給されているようだが、河内が中心であり、そもそも大和にはあまり入ってこない（中久保2009ほか）。その段階の陶邑は、大和に基盤をもつ勢力が生産を掌握していたとは考えられず、河内の勢力が生産の背後に位置していたとみなすのが自然であろう。

ところが、5世紀中頃になると大和にも須恵器の流入量が増え、三輪山でも須恵器による祭祀が7世紀以降まで連綿と行われるようになる。この点を考慮すれば、崇神紀にもみえるように河内（和泉）と三輪付近の勢力とが結び付いたのは、ようやく允恭あるいは雄略朝頃と判断される。しかも、崇神陵あるいは景行陵にそれぞれ比定されている行燈山古墳・渋谷向山古墳においては、5世紀中頃から後半の須恵器の躰などが出土している（戸原・笠野1977、石田1970、笠野1975）。古墳時代では、一般に築造後の古墳において継続的な祭祀が行われていないことからすると、特異な現象である。三輪氏とみられる勢力が須恵器を用いた新しい祭祀を取り入れた段階で、崇神陵などへの須恵器の供獻が行われたのだろう。記紀において三輪氏の始祖系譜は崇神代に求められているが、崇神紀で須恵器を容器とする神酒を用いた祭祀形態を窺わせる点を重視すれば、崇神陵に比定しうる古墳において須恵器による祭祀が執り行われたという史実を核に伝承が形作られたものと推測される。

このような三輪山周辺の遺跡動向や三輪山にかかる伝承を考え合わせると、応神以降の王権が、大和東南部に拠点を置いていた崇神以来の王権の根拠地や祭祀形態などを直接的には継承していかなかったと考えるほうがふさわしい。もちろん、古墳文化の構成要素からみれば、応神・仁徳より前と後では形式的にせよ繋がりを有していたが、三輪をみる限り、応神以降の王権は崇神系の王権と断絶していたことになる。この点については、後でも別の側面から検討したい。

(2) 残された主な課題

最後に、これまで取り上げてこなかった非河内政権論の論拠を概観し、現況を整理しておきたい。まず、非河内政権論者からは、もともと河内における在地勢力は脆弱であって、河内に大和に代わる新興勢力が勃興したことが考えられないという評価がある（熊谷1991・1997ほか）。そこでは、近藤義郎氏により河内が「未開の原野」であったというかつての言及（近藤1983）を引き合いに出しつつ、有力臣姓氏族の非存在という文献史学の成果とも重ねて、上記の見解が出されている。ただし、河内は弥生時代以来の集落が存続し、けっして未開の原野ではない。また古墳時代の前期に遡って、玉手山古墳群や松丘山古墳などが存在することからも、明らかにその前提となる在地勢力が存在したことを見えてなんら問題はない（白石2006ほか）。

また臣姓氏族の分布については、確かに葛城臣と呼ばれた勢力をはじめ、より早くに諸豪族が大和盆地内で実力を形成していたことが想定される。ただし、4・5世紀代の大和の大型古墳は、馬見古墳群や佐紀盾列古墳群に集中するため、臣姓氏族によるとみなしうる古墳が、自立的な存在として盆地各地で築造されるのは、むしろ6世紀か遡って5世紀頃であろう。6世紀での大型古墳の立地の様相は、大夫制との連関を想定すべきかもしれない。その起源が5世紀だとすれば、倭王が巨大古墳を河内で築いている間のことである。例えば、先にみたように三輪氏に連なる勢力は少し早く4世紀末頃から拠点を形成していく状況を記したが、大和での支配関係が変わった段階に、大和内で後に氏族とまとめられる勢力が成長していったことが考えられるであろう。つまり、5世紀に河内に政権の拠点があったとしても、大和での有力勢力の台頭は矛盾するものとも言えないものである。

他の非河内政権論の根拠として、大和国の中市郡や城下郡に倭屯田（ヤマトノミタ）が奈良時代にいたるまで続くことに注目し、宮の所在地が大和にあった傍証としている（和田翠1988a）。この倭屯田は、考古学的にも検討されているが（坂2003）、十分に確定した事例であるわけでもなく、今後引き続き奈良盆地内の遺跡の盛衰などを辿る必要がある。倭屯田がいつ成立したかがまず問題であり、たとえ4世紀以来のものであったとしても、重要な土地ゆえに、王宮などと同様に、王統が変わっても、その地の支配が継承されたことなどは十分に想定されるべきであろう。

さらに、奈良県橿原市の曾我遺跡を例にして、各地からの原石を集めた玉造生産の中心地が大和にあることも注目されている（和田翠1988a）。しかし、同様の手工業生産の中心地として、鍛冶生産の大和府柏原市大須遺跡や須恵器を生産する大阪府堺市周辺の陶邑窯址群などは周知の通りであり（菱田2007ほか）、大和のみに政権基盤があったとするわけにはいかない。文献上では陶邑製品と大和の三輪山祭祀との関係は強くみえるが、そのような関係が成立するのは、先に述べたように須恵器が三輪山に持ち込まれる5世紀中頃以降である。5世紀前半までの須恵器は河内では多くもたらされるものの大和での出土は多くないことを考え合わせても、大和の優越をみると難しい。

これ以外には、倭の表記はヤマトであって、倭の五王が「倭」と名乗ることも大和を基盤であったからだという見解もある（和田翠1988a）。ただ、あくまで倭は対外的な呼称の「わ」であり、後の大和という地域名称を反映しているとは限らない。邪馬台国以前の「倭」の用例も考え合わせると、後に倭に「やまと」の読みを与えたにしても、倭が日本列島の中心を占める国として中国から与えられた名称として機能し続けていたことは考えておくのが良いだろう。またその一方で、王宮と同様に、王位の継承者としては出自にかかわらず「倭」を名乗っていたとしても不思議はなかろう。

以上のようにみてくると、非河内政権論の諸論拠は必ずしも確実なものとは言えないだろう。ただし、白石太一郎氏などが既に言及するように、河内に大型古墳ができても、それ以前の王陵が所在した大和北部の佐紀盾列古墳群などは継続して大型古墳を築造しているなど、河内勢力が大和勢力から

王権を奪い取ったとは言えない（白石2006ほか）。実証は難しいが、入り婿として女系の形で王統が繋がるというような仮説（白石2006ほか）は、考古学的な知見と齟齬は少ないものと思われる。そこで、この点にかかわる直木孝次郎氏の近年の研究（直木2006）に触れておきたい。

直木氏は、吉井巖氏の研究（吉井1967）を継承しつつ、応神の3人の皇子について、血統上の系譜を復元している。まず、皇子のうちの大山守（オホヤマモリ）命は応神と高木之入日壳（高城入姫、タカギノイリビメ）の子であるが、この妃はイリの称を持つことから、崇神系の子女と推測している。また、応神の皇子の宇遲能和紀郎子（菟道稚郎子、ウジノワキイラツコ）は、丸邇（和珥、ワニ）氏系の宮主矢河枝比壳（ミヤヌシノヤカハエヒメ、宮主宅媛、ミヤヌシヤカヒメ）の子であることが記紀にも記されているが、造作の可能性を指摘する。そして、残る皇子の大雀（大鷦鷯、オオサザキ）命、すなわち仁徳は、中比壳（仲姫、ナカツヒメ）の子であるが、この中比壳の父は品陀真若王とされるものの、品陀真若王の実在性を疑い、系譜が不明とする。さらに詳細な復元案と系譜関係の造作過程などを直木氏は推測しているが、解釈が加わるので、これ以上をここでは記さない。

応神の皇子の中で上記の3皇子のみが特筆する一連の伝承を持っており、それら3皇子の存在は注目に値する。これを踏まえて考古学的な側面からもみていきたいが、まず触れておきたいのは、4世紀代の王陵とみられる古墳の動向である。近年の埴輪などの研究により、これまで佐紀古墳群で最古とみられていた五社神古墳（現神功陵）がやや新しいとされ、柳本古墳群でも景行陵とされる渋谷向山古墳の年代が今までの想定より新しいと指摘されるようになってきた（高橋2004・白石2009ほか）。それによって、行燈山古墳（現崇神陵）→宝来山古墳（現垂仁陵）→渋谷向山古墳（現景行陵）という築造順が復元されうる可能性が出てきており、記紀系譜との整合性が出てくるような事態になっている。そして、実在かで意見が分かれる成務の陵は狭城盾列陵とあり、規模の上でみれば王陵と呼ぶべき佐紀古墳群の五社神古墳（現神功陵）などとの対応が導かれる蓋然性もある。もちろん、現状ではかなり資料不足であり、あまりに記紀に擦り寄せすぎるのは慎重であるべきだが、今後の研究の進展には注意しておいて良かろう。

個別古墳の築造順はここでは問わないにしても、王陵級の大型古墳の変遷からすれば、先行する大和東南部の柳本古墳群等に対して、大和北部の佐紀古墳群が拮抗しつつ勢力を伸ばしていく。さらにつの後は、津堂城山古墳など河内の古市古墳群でも大型古墳が出現し、その一方で大和西部にも馬見古墳群が築造を継続する様子が窺える。

それをふまえて、先に挙げた応神の皇子の伝承に戻れば、古墳の動向にも十分に呼応している可能性が出てくる。まず、宇遲能和紀郎子が奈良盆地東北部から山城・近江にかけて勢力があったという和珥氏の系譜に位置付けられており、和珥氏がこの時期の氏族として存在したとは考えにくいかもしれないが（熊谷1991）、4世紀頃の大和北部の勢力を後に和珥の先祖として伝承されたことなどは十分に考慮しておいてよいだろう。また、品陀真若王については造作の所産としても、品陀であることを重視すると、中比壳が河内の勢力の娘であることを史的背景にしていたことも十分に考えられる。その点を考慮すれば、崇神系の高木之入日壳一大山守命、丸邇（和珥）氏系の宮主矢河枝比壳—宇遲能和紀郎子、さらに品陀真若王系？（系譜不明）の中比壳一大雀命が、それぞれ大和東南部の柳本古墳群、大和北部の佐紀古墳群、河内の古市古墳群とも重なりうるのではないだろうか。

また、記紀では大山守命は応神の命に背いて挙兵するのに対し、宇遲能和紀郎子と大雀命は王位を譲り合うという伝承になっているが、4世紀末以降の段階に大和・柳本古墳群における大型墳の築造が継続していかないのに対し、大和北部では大型墳の築造が継続する点とも一致を見せる。そして、最終的にはこれまでの王族とは離れた仁徳の王統が政権の中心を占めるようになったという道筋が描

かれているため、佐紀で王陵と呼ぶべき当該期の最大の古墳の築造が継続せず、河内の古墳が隆盛することに呼応するであろう。さらに、その時期以降の河内とかかわる王権が大和の東南部などにも拠点をもちえた背景としても、大山守命の死後の大和東南部への進出を読み取りうるよう思う。

さらに、仁徳の后妃もみてみれば、葛城之曾都毘古（葛城襲津彦、カヅラキノソツビコ）の娘である石之比売（磐之媛、イワノヒメ）、日向の髪長比売（媛）、そして丸邇（和珥）系の宇遲能和紀郎子の妹である八田若郎女（ヤタノワカイラツメ、矢田（八田）皇女）などが挙げられている。これらも、奈良西部の馬見古墳群、宮崎の西都原古墳群、奈良北部の佐紀古墳群と対応関係を見せており、馬見・佐紀両古墳群は、この後も古市・百舌鳥古墳群と併存して大型古墳の築造を継続する。

このように、記紀の后妃・皇子の伝承などは、古墳群の動向の大枠とかなり整合するものと評価できる。直木氏は、宇遲能和紀郎子や品陀真若王を後の造作とみるが（直木2006）、その根拠は確かなものとは言えない。応神の後継として特に記紀に明確に掲げられた3皇子とその出自については、3古墳群に反映される勢力を史的背景を持つとみなす方がむしろ理解しやすいのではなかろうか。そこには、応神が大和などの既存の王権主勢力と婚姻関係を結びながら勢力を高めたことが示されているとともに、むしろ大和勢力とは画する形で仁徳が王位を継承し、百舌鳥の古墳群が展開した可能性を指摘できる。また、応神非実在説などを本稿でも先に取り上げたが、3皇子の伝承は応神と仁徳が別人物であることを前提としており、その史実をもとに成立したとみるほうが自然であろう。

この点はさらに応神の出自という問題につながり、既に忍熊王の反乱伝承や佐紀古墳群との関係からの分析なども加えられているが（塚口1993ほか）、神功皇后伝承を含む造作の過程を考慮に入れる必要もあるため、本稿では触れないでおきたい。ただいざれにせよ、記紀の伝承も核まで丹念に削ぎ落とした上で考古資料と相互吟味をすれば、新たな視界を生む可能性が十分にあるだろう。

最後に、4世紀末以降の河内勢力による王権掌握がそれ以前と比べて、王権・政権の権力構造に変化があるのか、という点に触れておきたい。文献史学としては、崇神などの初期の倭政権については確実な文献史料が乏しいこともあって、直木孝次郎氏も「信用できるのは古墳を主とする遺跡・遺物だけと言っても過言であるまい」と実態をつかみにくい点を吐露している（直木2005）。

この点に関して考古学の諸説をみると、白石太一郎氏は政治システムとしても基本的変化が生じたとは考え難いとみる見解を示している（白石2006ほか）。確かに、古墳文化として構造的に継続する側面も存在したことは確認できる。ただその一方で、都出比呂志氏が首長墓系譜論を展開しており、畿内周辺部を含め列島各地の古墳の築造において、大和や河内の古墳の動向と対応する時期に、系譜が断絶したり、新たな系譜が誕生したりといった変化が起こっていることを見出している（都出1988ほか）。もちろん既に言及のあるように（下垣2004、藤田2009ほか）、各地の変化が連動していることを確言できるほどの古墳編年の整備は今後の課題であるが、大枠としての類似性を確認でき、政権の構成体全体としての変動があったとみるのが適切であろう。政権のより構造的な変化の内実に関しては、考古学からの解明は困難ながら、意識的な追究がこれからも必要である。

おわりに

以上、古墳時代政権交替論の中でも当否に議論が分かれる河内政権論を中心に、従来の研究を整理した上で、いくつかの論点については大胆ながらも若干の私見を示した。

河内政権論とそれへの批判の各種の研究においては、微妙に様々な見解が混ざり錯綜している部分もある。そのため本稿でも、諸先学の成果を十分に咀嚼して検討ができたとは言えないが、これまで

やや混然として論議されることが少なくなかった部分には整理も必要であろう。本稿を踏まえて改めて述べれば、少なくとも次の3つの論点は区別しつつ、それぞれを検証するのが望ましい。

1つめは、応神以降の王権の基盤はどこにあったか。大和か河内かその双方か。2つめは、応神頃に王統として断絶があったかどうか。3つめは、応神より前と後で王権・政権の権力構造に変化はあるのか、である。これらはもちろん互いに連関する論点ではあるが、厳密には独立する問題であろう。さらに、1つめの論点も、政治的な拠点としての基盤と、王の出自としての基盤という側面などを、分けて考えることが必要である。

本稿の整理と若干の検討に基づけば、1つめの論点については、政治的な拠点は王宮に、王の出自としての拠点は王陵に現れる傾向があり、その意味では5世紀代は大和と河内の双方が拠点と言って良い状況にある。ただし、応神から反正段階までは王宮と王陵のいずれからも河内に重きが置かれていたと言うべきであろう。また、王統の問題については、三輪山山麓の動向やそれにかかる伝承などから、直接的に前代の系譜と繋がらない可能性を指摘した。そして、応神の3皇子をめぐる伝承は大型古墳群の動向とも対応し、応神が婚姻という形で伝統的大和勢力と結び付く一方で、それまでの大和勢力の王統とは一線を画して仁徳の王系が成立したものと推測される。もちろん、王統と呼べる確立したものがあったかどうかも含め、さらなる検証は必要である。最後の権力構造の側面としては、古墳文化そのものの継続性からみて応神・仁徳が前代を継承する部分は多かったであろうが、列島各地の支配という面において構成体としての変化を伴うものであったと推察できる。

本稿で取り上げた論争は、言うまでもないが決定的な証拠が欠けているから見解が分かれているのであり、したがって不確かな状況証拠の積み重ねになっている部分も少なくない。本稿の結論も想像の域を出ない部分が多くたかもしれないが、少なくとも実証性に乏しい点をひとまず削ぎ落していくことは必要である。ただ、あまりに厳密なことを求めすぎて、何もかもを不可知の領域に押し込むことも必ずしも意義深いものとは思えない。考古学的に検証の難しい課題について、現時点ではたとえ資料不足の感はあっても、今後に期待しつつ現状での見通しを示すことに臆するべきではないように思う。また、専門分化により研究成果の把握は困難さを増しているが、それを乗り越えて文献史学と考古学の双方が時代像を解明する取り組みは、今後さらに求められるはずである。ただし、その際は史資料の限界をわきまえつつも、あくまで批判的に相互検証することが不可欠であろう。古墳時代の研究がそのような方向へと進展することを期待しつつ、筆者自身も本論で詳論できなかった点などについて、別の機会により具体的な検討を試みていきたいと考えている。

主要・引用参考文献

- 石田茂輔1970「景行天皇陵出土の須恵器」『書陵部紀要』第22号
石野博信ほか2005『大和・纏向遺跡』学生社
井上光貞1960『日本国家の起源』岩波新書（青版D90）
上田正昭1967『大和朝廷』角川書店（1995講談社学術文庫）
上田正昭2003「倭王権の成立と東アジア」「古代王権の誕生」I <東アジア編>角川書店
江上波夫ほか1949「日本民族文化の源流と日本国家の形成」『民族学研究』13巻3号
江上波夫1966『騎馬民族国家』中公新書147
大橋信弥1979「名代・子代の基礎的研究—一部民制論序説—」『論究日本古代史』日本史論叢会編、学生社（1996
『日本古代の王権と氏族』吉川弘文館）
大平 聰1986「日本古代王権継承試論」『歴史評論』No.429
大平 聰2002「世襲王権の成立」『倭国と東アジア』<日本の時代史2>、吉川弘文館

- 岡田精司1968「河内大王家の成立」『日本書紀研究』第3冊、塙書房（1970『古代王権の祭祀と神話』塙書房）
- 小野山節1970「五世紀における古墳の規制」『考古学研究』第16卷第3号
- 笠野 豪1975「景行天皇山辺道上陵の出土品」『書陵部紀要』第26号
- 加藤謙吉2002『大和の豪族と渡来人 葛城・蘇我氏と大伴・物部氏』<歴史文化ライブラリー144>、吉川弘文館
- 加藤謙吉2010「文献史料から見た繼体大王」『繼体大王の時代 百舌鳥・古市古墳群の終焉と新時代の幕開け』大阪府立近つ飛鳥博物館
- 門脇禎二1984『葛城と古代国家』教育社（2000講談社学術文庫）
- 門脇禎二・岡田精司・水野正好・白石太一郎・笠井敏光1988『再検討「河内王朝」論』六興出版
- 狩野 久1970「部民制一名代・子代を中心として」『講座日本史』1 <古代国家>、東京大学出版会（1990『日本古代の国家と都城』東京大学出版会）
- 狩野 久1993「六・七世紀の支配構造」『岩波講座 日本通史』第2巻 <古代1>岩波書店
- 鎌田元一2001『律令公民制の研究』塙書房
- 鎌田元一2008『律令国家史の研究』塙書房
- 川口勝康1981「五世紀の大王と王統譜を探る」『巨大古墳と倭の五王』青木書店
- 川口勝康1982「四世紀史と王統譜」『人文学報』No.154
- 川西宏幸1988『古墳時代政治史序説』塙書房
- 岸 俊男1959「古代豪族」『世界考古学大系』第3巻、平凡社
- 岸 俊男1960「ワニ氏に関する基礎的考察」『律令国家の基礎構造』大阪歴史学会
- 岸 俊男1966『日本古代政治史研究』塙書房
- 岸 俊男1984「画期としての雄略朝」『日本政治社会史研究』上、塙書房（1988『日本古代文物の研究』塙書房）
- 岸本直史2010「河内政権の時代」『史跡で読む日本の歴史』2 <古墳の時代>、吉川弘文館
- 北 康宏2007「陵墓治定信憑性の判断基準」『人文學』第181号
- 鬼頭清明1992「磐余の諸宮とその前後」『新版古代の日本』第5巻<近畿 I >
- 熊谷公男1991「大和と河内—ヤマト王権の地域的基盤をめぐってー」『奈良古代史論集』二、真陽社
- 熊谷公男1997「大和から河内へ 移動する王墓と王権の謎」『日本古代史〔王権〕の最前線』<別冊 歴史読本87>、新人物往来社
- 熊谷公男2006「文献史学から見た畿内と近国—氏族分布論」『列島の古代史 ひと・もの・こと』1 <古代史の舞台>、岩波書店
- 小林敏男1985 a 「古代王朝交替説批判」『鹿児島短期大学研究紀要』第35号
- 小林敏男1985 b 「古代王朝交替説批判（続）」『鹿児島短期大学研究紀要』第36号
- 小林敏男1990「王朝交替論をめぐって」『争点日本の歴史』第2巻
- 小林敏男2006「王朝交替説とその方法論をめぐって」『日本古代国家形成史考』校倉書房
- 小林行雄1951「日本上代における乗馬の風習」『史林』第34巻 第3号（1961『古墳時代の研究』青木書店）
- 近藤義郎1983『前方後円墳の時代』岩波書店
- 佐々木幹雄1975「三輪と陶邑」『大神神社史』大神神社
- 佐々木幹雄1976「続・三輪と陶邑—三輪氏の成立についての覚え書—」『民衆史研究』第14号
- 佐々木幹雄1979「三輪山出土の須恵器」『古代』第66号
- 佐々木幹雄1980「三輪山祭祀の歴史的背景—出土須恵器を中心として—」『古代探叢』<滝口宏先生古稀記念考古学論集>、早稲田大学出版部
- 佐々木幹雄1981「三輪山出土の須恵器—土器観察表—」『古代』第69・70合併号
- 佐々木幹雄1986「新出土の三輪山須恵器」『古代』第81号
- 佐藤長門2009『日本古代王権の構造と展開』吉川弘文館
- 佐原 真1993『騎馬民族は来なかった』(NHKブックス) 日本放送出版協会

- 下垣仁志2004「河内王朝論と玉手山古墳群」『玉手山7号墳の研究』<大阪市立大学考古学研究報告>第1冊
- 白石太一郎1969「畿内における大型古墳群の消長」『考古学研究』第16巻第1号
- 白石太一郎1988「巨大古墳の造営」『古代を考える 古墳』吉川弘文館
- 白石太一郎1999『古墳とヤマト政権—古代政権はいかに形成されたか』文春文庫036
- 白石太一郎2000『古墳と古墳群の研究』塙書房
- 白石太一郎2006「古市古墳群の成立とヤマト王権」『応神大王の時代—河内政権の幕開け—』大阪府立近つ飛鳥博物館
- 白石太一郎2009「4世紀の東アジアとヤマト王権の変革」『河内平野の集落と古墳』大阪府立近つ飛鳥博物館
- 鈴木靖民1980『古代国家史研究の歩み』新人物往来社（1983、増補版）
- 関川尚功1985「大和における大型古墳の変遷」『考古学論叢』第11冊、奈良県立橿原考古学研究所
- 菌田香融1968「皇祖大兄御名入部について—大化前代における皇室私有民の存在形態」『日本書紀研究』第3冊（1981『日本古代財政史の研究』塙書房）
- 高橋克壽2004「埴輪の成立と展開」『畿内の巨大古墳とその時代』<季刊考古学別冊14>
- 高橋照彦2007a「六・七世紀の大王陵における合葬について—摂津・勝福寺古墳の位置付けをめぐって—」『考古学論究』小笠原好彦先生退任記念論集刊行会
- 高橋照彦2007 b「須恵器工人の存在形態に関する基礎的検討」『須恵器生産における古代から中世への変質過程の研究』（科学研究費補助金報告書）、大阪大学大学院文学研究科
- 田中晋作1990「百舌鳥・古市古墳群の被葬者の性格について」『古代学研究』第122号、1990年（大幅加筆の上、2001『百舌鳥・古市古墳群の研究』学生社、所収）
- 田中晋作1993「百舌鳥・古市古墳群成立の要件—キャスティングボートを握った古墳被葬者たち—」『関西大学考古学研究室開設40周年記念 考古学論叢』1993年（大幅な加筆の上、2001『百舌鳥・古市古墳群の研究』学生社）
- 田中 琢1991『倭人争乱』<集英社版 日本の歴史 ②>集英社
- 塚口義信1976「佐紀盾列古墳群」に関する一考察』『柴田實先生古稀記念 日本文化史論叢』（1980『神功皇后伝説の研究』創元社）
- 塚口義信1985「4世紀後半における王権の所在—香坂王・忍熊王の謀反伝承に関する一考察—」『末永先生米寿記念献呈論文集』坤
- 塚口義信1993「佐紀盾列古墳群とその被葬者たち—4世紀末の内乱と“河内大王家”的成立—」『ヤマト政権の謎をとく』学生社
- 都出比呂志1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』第22号史学篇（2005『前方後円墳と社会』塙書房）
- 角田文衛・上田正昭ほか2003『古代王権の誕生』1<東アジア編>角川書店
- 戸原純一・笠野毅1977「崇神天皇陵外堤及び墳丘護岸区域の事前調査」『書陵部紀要』第28号
- 直木孝次郎1964「応神王朝論序説」『難波宮址の研究』第5（1964『日本古代の氏族と天皇』塙書房、2005『古代河内政権の研究』塙書房）
- 直木孝次郎1974「応神天皇の実在性をめぐって」『人文研究』25巻10分冊、大阪市立大学文学部（1975『飛鳥奈良時代の研究』塙書房、2005『古代河内政権の研究』塙書房）
- 直木孝次郎1977「天香久山と三輪山」『人文研究』29巻1分冊、大阪市立大学文学部（1982『古代史の窓』学生社、2005『古代河内政権の研究』塙書房）
- 直木孝次郎2003「応神天皇の誕生」『日本歴史』664号（2005『古代河内政権の研究』塙書房）
- 直木孝次郎2005『古代河内政権の研究』塙書房
- 直木孝次郎2006「応神天皇の皇子大山守命について—その死の意味するもの—」『応神大王の時代—河内政権の幕開け—』大阪府立近つ飛鳥博物館
- 直木孝次郎・足利健亮・都出比呂志・中尾芳治・和田萃1992「河内政権論をめぐって」『大阪の歴史』35、大阪市史編纂所

- 中久保辰夫2009「5世紀における供膳器の変化と地域性」『待兼山論叢』第43号史学篇、大阪大学大学院文学研究科（大阪大学文学会）
- 中島和彦1993「安康天皇陵」「天皇陵」総覧＜歴史読本特別増刊＞、新人物往来社
- 仁藤敦史2005「王統譜の形成過程について」『王統譜』小路田泰直・広瀬和雄、青木書店
- 仁藤敦史2009「繼体天皇」「日出づる国の誕生」＜古代の人物1＞清文堂
- 橋本輝彦1996「近年の調査成果から見た三輪山祭祀・三輪氏について」『大美和』91号、大神神社
- 早川万年1986「名代子代の研究」『古代中世の政治と地域社会—筑波大学創立十周年記念日本史論集』雄山閣出版
- 原島礼二1970『倭の五王とその前後』塙書房
- 坂 靖2003「倭屯倉の成立過程をめぐって」『檍原考古学研究所論集』第十四、八木書店（補訂の上、2009『古墳時代の遺跡学—ヤマト王権の支配構造と埴輪文化—』雄山閣）
- 坂 靖2005「帆立貝式古墳の階層性」『季刊考古学』第90号（2009『古墳時代の遺跡学—ヤマト王権の支配構造と埴輪文化—』雄山閣）
- 坂 靖2008「奈良盆地の古墳時代集落と居館」『考古学研究』第55巻第2号
- 菱田哲郎2007『古代日本 国家形成の考古学』＜学術選書025、諸文明の起源14＞、京都大学学術出版会
- 菱田哲郎2010「天皇陵と古墳研究」「歴史のなかの天皇陵」思文閣出版
- 平野邦雄1985『大化前代政治過程の研究』吉川弘文館
- 広瀬和雄1987・1988「大王墓の系譜とその特質（上・下）」『考古学研究』第34巻第3・4号（2007『古墳時代政治構造の研究』塙書房）
- 広瀬和雄2007『古墳時代政治構造の研究』塙書房
- 福永伸哉1998「対半島交渉からみた古墳時代倭政権の性格」『青丘学術論集』第12集（加筆の上、2005『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会）
- 藤田和尊1998「中期における政権の所在」『網干善教先生古稀記念考古学論集』1998年（「政権の所在に関する考察」として2006『古墳時代の王権と軍事』学生社、所収）
- 藤田和尊2009「河内政権肯定論—王宮の所在とその性格—」『一山典還暦記念論集 考古学と地域文化』一山典還暦記念論集刊行会
- 古市 晃2010「王名ササギについて」『日本古代の王権と社会』塙書房
- 北郷泰道2005『西都原古墳群』＜日本の遺跡1＞、同成社
- 本位田菊士1978『日本古代国家形成過程の研究』名著出版
- 前之園亮一1986『古代王朝交替説批判』吉川弘文館
- 水谷千秋1995「大化前代の王族と皇親氏族」『ヒストリア』第149号（1999『繼体天皇と古代の王権』和泉書院）
- 水谷千秋1999『繼体天皇と古代の王権』和泉書院
- 水野 祐1954『日本古代王朝史論序説』小宮山書店、増訂版（1992新版、早稲田大学出版部）
- 水野 祐1993『日本古代王朝史論各説』下、早稲田大学出版部
- 森 浩一1962「日本の古代文化—古墳文化の成立と発展の諸問題—」『古代史講座』3＜古代文明の形成＞、学生社
- 森下章司2004「鏡・支配・文字」『文字と古代日本』1＜支配と文字＞、吉川弘文館
- 森田克行2006『今城塚と三島古墳群』＜日本の遺跡7＞、同成社
- 山尾幸久1983『日本古代王権形成史論』岩波書店
- 山尾幸久1986『日本古代の国家形成』大和書房
- 山中鹿次2002「中期大和王権の開始と始祖に関する覚書」『日本書紀研究』第24冊
- 吉井 巍1967「応神天皇の周辺」「天皇の系譜と神話」塙書房
- 義江明子1988「古系譜の『児』（子）をめぐって—共同体論と出自論の接点—」『日本歴史』484号（2000『日本古代系譜様式論』吉川弘文館）
- 義江明子1992「出自系譜の形成と王統譜—『伊福部臣古志』と『粟鹿大（明）神元記』の再検討を通じて—」『日本歴史』485号（2000『日本古代系譜様式論』吉川弘文館）

- 本歴史』528号（2000『日本古代系譜様式論』吉川弘文館）
- 吉田 晶1973『日本古代国家成立史論』東京大学出版会
- 吉田 晶1982『古代の難波』<教育社歴史新書>教育社
- 吉村武彦2003「ヤマト王権の成立と展開」『古墳時代の日本列島』青木書店
- 吉村武彦2010『ヤマト王権』<シリーズ日本古代史②>岩波新書（新赤版1272）
- 和田 萃1973「磐余地方の歴史的研究」『磐余・池内古墳群』奈良県教育委員会
- 和田 萃1985「三輪山祭祀の再検討」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集（1995『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』下、塙書房）
- 和田 萃1988a『大系日本の歴史』2<古墳の時代>、小学館
- 和田 萃1988b「祭祀の源流—三輪山と石上山—」『大神と石上』筑摩書房（1995『日本古代の儀礼と祭祀・信仰』下、塙書房）
- 和田晴吾1987「古墳時代の時期区分をめぐって」『考古学研究』第34巻第2号

【付記】 成稿にあたっては、寺前直人氏、中久保辰夫氏、金澤雄太氏をはじめ、大阪大学大学院生等から種々の有益なご教示を得た。末尾ながら、厚く御礼を申し上げたい。

6. 古市古墳群の形成と居住域の展開

伊藤 聖浩

1. はじめに

4世紀後葉、河内平野南東部を流れる大和川とその支流の石川との合流地点付近に、二重周濠を備えた墳丘長200mを超える前方後円墳、津堂城山古墳が築造される。これ以降、石川西岸から羽曳野丘陵北東縁部の中・下位段丘面に、およそ東西3.5km、南北4.7kmの範囲で、墳丘長100m以上の大型前方後円墳が々々と築かれる⁽¹⁾。古市古墳群の形成である（図1）。

古市古墳群には、墳丘長425mの前方後円墳である誉田御廟山古墳を最大規模として、直径または一辺が約10mの円・方墳など、合計120基程度が確認され、顕著な階層構成を取る古墳群として知られている。この中には、墳丘規模が200mを超える大型前方後円墳も7基存在し、当該時期の最高首長墳を中心に形成された古墳群であることは間違いない。

古市古墳群の出現は、いわゆる「河内政権論」の議論の題材として、しばしば俎上に上げられる。しかしながら、古墳や古墳群そのものを資料としての論争は、なかば膠着状態であるといつてもよい。本論では、古市古墳群が存在する地域の居住域の展開を、実際の発掘調査事例を中心に検討を加えることとする。

2. 既往の研究

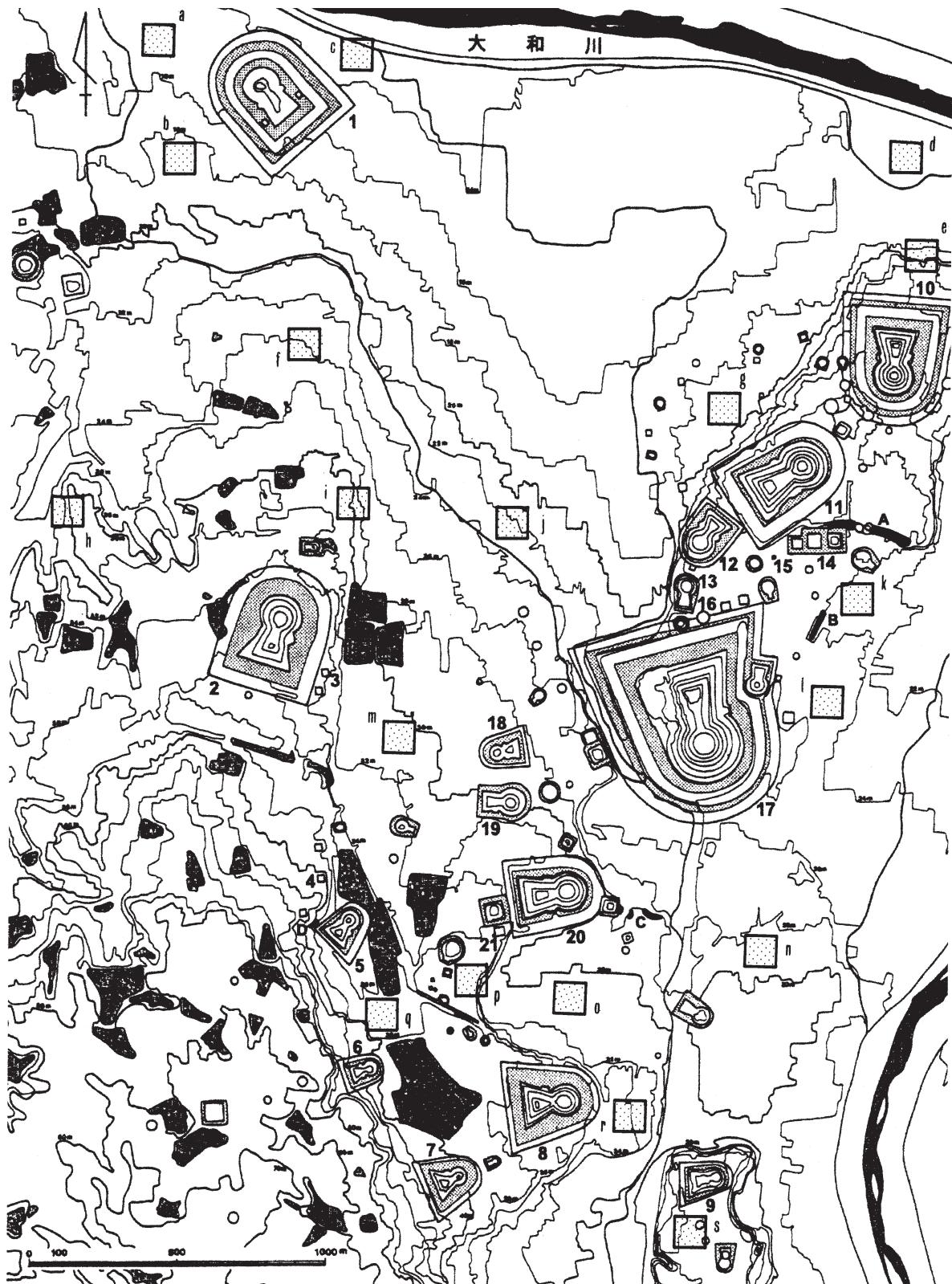
古市古墳群やその周辺において、古墳築造にかかる居住域あるいは生産拠点に関する研究を以下に概観してみたい。

広瀬和雄は、古市古墳群が立地する地域は、砂礫土壤で構成された段丘地形のため、7世紀まではほとんど開発されずに、未開の原野であったことを説く（広瀬1983：pp. 64–65）。確かに広瀬のこの見解の通り現在までの発掘調査の成果では、5世紀代あるいはそれ以前の古墳時代竪穴式住居や掘立柱建物よりも、7～8世紀代の掘立柱建物やそれに付随する遺構が圧倒的に多く検出されている。

京嶋覚は、古市古墳群の北西約5kmに位置する長原遺跡の当該時期の集落遺構について、掘立柱建物2棟前後と竪穴式住居1棟の組み合わせが基本的に見られること、また総柱建物が同時期の他の遺跡と比べてその割合が高いこと、桁行3間以上の総柱建物は倉庫ではなく、住居の可能性もあることを指摘している（京嶋1993）。

高橋工は、長原遺跡周辺の旧地形の復元を通して、集落立地と水田範囲の関係を考察した。長原遺跡を中心とする古墳時代中期の集落は、前代から直接的に継続せず空白期間を持ち突如出現すること、これらの集落周辺には、それに見合う水田域の存在の復元が困難なこと、韓式系土器が多量に出土すること、TK10型式段階までにこれらの集落が衰退すること等を挙げ、長原遺跡における集落の特異性を指摘した（高橋1999）。

杉本厚典は、長原遺跡やその周辺について、弥生時代あるいは古墳時代前期には小規模集落が点在している様子であるが、古墳時代中期になると掘立柱建物が顕著になり、丘陵上部といったやや高い



1. 津堂城山古墳 2. 岡ミサンザイ古墳 3. 岡古墳 4. 五手治古墳 5. 野中ボケ山古墳 6. 峯ヶ塚古墳
 7. 白髪山古墳 8. 前の山古墳 9. 高屋築山古墳 10. 市野山古墳 11. 仲津山古墳 12. 古室山古墳
 13. 大鳥塚古墳 14. 三ツ塚（助太山・中山塚・八島塚）古墳 15. 土師の里8号古墳 16. 狼塚古墳
 17. 誉田御廟山古墳 18. はざみ山古墳 19. 野中宮山古墳 20. 墓山古墳 21. 西墓山古墳
 A. 土師の里埴輪窯跡群 B. 土師の里南埴輪窯跡群 C. 誉田白鳥埴輪窯跡群 D. 野々上埴輪窯跡群
 a. 津堂遺跡 b. 小山遺跡 c. 小山平塚遺跡 d. 船橋遺跡 e. 国府遺跡 f. 北岡遺跡 g. 林遺跡 h. 高鷺遺跡
 i. 葛井寺遺跡 j. 西古室遺跡 k. 土師の里遺跡 l. 茶山遺跡 m. はざみ山遺跡 n. 吉市遺跡 o. 誉田白鳥遺跡
 p. 青山遺跡 q. 軽里遺跡 r. 栄町遺跡 s. 高屋遺跡

図1 古市古墳群と関連遺跡分布図（天野 2008 より一部加筆）

地点にも、掘立柱建物や独立棟持柱の建物が現れ、これらの周囲に区画溝をもつようになるという。また、馬に関わる遺構が比較的多く認められることから牧の存在を考え、渡来系集団が耕地開発や牧経営など担当して、集落の機能が分化していく状況を想定する（杉本2003：pp. 62–64）。

田中清美は、古墳時代中期の河内平野における集落の様相について、韓式系土器の出土が顕著な点を指摘する。灌漑技術や河川制御の堤防構築技術に新來のものが存在することを踏まえ、5世紀代には渡来系集団が河内平野の開発に大きな関与をもったものとする（田中1989）。

積山洋は、上町台地に法円坂大型倉庫群が現れることに伴い、これとほぼ同時期に河内平野において集落が出現する事象に注目した（積山1994）。

山田隆一は、旧大和川流域の集落は庄内式併行期に規模を急激に拡大し他地域産土器も多く見られ、特に「中田遺跡群」、「加美・久宝寺遺跡群」において、その傾向が顕著に現れるという。またこの現象は纏向遺跡の動向と連動し、旧大和川流域の集落は物資流通に大きく関わった可能性を考える。その後の布留式前半段階には、集落の多くが規模を縮小させるという。しかし、一部の集落は、須恵器出現前後まで存続するものや5世紀代に亘って拡大していくものもあることを指摘する（山田1994：pp. 138–140）。

一方、古市古墳群内の手工業生産に関しては、花田勝広と菱田哲郎の論考がある。花田は、古市・百舌鳥古墳群内での鉄滓や鍛冶炉跡、鞴羽口などの出土例に注目し、大型古墳築造に伴う専用の鍛冶工房の存在を考える（花田1989：p. 76、2002：pp. 7–9）。菱田も、土師の里、誉田白鳥や野々上といった埴輪窯群、さらには陶邑での須恵器生産の拠点などが、大型古墳群内部やその周辺に集中することに着目し、これらを「造墓コンプレックス」と呼称している。5世紀になると河内平野においてさまざまな手工業生産の拠点が配置され、王権を支える経済的基盤を形成していたと評価する（菱田2004）。

また、古墳築造に伴って居住空間が創設されるという論点で、都出比呂志は、前方後円墳築造に関わって多数の労働者が集められ、拠点となる都市的な集落、中国皇帝陵の陵邑に相当するタウンが存在したことを想定している（都出1998：pp. 101–105、2000：pp. 54–56、2005：pp. 206–207）。松木武彦も、古墳が一定の場所に凝集することを契機にして、経済的な交流が創出され、都市的要素の萌芽が現れると理解する（松木1998：p. 135）。

以上の研究状況を踏まえれば、古市古墳群内において、現在までの発掘調査成果に因る限り、実際の居住域の検出例から見て、当該時期の集落様相が小規模ないし不明瞭な点が指摘できる。また、古市古墳群やその周辺の河内平野には、当該時期にあっては大規模な集落や手工業生産の拠点が形成されていくことが挙げられる。

そこで、本論では、古市古墳群内での居住域に関する遺構や遺物の検出状況を改めて集成し、その内容を確認したい。また、古市古墳群周辺に位置する長原遺跡など同時期の集落の様子と比較検討してみることにする。そして、古市古墳群内の居住域の性格や、古市古墳群造営主体について考察を試みることにする。

3. 古市古墳群内における居住・生産域の実態

現在までに古市古墳群内に相当する羽曳野市や藤井寺市での当該時期の居住域関係資料の検出事例は、末尾に付した表の通りである（表4～13）。ここでは、遺構が検出された事例はもちろんのこと、遺物の単独での出土、または遺物包含層の検出事例も積極的に取り上げた。この表を見てみると、発

掘調査の及んでいる範囲や面積、その調査頻度を考慮しなければならないが、既往の研究で触れた通り、概して竪穴式住居や掘立柱建物、あるいはこれらに付属する溝や柵等といった、居住域にかかる典型的な遺構の検出例は非常に少ない。特に古市古墳群内の大型前方後円墳の存在を意識すると、その貧弱さは拭えない感がある。

居住域とされる遺跡の平面的な分布を見てみると、2つの様相が指摘できる。1点目は、大型前方後円墳に近接して立地するものである。例えば、津堂城山古墳の場合は、その付近に津堂遺跡、小山遺跡、小山平塚遺跡、大正橋遺跡等が、誉田御廟山古墳では土師の里遺跡、茶山遺跡や古市遺跡等が存在している。これらの居住域は、近隣の大型前方後円墳の時期と重なる遺物や遺構が検出されていることから、古墳築造に関与、あるいはそれを契機に形成された居住域と想定される。

2点目としては、当該時期において、大型前方後円墳の近隣ではなく、その立地箇所から2～4kmとやや離れて分布する居住域の遺跡が存在する。その例として、島泉北遺跡、恵我之荘遺跡、伊賀遺跡、河原城遺跡などが挙げ得る。これらの遺跡については、古墳時代としての居住域として見てみると、古市古墳群の形成時期である古墳時代中期にはほぼ出現している。

一方、古市古墳群が形成される以前について、古墳時代前期前半、さらにその前段階である庄内式期のものを含めて見てみると、古市古墳群が形成される段丘範囲では、確かに古市遺跡ほか数遺跡で土器が出土しているが、現状ではその検出事例は極めて少ない。この時期の居住域は存在していても、小規模な居住的様相であったと推察される。

須恵器出現以前の時期のものは、限定された範囲での検出状況を示す。これらは、津堂遺跡、小山遺跡や小山平塚遺跡といった、津堂城山古墳の近隣において、布留式土器の出土が顕著に認められる。また、五手治古墳や岡古墳が近隣に立地する、はざみ山遺跡でも布留式土器が確認されている。この時期の遺構や遺物は、上記を除いて大型前方後円墳等が築造されている、その他の段丘面付近には、現在のところほとんど確認されていない。しかしながら、須恵器出現以後のTK73型式以降、つまり初期須恵器の段階以降において分布が拡大する傾向が見られる。特にTK208～TK23型式に増加する様相が窺える。

また、古市古墳群内のこれらの居住域については、古墳時代における存続期間に関して見てみると、比較的長期にわたり継続するものがある。古墳時代後期、さらに飛鳥時代まで存続するものである。これらは、古市遺跡、誉田白鳥遺跡、茶山遺跡や土師の里遺跡等が挙げられる。

それとは対照的に、古墳時代に居住域等が形成されてもあまり継続せず、すぐに廃絶、縮小、あるいは断続的に存続する様子を呈するものもある。須恵器の型式でいえば、長くて2型式に及ぶ程度である。これらには、伊賀遺跡、林遺跡がある。両者からは、竪穴式住居が数棟程度であるが検出されているが、出土遺物から一定の時期にはほぼ限定できる。また、これら数棟の竪穴式住居には、ほとんど切り合い関係は見られないで、同一時期に存在してものと理解できる。

以上のように、古市古墳群内の居住域は、大型前方後円墳等の築造を契機に、あるいは古市古墳群形成期間において出現する様子を見て取れる。その一方で、古市古墳群形成の前段階での居住域については、大型前方後円墳が立地する段丘付近では、その痕跡は全く無い訳ではないが乏しい感は否めない。ただし、古市古墳群築造の中心地域からやや離れた段丘周辺部にある尺度遺跡⁽²⁾や船橋遺跡においては、庄内式期から布留式古段階の居住域は確認されている（財団法人大阪府文化財調査研究センター1999、平安学園考古学クラブ1962）。

次に居住域の代表的な遺構である竪穴式住居について検討を加えてみる。古市古墳群内で検出された竪穴式住居の規模については、一辺が3m～5m前後のものが多く、平面積では10m²から20m²前後

表1 壇穴式住居規模

遺跡	地点・「掲載報告書」	遺構	規模(m)		面積(m ²)	時期	備考	
古市古墳群内	はざみ山	HM88 - 15	SB101	5.75	5.75	33.06	船橋0-1	
		HM95 - 10	SH01	6.3	6.3	39.69	6C末～7C初頭	
		HM96 - 16	SH02	5.9	4.8	28.32	?	
			SB01	3.8	3.6	13.68	6C末	
	林		SB21	3.2	3.2	10.24	須恵器出現直前	
		HY92 - 8・9	SB22	4.1	3.3	13.53	須恵器出現直前	
			SB23	4.7	4.7	22.09	須恵器出現直前	
			SB24	3.95	3.95	15.60	須恵器出現直前	
	HY93 - 6		SB01	4.2	4.2	17.64	5C前半	
			SB02	4.2	4.2	17.64	5C前半	
			SB03	4.2	3	12.60	5C前半	
		HY00 - 1	SB01	2.9	2.9	8.41	5C中・後	
			SB02	3.3	3.1	10.23	5C中・後	
土師の里	HJ92 - 10	SB01	3.45	3.2	11.04	TK23・TK47	カマド	
伊賀	88 - 2	SB20	3.55	3.55	12.60	5C後半	カマド	
	88 - 1			4.6	4.6	21.16	TK47	カマド
	「市内H1」			5.3	4.8	25.44	TK23	
	「古市VIII」			3.5	3.5	12.25	TK209	
古市	「古市I」			3.8	3.8	14.44	TK47	
	高鷺中之島	「高鷺中之島」		4.4	4.4	19.36	古墳時代中期	
				3.3	3.7	12.21	TK208～TK10	
古市古墳群外	本郷			4.5	4.5	20.25	TK208～TK10	
	八尾南	SI1	4.5	4.4	19.80	布留式新		
	山之内	86-18	SB11	4.8	4.8	23.04	TK47～MT15	カマド
			SB12	6	5.8	34.80	TK23～TK47	カマド
			SB13	3.4	3.4	11.56	TK208～TK23	
			SB14	(4.5)	4.1	(18.45)	5C末～6C前半	カマド
	86-42	88-36・37	SB04	5.5	5.5	30.25	TK47・TK10(・TK43)	カマド・貯蔵穴
			SB05	5.9	5.9	34.81	TK10	カマド
			SB201	4.8	5.2	24.96	MT15～TK10	カマド
			SB202	5.6	5.5	30.80	6C前～中葉	カマド
	長原	85-16①・16②	SB35	4.3	4.2	18.06	TK216～TK208	
			SB04	4.8	4.8	23.04		
			SB10	4.5	4.5	20.25	TK208～TK23	
			SB11	4.7	4.2	19.74	TK208～TK23	
			SB12	5.3	5.3	28.09	TK23	
			SB23	6.3	6.3	39.69		
			SB24	6.1	6.1	37.21		

※カッコは現存規模

※欄中の「掲載報告書」は表6末尾の「羽曳野市域居住関連資料報告書」に対応

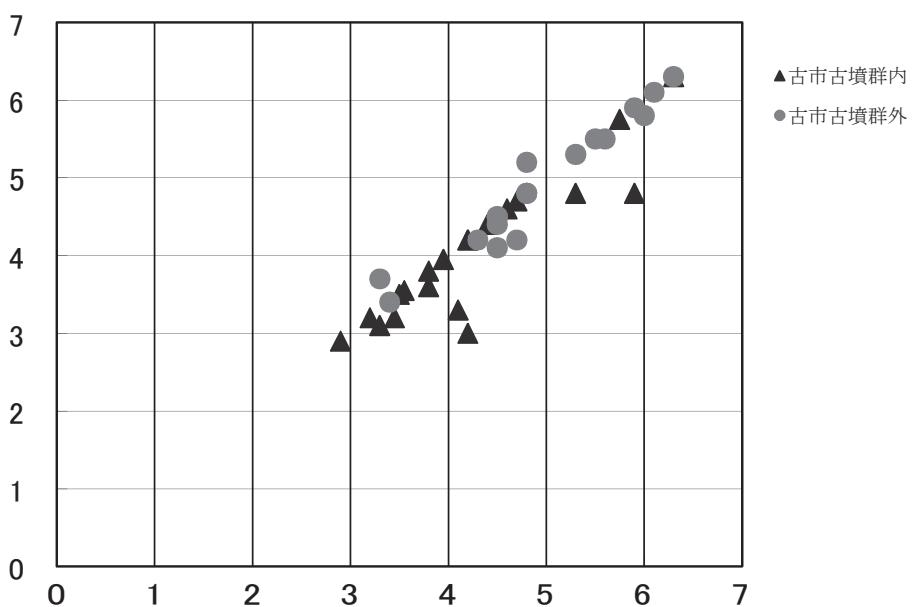


図2 壇穴式住居規模比較（単位：m）

を測る（表1）。この規模は、竪穴式住居の中では、小型のものとして評価できる。また、竪穴式住居の密集度合いに関しても、土師の里遺跡の検出事例を除いて、林遺跡等での大半の竪穴式住居では、切り合いや重複関係はあまり見られない。掘立柱建物も、古市遺跡においてTK23～TK47型式段階である古墳時代中期後半のものが一部で検出されているが、集中して見られる事例は未だ知られていない。また、倉庫と考えられる古墳時代中期の建物も古市古墳群内では未検出である。

古市古墳群内の当該時期の竪穴式住居群の様相については、一般的な集落として評価できない訳ではないが、その平面積が小規模な点、倉庫と考えられる建物をもたないこと、さらに大型前方後円墳に近接して一定範囲に密集している事例もあることを考慮すると、古墳造営作業に直接関連するものと想定できる。また、現状の資料からは、掘立柱建物が顕著ではないことから、古市古墳群内においては、当該時期の大規模な集落は形成されなかったものと考えられる。さらに、当該地域の地形的特徴である段丘面は、粗砂や礫で構成される河川堆積物でできており、灌漑施設を設けない限り基本的には大規模な農耕が困難な場所と考えられる。食糧を保管する倉庫用の建物が認められないという想定が正しいとすれば、古市古墳群内に存在する竪穴式住居の住民は直接農耕作業に携わっておらず、食糧などの日常物資については他から供給されていた可能性が考えられる。

手工業生産域の様相についても概観しておく。古市古墳群内では、従来埴輪窯が知られており、土師の里⁽³⁾、誉田白鳥、野々上の各遺跡において検出されている。これら埴輪窯が伴う遺跡の中で、5世紀代の竪穴式住居が十数棟という比較的多く検出された土師の里遺跡では、約200m四方という一定範囲において、切り合い関係をもって検出され、密集して存在している様相が窺える。

鍛冶については、花田勝弘の研究によると、古市古墳群内では土師の里遺跡と古市遺跡、誉田白鳥遺跡において、鉄滓と鞴羽口の出土が報告されている（花田1989：pp. 72–73、2002：pp. 7）が、古墳時代の鍛冶関連の遺構や遺物については、顕著には検出されていない。また、古市遺跡についていえば、この遺跡内では近世においても鍛冶作業が大規模に行われており、この時期の鍛冶遺構やこれに伴う鉄滓や鞴羽口が多量に出土している。花田が示した古市遺跡での事例も、近隣箇所から近世の鞴羽口や鉄滓が多量に出土している。古市遺跡では、古墳時代の鍛冶関連遺構や遺物については、現段階では積極的に肯定はできない⁽⁴⁾。

4. 古市古墳群周辺の居住域との比較

上記において、古市古墳群内の居住域の特徴を述べてきた。ここでは、古市古墳群の周辺において、主として古墳時代中期の居住域である八尾南遺跡、長原遺跡、山之内遺跡という相互に隣接あるいは近隣に存在している居住域を中心に取り上げて、古市古墳群内の居住域の様相と比較してみたい。

八尾南遺跡は、微高地上において庄内式段階から古墳時代後期にわたる建物などが検出されている。竪穴式住居が1棟発見されているが、初期須恵器を伴う時期になると、建物数が増加して基本的には掘立柱建物で構成される。掘立柱建物の規模は、2間×2間のもので一辺約5m以下が多数を占めるようである。倉庫や井戸なども存在する。建物が存在する微高地に隣接して当該時期の水田面も検出されている。しかし、TK23～TK47型式段階あるいはその後に集落の規模は縮小されるようである。

長原遺跡での居住関連遺構は、主としては平地式住居と倉庫を含む掘立柱建物である。また、合わせて竪穴式住居も群在している。

掘立柱建物の多くが3間前後×2間で、その規模は5m前後×3～5mである。これらの中には、独立棟持柱を有するものもある。長原遺跡、八尾南遺跡、山之内遺跡の掘立柱建物の法量は表2・3

表2 掘立柱建物規模（長原遺跡・八尾南遺跡）

遺跡	地点	遺構	間×間	規模(m)		面積(m ²)	時期	備考
長原	83-32・53・70	SB13	4×2	5.65	5.1	28.82	TK216～TK208	総柱
		SB15	3?×2	4.65	3.42	15.90	TK216～TK208	
		SB16	2×2	3.9	3.2	12.48	TK216～TK208	
		SB17	3×2	4.45	3.7	16.47	TK216～TK208	
		SB21	1×1	2.7	2.7	7.29	TK216～TK208	
		SB22	3?×2	3.18	3.05	9.70	TK216～TK208	
		SB23	(3)				TK216～TK208	
		SB31	3×2	4.38	3.82	16.73	TK23	総柱
		SB32	3?×2	4.69	3.8	17.82	TK216～TK208	
		SB33	(2×1)	(3.00)	(1.40)	(4.20)	TK216～TK208	
	84-12・29・47・67・70	SB34	3×(1)				TK216～TK208	
		SB01	2×2	3.2～3.4	2.9～3.2	10.88	TK216～TK208	
		SB03	(2×1)	2.6	1.65	(4.29)		
		SB05	2×2	4.1	3.65	14.97		総柱
		SB06	(×1)		1.55			
		SB07	1×1	2.2	1.95	4.29	TK208	竪穴式住居？
八尾南	85-16①・16②	SB08	1×1	2.1	1.8	3.78	TK208	竪穴式住居？
		SB09	(2×)	3.1			TK208	
		SB13	(1)×2	1.8	3.2	(5.76)	ON46～TK208	
		SB14	4×3	7.2	5.25	37.80	ON46～TK208	内部棟持柱2本
		SB15	2×2	3.65	3.35	12.23	TK208～TK23	
		SB16	(1)×2	1.85	3.2	(5.92)	TK208～TK23	
		SB17	3×3	5.2	4.7	24.44	TK208～TK23	総柱？
		SB18	3×2	4.5	4.2	18.90	TK47	総柱
		SB19	3×2	4.9	3.1	15.19	TK47	
		SB20						
八尾南	八尾南1981	SB1		(4.3)			5C前半	
		SB2	2×2	3.6	2.7	9.72	5C前半	総柱
		SB3	3×3	3.5	4.9	17.15	5C前半	
		SB4	2×2	3.1	3.2	9.92	5C前半	
		SB5	1×1	2.1	1.9	3.99	5C前半	
		SB6	2×2	2.7	2.5	6.75	5C前半	総柱
		SB7	2×2	3.4	4.7	15.98	5C前半	
		SB8	2×2	3.5	3.5	12.25	5C前半	
		SB9	2×1	4.5	2.5	11.25	5C前半	
		SB10	2×2	3.9	4	15.60	5C前半	
		SB11	2×2	3.32	2.76	9.16	5C前半	
		SB12	1×1	2.9	3.1	8.99	5C前半	
		SB13	2×2	3.5	3.3	11.55	5C前半	総柱
		SB14	2×2	3.8	4.3	16.34	5C前半	
		SB15	2×(1)	4	(2)	(8.00)	5C前半	
		SB16	(2)×1	(2.4)	2.84	(6.81)	5C前半	
		SB17	2×3	3.6	4.4	15.84	5C前半	総柱
		SB18	1×2	4.7	4.2	19.74	5C前半	
		SB19	2×2	4.4	3.1	13.64	5C前半	総柱
		SB20	2×(1)	3.95	(2.4)	(9.48)	5C前半	

※カッコは現存規模

表3 掘立柱建物規模（山之内遺跡）

遺跡	調査地点	遺構	間×間	規模(m)		面積 (m ²)	時期	備考
山之内	81-5	SB02	3×3	4.4	4.1	18.04		
		SB06	3×2	5.8	3.6	20.88	TK47～MT15	製塩土器出土
		SB07	3×3	4.2	4.1	17.22		
		SB08	3×2	4.6	3.2	14.72		
		SB03	(1) × 2	(1.9)	3.9	(7.41)		総柱
		SB04	(2) × 3	(3.8)	5	(19.00)	TK23～MT15	
		SB05	(2) × 2	(3.6)	4.9	(17.64)		総柱
		SB09	3×3	4.4	4.4	19.36		総柱
		SB10	(3×2)	(4.5)	(4.2)	(18.90)		製塩土器出土
		SB03	5×2	7.55	3.15	23.78	TK10	
	83-18	SB04	3×2	4.4	3.75	16.50	MT15～TK10	
		SB15	5×3	9.82	5.08	49.89	6C前半～	鉱滓出土
		SB16	4×2	7.6	3.66	27.81	6C前半～	束柱？
		SB17	3×3	5.18	3.7	19.17	6C前半～	
		SB18	(2) × 2	(1.71)	3.78	(6.46)		
		SB19	(3) × 2	(4.2)	3.88	(16.30)	5C後半～	
		SB20	3×2	4.2	3.36	14.11	6C後半～	
		SB22	3×(1)	6.01	(3.45)	(20.73)	6C中葉～	梁行2間？
		SB23	3×1	4.03	2.13	8.58		
		SB24	4×3	3.97	3.67	14.57	6C中葉～	赤色顔料塗布の須恵器杯身出土
	86-42	SB25	3×1	5.16	2.04	10.53	6C前半～	製塩土器出土
		SB27	(3×2)	(4.32)	(2.91)	(12.57)		
		SB06	(2×2)	(3.66)	(3.23)	(11.82)	6C中～	総柱
		SB07	(3×2)	(4)	(3.4)	(13.60)	6C中～	
		SB08	(3×2)	(4.2)	(3.68)	(15.46)		総柱
		SB09	4×2?	6.23	2.96	18.44	6C前～	製塩土器出土
		SB11	3×3	5.03	4.01	20.11	6C後～	総柱
		SB12	4×3	6.02	4.77	28.72	6C末～	製塩土器出土
		SB13	3×2	4.08	3.62	14.77	6C中～	製塩土器出土
		SB14	3×2	4.32	3.94	17.02	6C前～	総柱、製塩土器出土
	88-36・37	SB15	3×2	4.4	3.82	16.80	6C中～	総柱、製塩土器出土
		SB203	4×3	6.1	4.5	27.45	6C前～中葉	
		SB204	3×2	4.5	3.3	14.85	6C前～中葉	
		SB206	3×2	5.3	4.2	22.26	6C前～中葉	
		SB208	3×2	6.5	3.7	24.05	TK10～	
		SB209	(6×4)	(6.2)	(4.3)	(26.66)	6C前～中葉	
		SB210	3×2	5.4	3.6	19.44	MT15～TK10	
		SB212	3×2	3.6	3	10.80	TK47～MT15	
		SB215	5×5	8.6	7.4	63.64	6C～	
		SB217	2×2	3.2	3.2	10.24	5C代	総柱
		SB218	2×2	3.8	4	15.2	5C代	総柱
		SB220	2×2	5.1	3.3	16.83	TK47	総柱
		SB221	4×(2)	7.1	(1.7)	(12.07)	TK23	
		SB223	3×2	4.5	3.2	14.40	6C後半	
		SB227	2×2	4	3.7	14.80	6C後半～	
		SB237	4×3	7.2	5.2	37.44	TK23?	
		SB238	3×3	4.5	4	18.00	TK23	
		SB239	2×1	3.5	3.5	12.25	6C前～中葉	
		SB241	(3) × 2	(4.5)	4	(18.00)	6C前～中葉	

※カッコは現存規模

のとおりである。堅穴式住居は一辺4～5m程度のものが主で、稀に約7mを測る大型のものも存在する。堅穴式住居については、長原遺跡では基本的にはTK23型式段階以降は見られないようである（京嶋1993：p.252）。また、一部の堅穴式住居や掘立柱建物は溝で区画されているものもあり、掘立柱建物には小規模な柵列を伴う場合もある。

長原遺跡や山之内遺跡において、掘立柱建物と堅穴式住居との平面積を比較してみると、一部の掘立柱建物に大規模なものも存在するが、むしろ堅穴式住居の方が大きい様子を示す。長原遺跡と山之内遺跡の堅穴式住居の平面積は、20～40m²という規模である。この規模は、古市古墳群内で検出されている当該時期の堅穴式住居の規模と比べ、大型の傾向を示す（図2）。

長原遺跡、八尾南遺跡や山之内遺跡に見られる居住域の特徴は、古市古墳群内の堅穴式住居あるいは居住域の景観と比較して、全く異なる構成を取っていたものと考えられる。すなわち、長原遺跡、八尾南遺跡、山之内遺跡の各遺跡に見られた集落内容は、倉庫を含む掘立柱建物や大型の堅穴式住居が中心となる構成を取り、古墳時代中期における有力な大規模集落として評価できるであろう。

これらの居住域は、古市古墳群の盟主墳である誉田御廟山古墳が築造される時期と考えられるTK73型式段階において、新規に出現してその規模を拡大していったと想定される。これらの集落では、多量の韓式系土器の出土事例などから渡来系集団の関与が想定され、さらに牧や鍛冶工房等の存在などを重視すると、古市古墳群の造営に関して、物資流通の結節地点、あるいは渡来系諸集団といった人的交流の拠点として、計画的に設置された可能性が推量される。

5. 大和盆地内の居住域の様相

翻って、古墳時代中期に入って大和盆地の集落はどのようなものであったのであろうか。大和盆地東南部には、古墳時代前期前半を中心とした纏向遺跡や柳本遺跡群等が形成されるが、纏向遺跡が古墳時代中期にまでも継続していたかどうか明瞭ではない。ここからは古墳時代中期の須恵器がわずかではあるが出土している。しかし、検出されている遺構や遺物の数量から、古墳時代前期前半に見られたような集落景観は復元できないものと思われる。従来、古墳時代中期の集落として知られているものは、大和盆地北東部の布留遺跡、西部の葛城南郷遺跡群、盆地中央付近の曾我遺跡があり、鍛冶、鉄器製作や玉生産等といった手工業生産に関する特徴を持っている遺跡として知られている。

今回は、天理市所在の中町西遺跡、乙木・佐保庄遺跡、磯城郡三宅町の伴堂東遺跡、奈良市茗荷遺跡を取り上げことにする。中町西遺跡や伴堂東遺跡は盆地中央、乙木・佐保庄遺跡は盆地東南部の大和古墳群の北側に隣接し、茗荷遺跡は盆地東北の山間部に位置する。

中町西遺跡は、古墳時代中期には井戸11基、土坑16基、「方形堅穴建物」1棟のほか溝や自然流路等が検出されている。陶質土器あるいは初期須恵器、韓式系土器、土師器が出土している。須恵器は、TK216～TK208型式である。古墳時代前期の遺物はほとんど出土しない。

乙木・佐保庄遺跡は、大和古墳群に関連して、古墳時代前期前半から遺物が認められる。威儀具等の木製品が多く出土している。しかし、古墳時代前期後半には断絶する。この後一旦空白期間をおいて、TK208型式の時期に至って遺構が確認されている。

伴堂東遺跡は、前期後葉に遺構が減少し、須恵器出現期になると、韓式系土器や初期須恵器等を伴う土坑が多数検出され、一旦集落が断絶した可能性がある（坂2003a・2003b）⁽⁵⁾。また、一辺が約10～20m程度の「方形周溝墓」が4基検出されている。

茗荷遺跡では、地形がやや高い東半の箇所で堅穴式住居が、そして低い西半の箇所に掘立柱建物が

検出されている。5世紀第3四半期から6世紀前半までの限定された期間に存続していたらしい。堅穴式住居は46棟以上存在していたようである。建替えや削平などを考慮すると、20棟前後が同時併存したものと考えられる。堅穴式住居の規模については、一辺6～7mという大型のものが数棟見られるが、他は一辺4～5m前後である。いくつかの堅穴式住居の覆土から、滑石製勾玉や臼玉が数点見つかっている。掘立柱建物は4棟確認されているが、うち3棟は総柱建物である。掘立柱建物の規模は、総柱のものは2間×2間(3.7×2.8m)、2間×2間(2.7×2.5m)、3間×2間(3.5×2.8m)で、その他のものは1間×3間(1.6×3.0m)となる。茗荷遺跡では、古墳時代中期から時期はやや下るが、5世紀後葉から6世紀前葉という非常に限られた時間幅の中で、集落が形成されている。山間部での短期間の集落は、自然発生的と考えるより、意図的に出現したものと想定できる。

大和盆地内の乙木・佐保庄、伴堂東の各遺跡は、古墳時代中期初頭に一定期間の断絶がある。中町西遺跡は古墳時代中期前半に盛行し、茗荷遺跡も古墳時代中期後半という限られた時間で集落が形成される。以上の様相から、古市古墳群において大型前方後円墳の築造が盛行している時期においては、纏向遺跡の集落としての機能が衰退し、さらに大和盆地のいくつかの居住域では、一旦断絶することや一定時期に限定した形での出現といった変動があり、集落様相として不安定な状況が認められることは注意しておきたい。

6. 結語—古市古墳群の造営主体の検討—

以上、古市古墳群内外における居住域を検討してきた。その結果、古市古墳群内においては、小規模な堅穴式住居が検出されてはいるが、特に津堂城山古墳、仲津山古墳や誉田御廟山古墳といった古市古墳群形成前半期の時期には、現在判明している資料を見る限り掘立柱建物はほとんど伴わない。また、堅穴式住居が密集して存在していた様子も土師の里遺跡といった一部の居住域を除いては見られなかった。

このことから、古市古墳群内には、墳丘長200mを超える大型前方後円墳築造の最盛期には、大規模な集落が形成されていた様相は積極的には窺えない。ただ、古市古墳群内で検出されている堅穴式住居については、大型前方後円墳等との位置関係や時期を考慮し、また住居規模から推し量ると、古墳造営に直接従事した集団の居住に供するものと考えられる。もっとも、古市古墳群の大型前方後円墳の規模や基數のことを考えると、今後これを上回る数の居住痕跡が検出されることは当然想定されるところである。しかしながら、後世の開発や改変行為によってこれら居住・生産域の痕跡が破壊された可能性ももちろん考慮する必要はあるが、古市古墳群内の発掘調査における遺物包含層からの当該時期の出土遺物の数量を考えると、やはり貧弱な様子は拭えない。

他方、古市古墳群北方に展開する長原遺跡、八尾南遺跡や山之内遺跡では、掘立柱建物を中心に堅穴式住居も伴う集落として、古市古墳群に大型前方後円墳が築造される時期に合わせて出現し拡大していく。旧大和川流域の本郷遺跡でも古市古墳群形成時期であるTK208～TK10型式段階の堅穴式住居が検出されている。また、久宝寺遺跡からは、明確な住居址などは確認されていないが、相当量の出土遺物から、古墳時代中期においても大型の集落が存在していたものと考えられる。

古市古墳群内において大規模な集落が存在しないとなれば、河内平野での居住域のいくつかが、古市古墳群内の大型前方後円墳の造営に直接携わっていたことが考えられる。特に、古市古墳群の北西方向に存在する長原遺跡はTK10型式段階には集落の規模は縮小し、また長原古墳群の造営も衰退に向かう⁽⁶⁾。これは、古市古墳群造営における大型前方後円墳の終焉とほぼ軌を一にする事象であ

る。

さらに、周辺に目を転じれば、古市古墳群の西方の泉北丘陵には須恵器生産の一大拠点であった陶邑古窯址群が存在し、加えて旧大和川と石川の合流地点の北東箇所にも大規模な鉄器生産の場所と考えられる大県遺跡が見られる。旧大和川流域には、堅穴式住居や掘立柱建物で構成される居住域やそれを支える生産域、あるいはその周辺に製陶や鍛冶など手工業生産域が存在して、これらの南方に相当する段丘地形上に古市古墳群という大型前方後円墳の造墓領域が配置されたことが想起される。古市古墳群造営に関わる人的資源、物資流通やその運営を支えたのは、長原遺跡をはじめこういった旧大和川周辺の河内平野の諸集落であった可能性が強く想定されるのである。

一方、大和盆地では古墳時代中期に及んで、集落が断絶したり、反対に新規に盛行したり、あるいは限定された時期に出現する現象が認められ、安定した居住域の推移が見られなかった。これについては、今回対象とした事例が僅かなので速断は控えなければいけないが、古市古墳群形成の前後の時期にこのような居住域の不安定な変動が見られることは、古墳時代前期前半に大和盆地東南部においてイニシアティブを掌握していた集団が、古墳時代中期以降にまで一貫してその勢力を持續させていたか否か、さらなる再検討を要するのではないだろうか。

註

- (1) 地形分類やその呼称については、原秀禎（原1992）及び宮地良典・田結庄良昭・吉川敏之・寒川旭（宮地他1998）の研究成果を援用する。
- (2) 古市古墳群の初現である津堂城山古墳から南方約5kmの離れたところに、庄内式期の集落である尺度遺跡が検出されている。尺度遺跡の集落は、羽曳野丘陵東縁の開析谷によって形成された氾濫原上に位置する。これは、古市古墳群が展開する段丘面とは異なる地形に立地している。
- (3) 土師の里埴輪窯跡群について、従来周知されていた窯跡群より南方で新規に埴輪窯2基が検出されている。
- (4) 百舌鳥古墳群においては、鉄器生産に関わる鍛冶炉跡、鉄滓、鞴羽口や砥石が、陵南北遺跡において、また鉄滓や鞴羽口が土師遺跡、東上野芝遺跡で検出されている（花田1989・2002、樋口1997、鹿野1999）。このことから、古市古墳群の領域内においても、古墳群造営に伴う鍛冶に従事した集落が今後発見される可能性は高い。しかし、古市古墳群の北西4kmの箇所にある大県遺跡の鍛冶専用工房が古市古墳群造営に関与して稼動していた可能性を考えたい。
- (5) 調査担当者は、近隣にある島の山古墳の造営に伴い、集落が移動したと考えている。しかし、この時期の直後は、大型前方後円墳の築造が大和盆地から河内平野に移動する時期でもある。この点を重視し、集落においても断絶が見られるものと考えたい。
- (6) 高橋工氏教示による。

引用・参考文献

- 天野末喜1990「6近畿 1中部（大阪・奈良・京都南部）A大阪」『古墳時代の研究』第10巻 地域の古墳 I 西日本 雄山閣出版株式会社
- 天野末喜2008「第2章都市化以前の古市・百舌鳥古墳群及び周辺の古墳群（1）古市古墳群」『近畿地方における大型古墳群の基礎的研究』平成17年度～19年度科学研究費補助金（基礎研究（A））研究成果報告書
- 鹿野吉則1999「巨大古墳造営集団の動向－土師遺跡の検討から－」『同志社大学考古学シリーズVII 考古学に学ぶ－遺構と遺物－』同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 京嶋 覚1993「5・6世紀の集落構成の復元とその特質」『大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告VI』財団法人大阪市文化財協会
- 近藤義郎1983『前方後円墳の時代』岩波書店

- 酒井龍一1977「古墳造営労働力の出現と煮沸用甕—造営キャンプの検証にむけて」『考古学研究』第24巻第2号 考古学研究会
- 杉本厚典2003「八尾南・長原・城山遺跡における集落構成の変化—弥生時代から古墳時代にかけての地域社会の一様相—」『大阪歴史博物館研究紀要』第2号 財団法人大阪市文化財協会
- 積山 洋1994「上町台地の北と南—難波地域における古墳時代の集落変遷—」『大阪市文化財論集』財団法人大阪市文化財協会
- 高橋 工1999「長原遺跡および北部周辺地域における古墳時代中期～飛鳥時代の地形の変化と集落の動態」『大阪市平野区長原遺跡東部地区発掘調査報告II』財団法人大阪市文化財協会
- 田中清美1989「5世紀における摂津・河内の開発と渡来人」『ヒストリア』第125号 大阪歴史学会
- 田中清美2005「河内湖周辺の韓式系土器と渡来人」『ヤマト王権と渡来人』サンライズ出版株式会社
- 都出比呂志1988「古墳時代首長系譜の継続と断絶」『待兼山論叢』史学篇 第22号 大阪大学文学会
- 都出比呂志1989「古墳時代集落と階層分解」『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 都出比呂志1991「日本古代の国家形成論序説—前方後円墳体制の提唱—」『日本史研究』第34巻第3号
- 都出比呂志1993「古墳時代の豪族居館」『岩波講座日本通史 第2巻古代1』岩波書店
- 都出比呂志1996「国家形成の諸段階—首長制・初期国家・成熟国家—」『歴史評論』551
- 都出比呂志1998『古代国家の胎動』日本放送協会
- 都出比呂志2000『王陵の考古学』岩波書店
- 都出比呂志2005「第2部 都市論について 第5章 都市の形成と戦争」『前方後円墳と社会』株式会社塙書房
- 花田勝広1989「倭政権と鍛冶工房—畿内の鍛冶専業集落を中心に—」『考古学研究』第36巻第3号 考古学研究会
- 花田勝広2002「畿内とその周辺の鍛冶工房」『古代の鉄生産と渡来人—倭政権の形成と生産組織—』雄山閣出版株式会社
- 原 秀禎1992「古墳立地研究の視点」『大阪商業大学商業史研究所紀要』第2号
- 坂 靖2003a「倭屯倉の成立過程をめぐる—試論—伴堂東遺跡とミヤケー」『樞原考古学研究所論集 第14』八木書店
- 坂 靖2003b「外来系土器と移住者—初期ヤマト政権と伴堂東遺跡—」石野博信編『初期古墳と大和の考古学』学生社
- 坂 靖2009『古墳時代の遺跡学—ヤマト王権の支配構造と埴輪文化—』株式会社雄山閣
- 樋口吉文1997「百舌鳥古墳群領域の集落遺跡の動向について」『藤井克己氏追悼論文集』藤井克己氏追悼論文集刊行会
- 菱田哲郎2004「手工業生産と古市古墳群の終焉」『古市古墳群の終焉を考える』藤井寺市教育委員会
- 菱田哲郎2007「第2章 内部領域の形成と中心一周縁関係—五・六世紀の生産と社会」『古代日本国家形成の考古学』京都大学学術出版会
- 広瀬和雄1983「河内古市大溝の年代とその意義—古代における開発の一形態—」『考古学研究』第29巻第4号 考古学研究会
- 広瀬和雄1994「考古学から見た古代の村落」『岩波講座 日本通史』第3巻古代2 岩波書店
- 福永伸哉1998「対半島交渉から見た古墳時代倭政権の性格」『青丘学術論集』第12集 韓国文化研究振興財団
- 福永伸哉2005「第5章 筒形銅器・巴形銅器出土古墳の性格」『三角縁神獣鏡の研究』大阪大学出版会
- 松木武彦1998「中国地方の中期古墳とその社会（報告要旨）」『第44回埋蔵文化財研究集会 中期古墳の展開と変革—5世紀における政治的・社会的变化の具体相（1）—』埋蔵文化財研究集会
- 宮地良典・田結庄良昭・吉川敏之・寒川旭1998『地域地質研究報告 大阪東南部地域の地質』通商産業省工業技術院 地質研究所
- 山田隆一1994「古墳時代初頭前後の中河内地域—旧大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて—」『弥生文化博物館研究報告』第3集 大阪府立弥生文化博物館
- 山田隆一2001「大阪府南部、石川流域における弥生時代後期から古墳時代初頭社会の特質」『弥生時代の集落』

学生社

遺跡文献（以下の他は、「羽曳野市域関連資料報告書」及び「藤井寺市域居住域関連報告書」参照）

乙木・佐保庄遺跡

鈴木裕明ほか2005『乙木・佐保庄遺跡』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第92冊 奈良県立橿原考古学研究所

尺度遺跡

三宮昌弘・河端智1999『尺度遺跡』I 財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書第44集 財団法人大阪府文化財調査研究センター

伴堂東遺跡

坂靖2002『伴堂東遺跡－京奈和自動車道「大和区間」建設に伴う遺跡調査報告書IV－』奈良県立橿原考古学研究所調査報告第80冊 奈良県立橿原考古学研究所

長原遺跡

京島覚ほか1992『大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告』III 財団法人大阪市文化財協会
京島覚ほか1992『大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告』IV 財団法人大阪市文化財協会

櫻井久之ほか1993『大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告』V 財団法人大阪市文化財協会

大庭重信ほか1994『大阪市平野区長原・瓜破遺跡発掘調査報告』VII 財団法人大阪市文化財協会

高橋工ほか1999『大阪市平野区長原遺跡東部地区発掘調査報告』II 財団法人大阪市文化財協会

大庭重信ほか2005『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告』XII 財団法人大阪市文化財協会

中町西遺跡

伊藤雅和・本村光保2003『中町西遺跡－京奈和自動車道「大和区間」建設に伴う遺跡調査報告書（V）－』
奈良県立橿原考古学研究所調査報告第85冊 奈良県立橿原考古学研究所

土師の里遺跡

三木 弘1999『土師の里遺跡－土師氏の墓域と集落の調査－』大阪府埋蔵文化財調査報告1998-2 大阪府教育委員会

船橋遺跡

田辺昭三・原口正三・田中琢・佐原真1962『船橋』II 平安学園考古学クラブ

本郷遺跡

北野 重1993『本郷遺跡1991・1992年度 柏原市文化財概報1992-III』柏原市教育委員会

北野 重1999『本郷遺跡－公共下水道管理設に伴う－ 柏原市文化財概報1998-IV』柏原市教育委員会

茗荷遺跡

今尾文昭・山田隆文2000「奈良市茗荷町・矢田原町 茗荷遺跡－ 県営圃場整備事業田原西地区に伴う平成11年度発掘調査概報－」『奈良県遺跡発掘調査概報（第一分冊）1999年度』奈良県立橿原考古学研究所

八尾南遺跡

米田敏幸1981『八尾南遺跡－大阪市高速電気軌道2号線建設に伴なう発掘調査報告書－』八尾南遺跡調査会

山之内遺跡

清水和明ほか1998『大阪市住吉区山之内遺跡発掘調査報告』財団法人大阪市文化財協会

清水和明ほか1999『大阪市住吉区山之内遺跡発掘調査報告』II付篇遠里小野遺跡 財団法人大阪市文化財協会

表4 吉市古墳群内における居住域関連資料—羽曳野市域—(1)

遺跡名	調査区	遺構	遺物	時期	備考	報告書
伊賀遺跡	88-1	竪穴式住居	須恵器(直口壺)・土師器(甕・壺・高杯)・製塩土器	TK47	4.6×4.6m 作り付けカマド	古市X
	88-2	SB20	土師器高杯(カマドの支脚)	5世紀後半	3.55×(3.0+α)m 作り付けカマド	市内H1
	98-1		須恵器(高杯)	TK208～TK23		古市X X I
			須恵器(杯身)	TK47		市内H14
伊賀南遺跡	94-1		須恵器(蓋杯・高杯)	TK216		古市X VI
古市遺跡		竪穴式住居2棟	須恵器・有孔円板	TK47	うち1棟3.8×3.8m	古市遺跡
	86-4	竪穴式住居	須恵器(蓋杯・高杯)・土師器(甕)	TK209	3.5×3.5m 溝からTK47～TK10の須 恵器(蓋杯)出土	古市VII
	92-12		土師器甕・韓式系土器(軟質格子タタキ)			古市X V
	94-5		製塩土器	丸底I式		古市X VII
	97-6		須恵器(杯身)・土師器(高杯)	TK10・MT85		古市X IX
	99-5		須恵器(杯身)	TK10～		古市X X II
	02-4・5		須恵器(蓋杯)	TK23～TK47		古市X XIV
		竪穴式住居	須恵器(蓋杯)・土師器(高杯・甕)	TK23	5.3×4.8m 包含層からも初期須恵 器や土師器も出土	市内H1
			円筒埴輪・鞠形埴輪・須恵器(蓋杯)	TK208～TK23		市内H2
			土師器(高杯)・須恵器(杯身)	TK47		市内H3
		土坑 包含層	須恵器(杯身・高杯脚部) 円筒埴輪 須恵器(蓋)	MT15・TK43 川西V期	集落 古墳痕跡? 集落	市内H4
	12		土器		石川氾濫原で二次的堆 積か?	市内H7
	37		須恵器・埴輪			
			土師器(高杯・甕)・須恵器	TK47		市内H10
	03-01	落ち込み・小穴	弥生土器(高杯・甕・手焙形・鉢・壺) 土師器(高杯)・須恵器(蓋・杯)	弥生時代後期後半～庄 内式 杯蓋TK23・杯身TK10	古墳時代前期の土器も 含まれる	古市X V
	03-14	包含層	須恵器	6世紀代		古市X XVI
	04-03	溝	須恵器・円筒埴輪	6世紀前半～中頃		
	04-07	包含層	須恵器(蓋杯・高杯・甕)	6世紀中頃		
	05-02	土坑	須恵器(蓋杯・甕・高杯) 土師器(高杯・甕) 製塩土器	TK47～TK10 布留式新段階		古市X XVII
	05-16	包含層	埴輪・須恵器・土師器・韓式系土器			
	05-17	包含層	埴輪・須恵器・土師器・韓式系土器			
	06-04	土坑 包含層	土師器(甕・高杯・小型壺) 須恵器(蓋杯・甕) 朝顔形埴輪	布留式新段階 TK23～TK47		古市X XIX
		包含層	土師器(小型壺・甕)・須恵器(蓋杯)・朝 顔形埴輪	TK43～TK209		市内H17
		土坑・包含層	棒状土錐			市内H18
西琳寺跡 (古市遺跡)			須恵器(杯身)	TK208		古市I
			須恵器(杯身)・埴輪	TK216～TK208・TK10・ MT85		古市II
	93-1		須恵器(器台)・土師器(甕・高杯)	TK73		古市X V
	94-2		須恵器(大型壺)・土師器(甕)	TK208		古市X VI
	97-1		須恵器(杯身・高杯・甕・提瓶)	TK208・TK10・MT85・ TK43～TK209		古市X X
	02-02		埴輪			古市X XV
	03-01	土器集中区 溝21 溝23	土師器(布留式土器) 円筒埴輪 須恵器	布留式新段階 川西V期 MT85～TK43		古市X XVI
	04-15	竪穴9 包含層	土師器(甕) 須恵器(蓋杯)	布留式新段階 TK47・TK10	竪穴9は方形建物	古市X XVII
	05-03	溝	土師器(小型壺)	布留式新段階		古市X XVIII
		包含層	土師器(小型器台・甕・甕)・ 須恵器(蓋杯・高杯・甕・甕)・ 韓式系土器・円筒埴輪	TK73・TK216・TK23・ TK47 TK10・MT85・TK43 川西IV期		市内H12
誉田白鳥遺跡		埴輪製作跡に關 わる可能性	円筒埴輪	川西V期	白鳥1号墳	古市II
		埴輪製作跡に關 わる可能性	円筒埴輪・形象埴輪			古市III
	89-7		須恵器(蓋杯)・土師器(高杯・甕)	TK10・TK209		古市X I
	99-11	埴輪製作跡に關 わる可能性	須恵器・土師器・円筒埴輪・形象埴輪・陶 棺	TK208～TK23・TK10		古市X X I
	00-16	埴輪製作跡に關 わる可能性	須恵器・土師器・埴輪	TK23・TK47		古市X XIII
	02-5	埴輪片集中箇所	円筒埴輪・朝顔形埴輪・盾形または鞠形埴 輪・須恵器片(若干)			古市X XIV
			鞠形埴輪・須恵器杯身	TK47		市内H6
誉田白鳥遺跡		埴輪窯灰原	円筒埴輪・須恵器(蓋杯・高杯)・木製鋤・ 鋤・盾形・蓋形・人物形埴輪	TK208～TK23・TK10		大ガス
	03-01	包含層	土師器(甕)・円筒埴輪破片	布留式新段階・川西IV 期		古市X XV

表5 古市古墳群内における居住域関連資料—羽曳野市域—（2）

遺跡名	調査区	遺構	遺物	時期	備考	報告書
誉田白鳥遺跡	05-01	包含層	須恵器（蓋杯）			古市X X VII
	06-01	溝1	土師器（甕） 須恵器（蓋杯） 円筒埴輪	TK10～TK43		古市X X VIII
	08-09		円筒埴輪			古市 XXX I
	08-10		円筒埴輪・朝顔形埴輪	川西V期		
		包含層・溝	須恵器			市内H13
	04-01	溝	円筒埴輪・須恵器（蓋杯）・土師器（杯・小型甕・マリ・瓶）	川西III期～IV期・ TK10・TK85		市内H16
	04-02	溝・落ち込み	土師器（布留式甕・瓶）・須恵器（杯身・高杯・甕）・円筒埴輪・家形埴輪	布留式新段階・川西V期・ TK43		
		土坑・包含層	円筒埴輪・土師器（甕・高杯）・須恵器（蓋杯・器台）	川西IV期～V期・TK43		市内H18
島泉北遺跡	93-1	井戸	須恵器（杯蓋・高杯・甕・壺）・土師器（甕・高杯）	TK47～		古市X V
	94-1		須恵器（杯身）	MT15～TK10		古市X VI
	94-3		須恵器（蓋杯・提瓶・甕・壺）	MT15～TK10		
	95-4		須恵器（甕）・土師器（高杯）			古市X VII
	00-02		須恵器・土師器	古墳時代中期		古市X X II
	02-2		須恵器（杯身・高杯・甕）	TK208・TK23		古市X X IV
		溝	須恵器（蓋杯）・土師器・埴輪	TK23～TK47	古墳痕跡？	市内H4
	41		布留式土器（甕）			市内H 7
		溝	円筒埴輪・初期須恵器（高杯）・須恵器（蓋杯・高杯）・土師器（甕・瓶）	TK23		市内H10
			初期須恵器（器台・甕・高杯・杯身）	TK73～TK216		市内H11
	07-01	遺物集中区	須恵器（蓋杯・高杯・甕・把手付椀・甕・器台・壺）・土師器（甕・小型甕・椀・瓶）・製塙土器・滑石製白玉・滑石製子持勾玉・砥石	TK23～TK47		古市X X IX
	07-02	溝1	須恵器（蓋杯・甕・高杯） 円筒埴輪	TK47・川西V期		
		包含層				
		溝	須恵器（蓋杯）	TK23		市内H15
島泉南遺跡	04-02	土坑	須恵器	6世紀代		古市X X VI
			須恵器（蓋杯）・韓式系土器（把手）			市内H15
島泉東遺跡		包含層・溝	須恵器（蓋杯・杯身） 円筒埴輪	TK23・MT85 川西III期		市内H14
高鷲北宮遺跡		井戸	土師器（布留式…小型壺・直口壺・甕・複合口縁壺・高杯）	布留III式～布留IV式		市内H14
恵我之荘遺跡			須恵器（杯身）	TK216～TK208		古市X
			須恵器（蓋杯・甕）・土師器（高杯・甕・瓶）	TK216～TK208・TK23・ TK10～MT85		市内H3
			円筒埴輪・石見型盾形埴輪・須恵器（蓋杯・甕・甕）・土師器	川西V期・TK216～ TK23・TK43	古墳痕跡？・集落	市内H9
		土坑	初期須恵器・韓式系土器・須恵器・土師器	TK73・TK10～MT85		市内H10
栄町遺跡		古墳痕跡？	円筒埴輪・朝顔形埴輪・盾形埴輪・鶏形埴輪・須恵器（甕・壺）	TK208	礫集中箇所	市内H6
	I 区	古墳周溝？	土師器（高杯）・円筒埴輪・鳍付円筒埴輪・須恵器		布留式	市内H 7
		溝	円筒埴輪・須恵器	TK43～TK209・川西V期	古墳痕跡？	市内H9
	05-02	埴輪円筒棺・包含層	円筒埴輪・朝顔形埴輪			古市X X VII
軽里遺跡			円筒埴輪・土師器（高杯）・須恵器（杯身）			市内H2
			土師器（高杯・甕・鉢）・須恵器（杯身）	TK10		市内H9
河原城遺跡	23		古墳時代の土師器（高杯）			市内H 7
	I 区	溝・柵列	須恵器（蓋杯・器台・高杯・甕）・土師器（甕）	TK23～TK10		
	II 区		須恵器（蓋杯・器台・高杯・甕）	TK10		
	I 区		初期須恵器（無蓋高杯）			市内H8
	II 区		須恵器（蓋杯・高杯・器台）	TK10		
高鷲遺跡		周溝を伴う掘立柱建物	布留式土器（甕・小型丸底壺・高杯）・須恵器（杯身・高杯・器台）・埴輪	TK216・TK47		市内H 7
			須恵器（甕）			古市X
		SK01	須恵器（蓋杯・高杯・壺・甕） 須恵器（蓋杯・高杯・器台・甕）	MT15 TK216・TK23・TK47・ MT15		
		SD01	須恵器（蓋杯・高杯・甕・長頸壺・器台・提瓶・横瓶）・土師器（高杯・甕）	TK208・TK23・TK47・ MT15・TK10・TK43"		市内H12
高鷲中之島遺跡	SI01				一辺4.4m	高鷲中之島
	SX01	円筒埴輪		川西V期	古墳痕跡「ヒガイノ古墳」葺石なし	
野々上遺跡			須恵器（蓋杯・高杯・甕）・埴輪			野々上 I
野々上埴輪窯跡		埴輪窯	円筒埴輪・形象埴輪			古市III
桜山遺跡		古墳	陶質土器・初期須恵器（高杯・杯身・器台・甕・樽形甕）・土師器（高杯・甕）	TK73～TK216	帆立貝式古墳（丁田古墳）	桜山概報
	03-02	包含層	須恵器	古墳時代後期		古市X X VI
城山遺跡			初期須恵器（高杯）・韓式系土器（甕・甕）・円筒埴輪	TK73・川西V期		城山府概報

表6 古市古墳群内における居住域関連資料—羽曳野市域—(3)

遺跡名	調査区	遺構	遺物	時期	備考	報告書
高屋遺跡			初期須恵器(器台)・須恵器(杯蓋)・韓式系土器	TK208		古市III
	95-7		韓式系土器(甕)			古市VI
	95-8		須恵器(蓋杯)・陶質土器(甕)・韓式系土器(軟質格子付)	TK47		古市VII
	09-01		弥生土器・庄内式土器	畿内第V様式	畿内第V様式を持つ甕破片が出土、庄内式期の可能性	古市XXXI
茶山遺跡		埴輪棺	円筒埴輪・形象埴輪・須恵器(杯身)	TK216～TK208	埴輪製作・古墳造営	古市IV
		埴輪棺・古墳	円筒埴輪・形象埴輪・須恵器(器台)	TK208～TK23	埴輪製作・古墳造営	古市V
	02-08	土坑・小穴	須恵器			古市XXV
	07-01	菅田御廟山古墳 外堤構、二ツ塚 古墳周濠	円筒埴輪・朝顔形埴輪・盾形埴輪・家形埴輪			古市XXIX・ 古市XXX
菅田御廟山古墳	93-1	外濠	土師器(高杯・甕)	布留式		古市XVI
上堂遺跡	00-13		須恵器(杯身)	TK23・TK47		古XXIII
東阪田遺跡		包含層	円筒埴輪・須恵器			市内H14
喜志遺跡	93-4	竪穴式住居	土師器(甕・小型器台)		(5.2+α) × (3+α) m	古市XV
	99-4		土師器(高杯)			古市XXII
	03-04	溝	埴輪	川西V期		古市XXVI
大黒遺跡	93-3		須恵器(杯身)	TK208		古市XV
	99-1		須恵器(杯身・甕)	TK43～TK209		古市XI
	00-02		須恵器(蓋杯)・韓式系土器(軟質繩席紋)・埴輪	TK43～		古市XXIII
西浦遺跡		溝	布留式土器(甕・小型丸底壺・高杯)・高杯			西浦銅鐸出土箇所
はざみ山遺跡	07-05	溝	円筒埴輪	川西V期	岡ミサンザイ古墳所用の埴輪に類似	古市XX
藏之内堂山遺跡		包含層・土坑	土師器・須恵器小破片			市内H15
範囲外	樅山地区	包含層・柱穴	土師器			市内H14
	はびきの2丁目		円筒埴輪	川西V期		市内H15

羽曳野市域居住関連資料報告書

一覧表記載	編集機関	発行年	報告書名	一覧表記載	編集機関	発行年	報告書名
古市 I	羽曳野市教育委員会編	1980	『古市遺跡群発掘調査報告書』	市内H1	羽曳野市教育委員会編	1990	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成元年度－』
古市 II	羽曳野市教育委員会編	1981	『古市遺跡群』II	市内H2	羽曳野市教育委員会編	1991	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成2年度－』
古市 III	羽曳野市教育委員会編	1982	『古市遺跡群』III	市内H3	羽曳野市教育委員会編	1992	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成3年度－』
古市 IV	羽曳野市教育委員会編	1983	『古市遺跡群』IV	市内H4	羽曳野市教育委員会編	2001	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成4年度－』
古市 V	羽曳野市教育委員会編	1984	『古市遺跡群』V	市内H5	羽曳野市教育委員会編	2002	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成5年度－』
古市 VI	羽曳野市教育委員会編	1985	『古市遺跡群』VI	市内H6	羽曳野市教育委員会編	2002	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成6年度－』
古市 VII	羽曳野市教育委員会編	1986	『古市遺跡群』VII	市内H7	羽曳野市教育委員会編	1999	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成7年度－』
古市 VIII	羽曳野市教育委員会編	1987	『古市遺跡群』VIII	市内H8	羽曳野市教育委員会編	2000	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成8年度－』
古市 IX	羽曳野市教育委員会編	1988	『古市遺跡群』IX	市内H9	羽曳野市教育委員会編	2001	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成9年度－』
古市 X	羽曳野市教育委員会編	1989	『古市遺跡群』X	市内H10	羽曳野市教育委員会編	2001	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成10年度－』
古市 XI	羽曳野市教育委員会編	1990	『古市遺跡群』XI	市内H11	羽曳野市教育委員会編	2002	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成11年度－』
古市 XII	羽曳野市教育委員会編	1991	『古市遺跡群』XII	市内H12	羽曳野市教育委員会編	2003	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成12年度－』
古市 XIII	羽曳野市教育委員会編	1992	『古市遺跡群』XIII	市内H13	羽曳野市教育委員会編	2004	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成13年度－』
古市 XIV	羽曳野市教育委員会編	1993	『古市遺跡群』XIV	市内H14	羽曳野市教育委員会編	2005	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成14年度－』
古市 XV	羽曳野市教育委員会編	1994	『古市遺跡群』XV	市内H15	羽曳野市教育委員会編	2006	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成15年度－』
古市 XVI	羽曳野市教育委員会編	1995	『古市遺跡群』XVI	市内H16	羽曳野市教育委員会編	2007	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成16年度－』
古市 XVII	羽曳野市教育委員会編	1996	『古市遺跡群』XVII	市内H17	羽曳野市教育委員会編	2008	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成17年度－』
古市 XVIII	羽曳野市教育委員会編	1997	『古市遺跡群』XVIII	市内H18	羽曳野市教育委員会編	2009	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成18年度－』
古市 XIX	羽曳野市教育委員会編	1998	『古市遺跡群』XIX	市内H19	羽曳野市教育委員会編	2010	『羽曳野市内遺跡調査報告書－平成19年度－』
古市 XX	羽曳野市教育委員会編	1999	『古市遺跡群』XX	西浦銅鐸	羽曳野市教育委員会編	1979	『西浦銅鐸』
古市 XXI	羽曳野市教育委員会編	2000	『古市遺跡群』XX	古市遺跡	羽曳野市教育委員会編	1980	『古市遺跡発掘調査報告』
古市 XXII	羽曳野市教育委員会編	2001	『古市遺跡群』XXI				
古市 XXIII	羽曳野市教育委員会編	2002	『古市遺跡群』XXIII				
古市 XXIV	羽曳野市教育委員会編	2003	『古市遺跡群』XXIV				
古市 XXV	羽曳野市教育委員会編	2004	『古市遺跡群』XXV				
古市 XXVI	羽曳野市教育委員会編	2005	『古市遺跡群』XXVI				
古市 XXVII	羽曳野市教育委員会編	2006	『古市遺跡群』XXVII				
古市 XXVIII	羽曳野市教育委員会編	2007	『古市遺跡群』XXVIII				
古市 XXIX	羽曳野市教育委員会編	2008	『古市遺跡群』XXIX				
古市 XXX	羽曳野市教育委員会編	2009	『古市遺跡群』XXX				
古市 XXXI	羽曳野市教育委員会編	2010	『古市遺跡群』XXXI				
大ガス	羽曳野市教育委員会編	1992	『菅田白鳥遺跡発掘調査概要報告書－大阪ガス南部支社羽曳野営業センター新築工事に伴う埴輪製作遺跡隣接地の調査－』				
野々上 I	羽曳野市遺跡調査会編	1994	『野々上 I－野々上遺跡試掘調査報告書－』				
樅山	羽曳野市遺跡調査会編	1994	『かしやま－区画整理に伴う樅山遺跡の事前発掘調査－』				
高鷲中之島	羽曳野市遺跡調査会編	1994	『高鷲中之島遺跡調査報告書』				
城山府概報	大阪府教育委員会編	1987	『府営城山住宅建替に伴う高屋城跡(城山遺跡)発掘調査概要』				

表7 古市古墳群内における居住域関連資料－藤井寺市域－（1）

遺跡名	調査区	遺構	遺物	時期	備考	報告書
大正橋遺跡	TS86-1	SD01	円筒埴輪			石川Ⅱ
		SD02	円筒埴輪・人物形埴輪・有袋鉄斧			
		SD03	円筒埴輪			
		SD101	円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪・須恵器(蓋・杯・甕)・棒状木製品	TK23～MT15	大正橋1号墳(直径10mの円墳)	
		SD102	土師器	布留式		
		SD107	土師器(甕・壺)	布留式		
	TS01-1	SK101	円筒埴輪			石川Ⅷ
			須恵器			
		SK201	土師器破片			
		SD201	土師器(壺・高杯)			
小山遺跡	TS03-1	SD205	土師器			石川ⅩⅩ
		SX204	土師器			
		SX208	土師器(甕・高杯)	布留式		
		P203	土師器			
		P204	土師器			
		包含層	土師器(甕・壺・鉢・高杯)			
	KM86-1	SK01	土師器(高杯)	布留式		石川Ⅱ
		KM87-2	土坑・溝	土師器	布留式	石川Ⅲ
		KM88-2	自然流路			石川Ⅳ
		KM89-1	土坑			石川Ⅴ
小山城跡	KM92-1	SX01・02	円筒埴輪・鞠形埴輪		市野山古墳併行期	石川Ⅶ
		SX01	円筒埴輪		小山1号墳	
		KM92-4	SD01	円筒埴輪・朝顔形埴輪		
		SW01	円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪			
	KM95-2	SD01	円筒埴輪・形象埴輪(蓋・家・鞆)・須恵器(蓋杯)・刀子形滑石製品	MT15・TK10	西代1号墳(直径15.7m円墳、造出、葺石無)	石川ⅩⅠ
		SD02	須恵器(蓋杯・甕)	TK23～TK47	西代2号墳(4.5×3.8m方墳、葺石・埴輪無)	
		SD201	土師器	前期末～中期		
		SX301	埴輪			
	KM95-4	SX302	埴輪・土師器(甕・小型丸底壺)	布留式		石川ⅩⅡ
		SX207	滑石製有孔円板			
		SX217	土師器・須恵器	前期末～中期		
		SX311	須恵器(杯身)	TK47		
		SX314	高杯			
		SD212	土師器・円筒埴輪・家形埴輪			
小山下大船遺跡	KM00-1	SD04	土師器	布留式		石川ⅩⅦ
		SD07				
		SD08				
		SX01・02				
		SK01～07				
	KM00-2	P15				石川ⅩⅧ
		SX01	小型丸底壺・二重口縁壺・壺・短頸壺・高杯			
		SX02				
		SX03	甕・小型丸底壺・高杯・台付壺			
		SK06	小型丸底壺・土師器破片			
小山平塚遺跡	KM01-4	SD01	土製紡錘車・石製紡錘車・須恵器(蓋杯・無蓋高杯)・円筒埴輪・蓋形埴輪	TK23	殿町古墳	石川Ⅸ
		KM02-6	土師器			
		SX01	有孔円板・須恵器・土師器			
		SK03	土師器甕ほか	布留式	仲津山～墓山古墳併行	
	KS88-3	SK08	土師器甕	布留式	仲津山～墓山古墳併行	石川ⅩⅩ
		溝				
		SK102	土師器(甕・高杯)	布留式		
		SK108	土師器(甕・高杯)			
		SK107	土師器(高杯)		堅穴式住居の可能性	
		SK109	土師器少量			
青山遺跡	KS89-3	Pi101	土師器(小型丸底壺)			石川Ⅵ
		SD103	須恵器(杯身)	MT85		
		KS89-7	埴輪破片			
		KS93-2・3	包含層	土師器(内面ケズリ)		
	KS94-1	溝・堅穴式住居2棟		5世紀前半		石川Ⅹ
		KS96-8	SD01	円筒埴輪・須恵器杯蓋	TK10～TK43	
		KS96-9	SD207	円筒埴輪		
		KS97-2	SK08	土師器(甕)	布留式	
小山下大船遺跡	KF88-1	自然流路・土坑				石川Ⅳ
小山平塚遺跡	KH86-1	溝				石川Ⅱ
	KH87-2					石川Ⅲ
青山遺跡	A088-2	SD08	円筒埴輪・盾形埴輪	川西IV期	北西に古墳時代住居址検出(大阪府教委調査)	石川Ⅳ
	A089-2	SX01	円筒埴輪・朝顔形埴輪			石川Ⅴ
	A090-1	溝		古墳時代前期		石川Ⅶ
	A092-1	SX01	埴輪少量			石川Ⅷ

表8 古市古墳群内における居住域関連資料—藤井寺市域—(2)

遺跡名	調査区	遺構	遺物	時期	備考	報告書
青山遺跡	A093-2	SD01	円筒埴輪	B種ヨコハケ		
		SD01	(鰐付) 円筒埴輪・土師器(甕)	川西 II 期・小若江北式・船橋0-I式	焼土・炭灰が混じる埋土、埴輪焼成土坑?	
	A094-4	SD02	円筒埴輪・朝顔形埴輪・土師器(小型丸底壺)			石川X
		SD03	円筒埴輪・土師器(甕)			
		SD101	円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪・土師器(小型丸底壺・二重口縁壺)			
		SE01	(鰐付) 円筒埴輪・朝顔形埴輪・盾形埴輪・鞠形埴輪・鳥形埴輪			
		SX01	円筒埴輪・盾形埴輪			
	A095-2	SD01	埴輪			
		SD02	埴輪			石川X I
	A095-3		埴輪			
	A095-4		埴輪			
	A096-1		埴輪			石川X II
	A096-2		埴輪			
	A096-3		埴輪・土師器			石川X III
	A098-1・2	SD01	円筒埴輪(II期)・朝顔形埴輪・鰐付円筒埴輪・蓋形埴輪・盾形埴輪・家形埴輪			
		SD02				石川X VIII
		SD03				
	A098-3	溝	埴輪			
	A098-4	溝	土師器・埴輪			
	A098-6	SD501	土師器(甕・壺・高杯)・円筒埴輪(方形透かし)・韓式系土器(軟質格子目タタキ)	布留式		石川X V
		SK502	土師器(高杯)	布留式		
	A099-1		埴輪			
	A099-2	周溝・葺石	円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪(蓋・鞠)		青山7号墳	石川X VI
	A000-2		埴輪			
	A001-1	周堤斜面			浄元寺山古墳周堤斜面	石川X VII
	A001-2	SD01	埴輪・土器破片			石川X VIII
	A004-1		埴輪			石川X X
林遺跡	HY86-1	SD01	円筒埴輪・楕円筒埴輪		赤子塚古墳周溝の可能性	
		包含層	埴輪			石川II
		HY86-15	溝状遺構	円筒埴輪		
		HY87-6	SD203	埴輪	古墳周溝の可能性	
		HY87-14	溝・土坑			石川III
		HY87-15	古墳周溝	埴輪		
	HY88-15	SK01	円筒埴輪・盾形埴輪・馬埴輪	川西IV期		
		HY88-18	埴輪少量			石川IV
	HY90-7		円筒埴輪・鞠形埴輪	川西V期	古墳の可能性	石川VI・VII
		HY91-1	SK02	土師器(二重口縁壺)		
	HY92-1	SW01	埴輪		古墳の可能性	石川VII
		SK105	土師器(甕)韓式系土器(平底鉢)		甕はS字状口縁	
		SB01	土師器(台付甕・小型器台・高杯)		堅穴式住居4.0×3.4m	
		SB02				
		SX01	埴輪		林2号墳(沢田古墳)周堤区画溝	
		SX02				
	HY92-4		埴輪			
	HY92-8・9	SB21	土師器少量		3.2×(1.3+α)m	
		SB22	土師器(高杯・壺)		3.3×4.1m	
		SB23	土師器少量		4.7×(1.9+α)m	
		SB24			3.95×(1.0+α)m	
		SB25	須恵器破片(杯)		(2.8+α)×(2.8+α)m	石川VIII
		SB26	土師器(高杯)		(3.2+α)×(3.2+α)m	
	HY93-6	SX01	土師器少量			
		SK01				
	HY93-6	SB01	土師器破片		一辺4.2m、SB02を切る	
		SB02	土師器細片(甕)		一辺4.2m	
		SB03	須恵器細片		4.2×(2.8~3)m	
		柱穴・土坑群	土師器(甕・二重口縁壺・小型丸底壺・高杯)		SB1・2・3に伴う可能性	石川IX
		SX01	円筒埴輪・形象埴輪(家・船・動物)・土師器(甕・高杯)		溝状の落ち込み	
		SX02	円筒埴輪・朝顔形埴輪・土師器細片(高杯)			
	HY93-7	SD101	円筒埴輪(B種ヨコハケ)・盾形埴輪			
	HY93-16	SD01				石川X
	HY94-4	SX01			周辺住居址と類似埋土	石川X I
	HY94-8	SK07	埴輪			古墳時代遺物出土

表9 古市古墳群内における居住域関連資料－藤井寺市域－（3）

遺跡名	調査区	遺構	遺物	時期	備考	報告書
林遺跡	HY95-6	SX02	円筒埴輪			石川X I
	HY95-9	古墳・埴輪棺	円筒埴輪・形象埴輪・土師器・須恵器			
	HY95-10	SX203	円筒埴輪・盾形埴輪・蓋形埴輪・人物形埴輪		古墳周溝の可能性	石川X II
	HY96-1	SX01	埴輪・須恵器		古墳周溝の可能性	
	HY96-3	溝？	埴輪			
	HY96-5	土坑	埴輪			
	HY96-7	古墳	円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（蓋・盾・鞠・鶴・馬・人物）・土師器（甕）・須恵器（器台）	TK208	造出の方墳 林10号墳	石川X III
			埴輪			
			SK101		SK101は中世以降	
	HY96-8	SD01	円筒埴輪・人物形埴輪			
	HY97-5	SX301	円筒埴輪・朝顔形埴輪	川西V期		石川X VI
	HY98-2	SX302	須恵器（杯身）	TK47		石川X V
はざみ山遺跡	HY00-1	SD101	円筒埴輪			
		SX201	埴輪			
		SD01	土師器・須恵器・円筒埴輪	5世紀後半～6世紀代		
		SD02	土師器・須恵器			
		SD03	円筒埴輪・朝顔形埴輪		林11号墳（北大蔵古墳）直径31.6m円墳造出し・葺石あり	
		SD04	円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（蓋・家他）			石川X VII
		SB01	土師器（甕・高杯・短頸壺・直口壺）		2.9×2.9m、造り付けカマド	
		SB02	須恵器（無蓋高杯）、土師器（高杯・直口壺・甕・台付壺・瓶）	TK47	(3.2～3.3) × (2.8～3.1) m、造り付けカマド	
	HY00-2		埴輪			石川X VI
	HY00-8	埴輪棺	円筒埴輪・盾形埴輪			石川X VIII
	HY05-2		埴輪			石川XX I
はざみ山遺跡	HM86-1	SX02	円筒埴輪・滑石製品（合子の一部か）			
		SE01	石見型盾形埴輪の基底部			
		HM86-4	包含層	埴輪		
	HM86-5	SD01	土師器（甕・高杯）	布留式		
		SD02	円筒埴輪（川西V）	川西V期		石川 II
		SK01	蓋形埴輪	川西IV期		
	HM86-14		円筒埴輪・土師器・須恵器		溝内埋土？	石川III
	HM88-4		円筒埴輪		はざみ山古墳周堤	
	HM88-8	SX01・02	円筒埴輪・朝顔形埴輪・須恵器（コップ形）		越中塚古墳墳丘・周溝	
		SD101	埴輪			
	HM88-13		円筒埴輪・朝顔形埴輪		埴輪は集石遺構に伴う	石川IV
	HM88-15	SB101	土師器（甕・高杯・小型丸底壺・二重口縁壺）	布留式・船橋0-I	5.75×(5.75)m	
		SD201	円筒埴輪（黒斑）・家形埴輪			
		落ち込み	壺形埴輪・盾持人物埴輪			
	HM89-6	SK16	埴輪棺	B種ヨコハケ		石川V
	HM89-15		埴輪棺			石川VI
	HM90-14	地山落ち込み	埴輪			
	HM90-27	SD101	円筒埴輪			
		SD208	円筒埴輪			石川VII
		SX301	形象埴輪（家あるいは畠み）			
	HM91-5・6	遺構内埋土	円筒埴輪			
はざみ山遺跡	HM91-16	SB09	円筒埴輪		SB01は飛鳥時代掘立柱建物、埴輪は混入	
		SK06	円筒埴輪			
		SK12	円筒埴輪			
	HM92-2	溝	埴輪	川西IV期	越中塚古墳所属の可能性	
	HM92-16	SX01	円筒埴輪・形象埴輪（盾・家・船・馬）		岡ミサンザイ古墳所属の可能性	
	HM92-33	SK01	土師器（甕・壺・高杯）	布留II式～III式		
		SK02	初期須恵器（蓋杯・甕）・土師器（甕・高杯）・埴輪			石川 X
	HM93-9	SD01	円筒埴輪		ヨコハケ・無黒斑	
		SD14	円筒埴輪細片			
		SX06	円筒埴輪・形象埴輪・土師器		はざみ山古墳堤区画溝	
	HM93-10	SD06	埴輪片			
	HM93-15	SD301	円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪	川西IV期	古墳周溝、藤ヶ丘1号墳(一辺16m方墳)	
	HM93-16				越中塚古墳に関連する落ち込み	石川IX

表10 古市古墳群内における居住域関連資料—藤井寺市域—（4）

遺跡名	調査区	遺構	遺物	時期	備考	報告書
はざみ山遺跡	HM93-23	SD101	埴輪			石川X
		SD102	埴輪		B種ヨコハケ	
		SD104	円筒埴輪・滑石製勾玉			
		SK110	埴輪			石川X
		SK113	円筒埴輪			
		SK114	円筒埴輪			
		HM93-26	SD01	円筒埴輪	川西IV期	石川IX
		HM93-27	SK01	埴輪		石川X
		HM93-29		埴輪		石川IX
		HM93-32	SD201	円筒埴輪・朝顔形埴輪		円筒埴輪4基と朝顔形埴輪2基とを合わせて流水施設
	HM95-10・ 11・18	HM94-9	SX01	埴輪		
		HM94-20	SD10	円筒埴輪		
		HM95-2	SD201	土師器（甕）	布留式	溝底から出土
		HM95-5	周堤外溝			野中宮山古墳周堤外溝
		周溝		円筒埴輪・形象埴輪（盾・家・鳥・馬・人物）		今井塚古墳周溝（墳丘長32m、葺石なし、帆立貝式古墳）
	HM95-13・15	SK01	土師器（高杯）		布留式	
		SK02				
		SH01				6.3×(5.0+α)m
		SH02	土師器		6世紀末葉～7世紀初頭	5.9×4.8m カマド付
	HM95-20 HM96-11	SD002			時期不明	堅穴式住居周壁溝 6.6×(3.4+α)m
		SK301	土師器破片		5世紀中葉	土坑底面焼ける
		HM96-16	SX01			稻荷塚古墳（墳丘長50mの帆立貝式古墳、葺石なし）
		SB01	土師器・須恵器		6世紀末	堅穴式住居 (3.5~3.6) × (3.7~3.8)m
		HM96-22	周溝	円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（盾・蓋・家・人・馬）		下ノ池古墳
	HM96-25 HM97-3 HM97-9 HM97-12 HM97-14	HM96-25	埴輪			
		HM97-3	溝			
		HM97-9	埴輪			
		HM97-12	土師器・須恵器・滑石製臼玉			
		HM97-14	埴輪・土師器			
	HM97-15 HM97-22・ 98-6	HM97-15	溝（落ち込み）	埴輪・土師器		
		HM97-22・ 98-6	SX3022	円筒埴輪少量		SX3022は古代、掘り込みの中に埴輪破片を意図的に設置
		HM99-12	SD01			石川X IV
		SD02	円筒埴輪			茶臼塚古墳周溝
		HM99-23	埴輪			石川X V
	HM02-11 HM02-13 HM03-3 HM03-7 HM03-14 HM04-1 HM02-16 HM03-3 HM05-16 HM08-8 HM09-3	HM99-25	埴輪			石川X VI
		HM02-11	埴輪			
		HM02-13	埴輪・須恵器・土師器			
		HM03-3	土師器・須恵器			
		HM03-7	溝	土師器・須恵器		石川X IX
		HM03-14	落ち込み	埴輪		
		HM04-1	掘り込み	埴輪		
		HM02-16	SD201	円筒埴輪		
		HM03-3	SD01・SD02・ SX06	円筒埴輪・朝顔形埴輪・布留式土器		石川X X I
		HM05-16	埴輪			石川X X II
		HM08-8	埴輪			石川X X III
		HM09-3	埴輪			石川X X V
土師の里埴輪窯跡群	HJH89-1	埴輪窯3基	円筒埴輪・形象埴輪（蓋・家・盾・草摺・馬）			石川VI
	HJH00-1	落ち込み	円筒埴輪・形象埴輪（圓・家・不明）・陶棺	川西IV期～V期	窯体の可能性	石川X VI
	HJH06-1	埴輪窯2基	埴輪			石川X X II
土師の里遺跡	HJ86-1	埴輪窯1	円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（盾・蓋・家・鞞・甲・草摺・人物）・須恵器	川西IV期～V期		石川II
	HJ86-2	埴輪窯2				
	HJ86-3	埴輪多量				
	HJ87-6	古墳周溝	円筒埴輪・蓋形埴輪			
	HJ87-7	SK01	埴輪・土師器・須恵器			
	HJ87-10	埴輪				
	HJ87-12	SD01	円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（盾・蓋・鞞・人物・馬）		西清水古墳（土師の里5号墳、方墳）	石川III
	SK01	円筒埴輪・形象埴輪（盾・蓋・人物）			SK01は奈良時代の遺構	

表11 古市古墳群内における居住域関連資料－藤井寺市域－（5）

遺跡名	調査区	遺構	遺物	時期	備考	報告書
土師の里遺跡	HJ87-14		円筒埴輪		盾塚古墳周溝内？	石川III
	HJ87-16	竪穴式住居	須恵器・土師器・埴輪			
	HJ87-21		円筒埴輪			
	HJ87-22	焼土層	埴輪多量			
	HJ88-10		埴輪・葺石転落石		珠金塚西古墳	石川IV
	HJ88-11				珠金塚西古墳	
	HJ89-4		埴輪			石川V
	HJ89-12	古墳周溝				石川VI
	HJ90-12		埴輪			
	HJ90-14		須恵器（杯身）			
土師寺跡	HJ91-1		円筒埴輪・朝顔形埴輪		誉田御廟山古墳外堤区画溝	石川VII
	HJ92-4	SB01	土師器	布留式	住居址は須恵器出現直前 $(3.3 + \alpha) \times (0.9 + \alpha)$ m	
					石川VIII	
		SK01	須恵器（蓋杯・高杯）・土師器（杯・甌）	TK208～TK23		
		SX01				
	HJ92-9	土坑				
	HJ92-10	SB01	土師器（椀）・須恵器（杯身）	TK23～TK47	3.45×3.2m、作りつけカマド	石川IX
	HJ93-1	包含層	円筒埴輪・家形埴輪・土師器（甌）	川西IV期		
	HJ93-4	住居址2棟	滑石屑・白玉未製品			
	HJ93-10					
北岡遺跡	HJ93-12	地山の落ち込み	埴輪			
	HJ94-4	地山の落ち込み	円筒埴輪		珠金塚西古墳（一辺30m方墳）	石川X
	HJ94-6				谷地形の箇所から古墳時代の遺物が出土	
	HJ94-11	土坑	土師器小破片	布留式		石川X III
	HJ96-12	竪穴式住居	埴輪			
	HJ96-21	SK01	土師器（高杯・甌・壺）・円筒埴輪	布留式・B種ヨコハケ		石川X IV
	HJ97-3	落ち込み	埴輪			石川X III
	HJ97-5	竪穴式住居	埴輪・土師器			
	HJ97-10	埴輪列・葺石	円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（盾・勒・水鳥・鶴・柵）・樋形土製品		狼塚古墳	石川X X II
	HJ97-13		埴輪			石川X III
土師寺跡	HJ97-16	SX01周溝	円筒埴輪	川西IV期	土師の里11号墳	石川X IV
	HJ98-2	SD07	円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（盾・蓋・家）			石川X V
	HJ98-3	SX01	円筒埴輪	5世紀末～6世紀初頭		石川X IV
	HJ98-4		埴輪			
	HJ98-6	埴輪棺	円筒埴輪	川西IV期	埴輪棺2基	石川X V
	HJ98-9	SD01	円筒埴輪・土師器（二重口縁壺・高杯）・須恵器（杯身）・滑石製勾玉臼玉	川西IV期・布留式・TK73		
	HJ99-4	掘り込み	土師器・埴輪			
	HJ99-12		埴輪			
土師寺跡	HJ99-13		埴輪			石川X VI
	HJ99-15		埴輪・土師器・須恵器			
	HJ00-3	SX02	埴輪			
	HJ01-1	周溝	円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（盾・蓋）		西清水古墳（土師の里5号墳）	石川X IX
	HJ02-13		埴輪			
	HJ04-5	周溝	円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（蓋・盾・勒・家・馬・甲冑）		西清水2号墳（土師の里12号墳）	石川X XIV
	HJ04-6	古墳	埴輪・土師器		埋没古墳	石川X X I
	HJ04-9	掘り込み	埴輪・土師器			
	HJ05-1	土坑	埴輪			
	HJ05-4	溝	埴輪			
土師寺跡	HJ05-5	SD01・SD02	埴輪・土師器（壺）		西清水2号墳（土師の里12号墳）	石川X X III
	HJ05-8	埴輪円筒棺・SX01	円筒埴輪・朝顔形埴輪・蓋形埴輪			石川X X III
	HJ05-11	埴輪窯2基	埴輪・土師器・須恵器		土師の里南埴輪窯跡群	石川X XIV
	HJ06-3	SX01	円筒埴輪・蓋形埴輪・家形埴輪		古墳周溝の可能性	石川X X II
	HJ09-4		埴輪・土師器			石川X X V
北岡遺跡	HJ09-5		埴輪			
	HJ88-1	土師器椀				石川IV
	HJT94-1	溝	円筒埴輪（窯窓焼成）		溝底（地山）から出土	石川X
北岡遺跡	HJT97-1	古墳	埴輪・須恵器			石川X III
	KT86-1	包含層	埴輪・朝顔形埴輪（少量）			石川II
	KT86-6	整地土層	埴輪少量			
	KT91-1	SX02	円筒埴輪		有黒斑、底部破片	石川VII
	KT91-5	SD01	円筒埴輪			
	KT91-5	SK01	円筒埴輪			

表12 古市古墳群内における居住域関連資料—藤井寺市域—（6）

遺跡名	調査区	遺構	遺物	時期	備考	報告書
北岡遺跡	KT92-11	SX102	須恵器(杯身)・滑石製勾玉	TK10		石川IX
	KT93-2	SX02	円筒埴輪			
	KT96-21	土坑	土師器			石川X III
	KT97-2	落ち込み	土師器・須恵器			石川X XV
	KT08-7		埴輪			石川XXV
国府遺跡	KT09-8		埴輪			石川XXV
	KO88-1	SD01	円筒埴輪・馬形埴輪・蓋形埴輪・盾形埴輪・須恵器少量	川西IV期		石川IV
	KO88-7		円筒埴輪		宮の南塚古墳に東接、葺石転落石検出	石川V
	KO90-9	SK02内SK101	須恵器(高杯脚部)他	TK23~TK47		石川IX
	KO91-5	SD01	円筒埴輪・形象埴輪(盾・家・動物・不明)		市野山古墳外堤区画溝	石川X II
	KO92-1		土師器甕(タタキ)	古墳時代前期		
	KO92-6	SX01・02・03	埴輪			石川IX
	KO93-2		土器			
	KO95-4	包含層	埴輪・須恵器			
	KO96-5	落ち込み	埴輪・土師器			石川X III
	KO97-1		土師器	布留式		
	KO97-4	埴輪棺	埴輪			石川X IV
	KO99-3	SD01	埴輪			石川X V
	KO99-5		碧玉製管玉・円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪(盾・蓋・家・囲い他)		長屋1・2号墳	石川X VI
	KO99-8		須恵器(杯蓋・甕)	TK47		石川X VII
	K002-4	落ち込み	埴輪			石川X IX
	K003-2	SD01	蓋形埴輪立飾り破片		市野山その周辺の古墳に帰属?	石川X X
葛井寺遺跡	K004-1		掘り込み	埴輪		
	K004-2		落ち込み	朝顔形埴輪・須恵器(甕)	5世紀後半	古墳周溝の可能性
	K004-5		埴輪			石川X X I
	K006-1		埴輪円筒棺	埴輪		
	K006-2		古墳・埴輪円筒棺	埴輪・土師器		石川X X II
	K007-3	古墳	円筒埴輪・子持勾玉		潮音寺北古墳	石川X X III
	SK15		円筒埴輪			
	FJ86-1	SK17	朝顔形埴輪			石川II
	SK18		家形埴輪			
	FJ86-8	SD01	円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪・須恵器(甕・器台・甕)・滑石製紡錘車形石製品	川西IV期~V期 TK23~TK47	葛井寺1号墳(直径10m円墳、葺石無)周溝	
	FJ88-1	SX01	円筒埴輪・二重甕			石川IV
		SD01	土師器	庄内式・布留式		
	FJ88-8	包含層・整地上層	円筒埴輪	川西IV期~V期		
	FJ88-12	SX01	石見型盾形埴輪		導水管として再利用	石川V
		SK02	円筒埴輪	川西V期		
	FJ89-12	SE01	円筒埴輪・家形埴輪	川西V期		石川VI
	FJ90-10		須恵器(杯身)	TK43		
	FJ90-15・16	SD02	円筒埴輪・須恵器(蓋杯)	川西V期 TK23	葛井寺2号墳(6.5×6m方墳)	石川VII
	FJ91-5	SD01				
津堂遺跡	FJ92-10	包含層	円筒埴輪(B種ヨコハケ)・初期須恵器(器台・甕)		付近に埋没古墳の可能性	石川IX
	FJ93-9	SX02	須恵器蓋杯	5世紀末~6世紀初頭		石川X II
	FJ94-11	SK01	韓式系土器?			石川X
	FJ95-2	SD01	円筒埴輪・盾形埴輪他	川西IV期~V期		石川X I
	FJ95-15	SD01	円筒埴輪・家形埴輪・須恵器(蓋杯・高杯・台付短頭甕・甕)・土師器	川西V期・TK43		
	FJ95-22	SK01	円筒埴輪	川西V期	付近に埋没古墳の存在の可能性	石川X II
		SK02	円筒埴輪	川西V期		
	FJ96-7	落ち込み	円筒埴輪		鉢塚古墳前方部周堤外側の落ち込み	
	FJ97-19・20	SD01	円筒埴輪少量(混入)		B種ヨコハケ、SD01は12世紀	石川X IV
	86-1	溝・土坑・井戸・落ち込み	須恵器(蓋杯・高杯・甕・壺・把手付椀・器台・甕)・土師器(甕・高杯・小型丸底壺・椀・甕)・製塙土器・滑石製紡錘車・砥石・馬齒	TK216・TK208・布留III式~IV式		津堂86-1 南河内
		河川跡・土坑・溝・井戸	須恵器(蓋杯・高杯・甕・壺・把手付椀・甕)・陶質土器(甕)・土師器(甕・高杯・小型壺・小型丸底壺・器台・椀)・製塙土器・滑石製紡錘車	TK73・TK216・TK208・布留III式~IV式		津堂
	TD86-1	土坑・溝				石川II
	TD86-4	溝	埴輪・須恵器			
	TD87-3	自然流路	円筒埴輪・須恵器・土師器	6世紀		石川III

表13 古市古墳群内における居住域関連資料－藤井寺市域－（7）

遺跡名	調査区	遺構	遺物	時期	備考	報告書
津堂遺跡	TD89-1	溝				石川V
	TD90-1	包含層	円筒埴輪・人物形埴輪	川西V期		石川VI
	TD90-3	墳丘盛土				石川VIII
	TD92-1	土坑・溝				石川IX
	TD93-3	土坑・小ピット		古墳時代前期		石川X
	TD94-2	SD02	円筒埴輪（川西V）	川西V期		石川XI
	TD96-1	SX01	土師器（甕）	布留式		石川XIII
西古室遺跡	NK87-4		土師器（高杯）			石川III
	NK91-2		円筒埴輪			石川VII
	NK93-8	谷状の落ち込み			古墳時代の生活痕跡	
	NK94-3	SK07 SD01	土師器（甕・高杯）・須恵器（甕） 勾玉	布留式 古墳時代中期	付近に住居址の可能性	石川X
	NK99-7		須恵器			石川XVI
	NK02-5	SD01 P01	須恵器（甕） 土師器破片			石川XIX
	NK04-3	SK01・SD05	土師器（高杯）・須恵器（甕）	5世紀後半～古墳時代後期		石川XXI
古室遺跡	KR87-1		円筒埴輪・須恵器・土師器			石川III
	KR91-1	包含層	埴輪少量			石川VII
御舟遺跡	SD03	円筒埴輪				
	MF93-1	SD04	円筒埴輪・土師器（高杯・甕）・須恵器（蓋・杯）	布留式・TK23～TK47		石川X
古市大溝	MF04-1	SD01	土師器	布留式		石川XXI
	FM99-2		円筒埴輪			石川XVI
船橋遺跡	FF05-2		須恵器			石川XXII
	FF06-2	土坑	土師器・須恵器			石川XXIII
	FF07-5		土師器			石川XXIV

藤井寺市域居住関連資料報告書

一覧表記載	編集機関	発行年	報告書名
石川II	藤井寺市教育委員会編	1987	『石川流域遺跡群発掘調査報告』II
石川III	藤井寺市教育委員会編	1988	『石川流域遺跡群発掘調査報告』III
石川IV	藤井寺市教育委員会編	1989	『石川流域遺跡群発掘調査報告』IV
石川V	藤井寺市教育委員会編	1990	『石川流域遺跡群発掘調査報告』V
石川VI	藤井寺市教育委員会編	1991	『石川流域遺跡群発掘調査報告』VI
石川VII	藤井寺市教育委員会編	1992	『石川流域遺跡群発掘調査報告』VII
石川VIII	藤井寺市教育委員会編	1993	『石川流域遺跡群発掘調査報告』VIII
石川IX	藤井寺市教育委員会編	1994	『石川流域遺跡群発掘調査報告』IX
石川X	藤井寺市教育委員会編	1995	『石川流域遺跡群発掘調査報告』X
石川XI	藤井寺市教育委員会編	1996	『石川流域遺跡群発掘調査報告』XI
石川XII	藤井寺市教育委員会編	1997	『石川流域遺跡群発掘調査報告』XII
石川XIII	藤井寺市教育委員会編	1998	『石川流域遺跡群発掘調査報告』XIII
石川XIV	藤井寺市教育委員会編	1999	『石川流域遺跡群発掘調査報告』XIV
石川XV	藤井寺市教育委員会編	2000	『石川流域遺跡群発掘調査報告』XV
石川XVI	藤井寺市教育委員会編	2001	『石川流域遺跡群発掘調査報告』XVI
石川XVII	藤井寺市教育委員会編	2002	『石川流域遺跡群発掘調査報告』XVII
石川XVIII	藤井寺市教育委員会編	2003	『石川流域遺跡群発掘調査報告』XVIII
石川XIX	藤井寺市教育委員会編	2004	『石川流域遺跡群発掘調査報告』XIX
石川XX	藤井寺市教育委員会編	2005	『石川流域遺跡群発掘調査報告』XX
石川XXI	藤井寺市教育委員会編	2006	『石川流域遺跡群発掘調査報告』XXI
石川XXII	藤井寺市教育委員会編	2007	『石川流域遺跡群発掘調査報告』XXII
石川XXIII	藤井寺市教育委員会編	2008	『石川流域遺跡群発掘調査報告』XXIII
石川XXIV	藤井寺市教育委員会編	2009	『石川流域遺跡群発掘調査報告』XXIV
石川XXV	藤井寺市教育委員会編	2010	『石川流域遺跡群発掘調査報告』XXV
津堂86-1	大阪府教育委員会編	1987	『津堂遺跡-86-1区の調査』
南河内I	大阪府教育委員会編	1987	『南河内遺跡群発掘調査概要・I』
津堂	大阪府教育委員会編	1992	『津堂遺跡』

7. 富田林市真名井古墳出土埴輪の特徴と編年の位置

金澤 雄太

はじめに

真名井古墳は大阪府富田林市南旭ヶ丘町に所在した前方後円墳で（図1）、1961年に宅地開発をきっかけとして大阪大学国史研究室（担当：北野耕平）によって発掘調査がおこなわれた後、その成果が1964年に報告されている（北野1964）。古くには十三本松山と呼ばれていたこの古墳は、その後の開発により完全に消滅してしまったが、調査によって得られた埋葬施設や豊富な副葬品の内容は、現在においても古墳時代を考える上で欠かすことのできない重要な資料となっている。

真名井古墳の発掘調査では、埴輪の出土位置が記録されるなど当時の研究状況からすると先駆的な試みがなされているものの、出土した埴輪の内容に関しては部分的にしか明らかになっておらず、大きな課題として残されていた。共伴する副葬品や埋葬施設がわかる数少ない前期古墳の埴輪であり、それらの具体的特徴を明らかにすることは、埴輪編年と副葬品編年の対応を確認できるのみならず、埴輪に表れる古墳間の関係や粘土櫛の出現時期といった様々な問題を考える上で大きな意味をもつものと考える。

また真名井古墳が所在する河内には、古墳時代中期に古市古墳群という大王墓を含む巨大古墳群が築造される。従来は近在する玉手山古墳群や松岳山古墳群が前期後半に位置づけられていたため、その勢力が奈良盆地勢力にかわって台頭したとする論もあったが（石部1980、白石1969・1984など）、後に玉手山古墳群が前期後半までに衰退し、古市古墳群との断絶が指摘されるようになり（安村2005など）、その歴史的解釈が大きな問題となっている。そのため、埴輪の様相を加えて改めて真名井古



図1 真名井古墳の位置と周辺の主要前期古墳

墳を位置づけることは、古市古墳群成立以前の河内の情勢を考える上で重要な作業といえる。

そこで本論では、その基礎的な作業として大阪大学に保管されている真名井古墳出土埴輪の具体的特徴を整理してその編年的位置について検討し、そこから波及する問題について若干ながら言及することとしたい。

1 古墳の概要

個別資料の記述を始める前に、真名井古墳がどのような古墳であるかを報告書に基づいて述べておこう。

真名井古墳は大和川の支流である石川の西方、羽曳野丘陵の東縁ほぼ中央から東にのびる尾根の先端に築造された墳長60mの前方後円墳で、墳丘は地山整形と後円部の一部に盛土をおこなうことで形成され、前方部の先端は丘陵を切断することでつくりだしている（図2）。

外表施設としては葺石と埴輪が確認されており、葺石は基底部に長径20cm程度のやや大きめの石材を並べ、その上部に長径10cmほどの河原石を積んでいる。報告では、段築が存在せず、埴輪列を樹立する際に狭い段を設けていた可能性が指摘されているが、提示された図面を見る限り、基底石などの存在から少なくとも2段以上の段築であった可能性が高い。埴輪列は墳端と1段目テラス面で確認され、樹立間隔は心々間距離で約2.0mである⁽¹⁾。

埋葬施設は後円部中心の構築墓坑内に設けられた粘土槅で、長軸方向はN43°Wと墳丘主軸に平行している。槅内におさめられていたと考えられる箱形木棺は長さ5.33m、南東幅0.65m、北西幅0.53mであり、南東方向に被葬者の頭位が向けられていた可能性が高い。また、墓坑底の北西部から西側

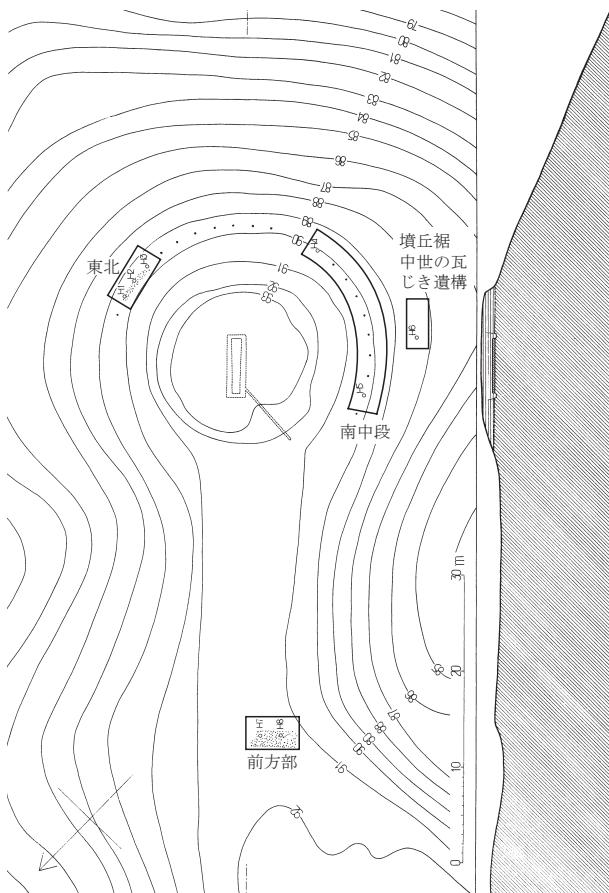


図2 真名井古墳墳丘測量図および埴輪推定出土位置

クビレ部へのびる排水溝が埋葬施設と同時に構築されている。

副葬品は棺内のものと棺外のものがあり、棺内からは画文帶神獸鏡と考えられる平縁銅鏡片2点と碧玉製管玉2点、土師器甕1点が、棺外からは舶載三角縁獸文帶三神三獸鏡1面、碧玉製紡錘車3点、鉄鏃24点、鉄刀2点、鉄鉗3点、短冊形鉄斧1点、袋状鉄斧1点、鉄錐1点、鉄刀子2点、鉄製棒状利器2点が3つの群に分かれて出土している。

2 出土埴輪の観察

真名井古墳の埴輪は今までに部分的な情報が実測図とともに公表されている（北野1964、大阪大学考古学研究室1989、河内2002）。今回報告する資料の中にはそれらと重複するものも含まれているが、それらとの対応は個別資料の説明の中で適宜おこなっていくこととする。

また、一部の資料に関しては出土位置を示すと考えられる紙片が伴っていたが、それを欠くものが墳丘のどこから出土したかは現状で確認できない。そのため、紙片を伴っていたものに限り個別資料の説明の中で考えられる出土位置を述べることとする。それでは部位ごとに記述をおこなっていこう。

口縁部（図3-1～4） 1・2は口縁端部の破片である。小破片のため傾きに不安な点が残り、朝顔形円筒埴輪であるのか普通円筒埴輪であるのかは判然としない⁽²⁾。1は緩やかに外方へ開く形状で端部に面をもつ。残存高4.3cm、器厚0.7～0.8cmをはかり、内外面ともに調整はヨコナデである。内面には調整による鈍い稜が確認でき、外面もヨコナデによる凹凸が明瞭に認められる。

2は端部付近でやや屈曲し外下方に強くふくらむ形状で、端部に粘土を貼り付けている可能性がある。残存高3.5cmをはかり、器厚は摩耗もあるが0.4～0.6cmと下部が薄くなっている。調整は内外面ともにヨコナデである。

3・4は朝顔形円筒埴輪の二重口縁部で、ともに一次口縁から二次口縁の接合部に突出の強い突帯を貼り付けている。3は強く外反する一次口縁から内面に鈍い稜をもって二次口縁へとむかい、強く外方へ開く形状である。突帯外面の径25.4cm、残存高3.9cm、器厚0.7～0.9cmをはかる。内外面の調整はヨコナデで、外面の一部にはナデに伴う細かな条線が認められる。外面上部にタテハケのような痕跡が認められるが、調整に伴うものであるかは判然としない。外面全体に赤彩が残っている。

4は3と比べて傾きが弱く、直線的に二次口縁へむかう形状で、「南中段」出土である。突帯外面で径27.9cm、残存高6.4cm、器厚0.7～0.9cmをはかる。外面は一次調整タテハケで、内面はヨコハケの後に斜め上方へのケズリをおこなう。

1～3はともに大阪大学考古学研究室1989に掲載されている資料である。

頸・肩部（図3-5・6） 5は朝顔形円筒埴輪の頸部片で、「墳丘南裾 中世の瓦じき遺構」出土である。高さ1.6cmの突出の強い頸部突帯がつけられている。肩部から頸部へいたる内面は明瞭な稜が形成され、内側に入りながら上方へのびていく形状である。突帯外面の径29.4cm、残存高4.2cm、器厚0.7～0.9cmをはかる。外面調整はヨコナデが施され、内面調整にはヨコナデ、ユビオサエの後に斜め上方へのケズリをおこなう。

6は剥離した突帯の幅が広く、どのように下へ続くのか判然としないため部位の同定に不安が残るが、ここでは朝顔形円筒埴輪の肩部と判断した。残存高6.2cm、器厚0.8～0.9cmをはかる。外面は肩部のところに斜めに傾くタテハケが施され、内面はユビオサエが施されているが粘土接合痕が明瞭に残っている。

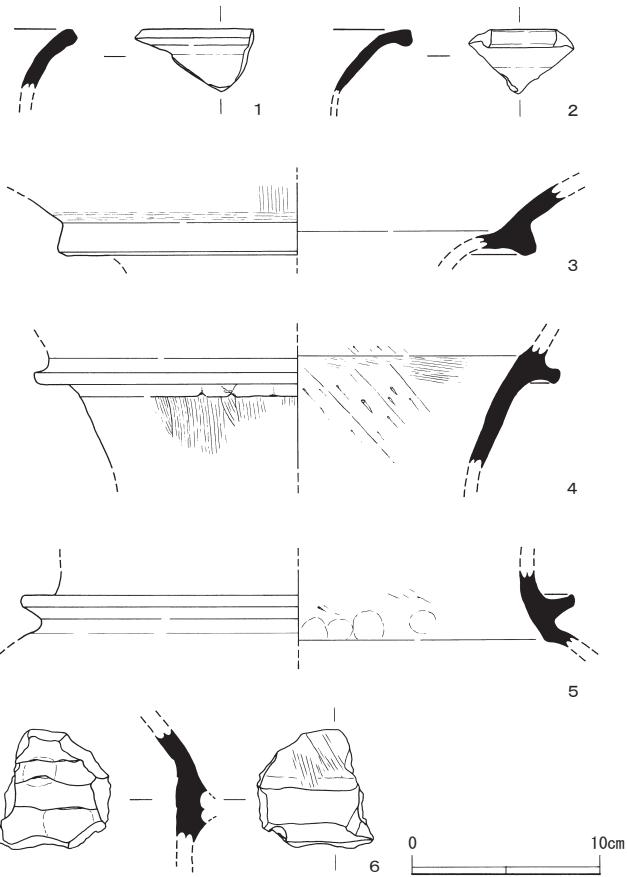


図3 真名井古墳出土埴輪実測図1

胴 部 (図4) 7は断面方形の突帯がつく胴部片であるが、突帯より上部が外側に開いていくことから口縁部直下にあたる可能性が考えられる。突帯における復元径31.9cm、残存高9.1cm、突帯高0.9cm、器厚0.7~0.9cmをはかる。一段の穿孔数はわからないが、突帯直下に方形スカシが認められ、

幅2.4cm前後の細い形状である。

摩耗のため調整はほとんどわからぬが、内面に下から上へのケズリがわずかに認められ、外面の一部に赤彩が残っている。確実ではないものの、河内一浩論文の図84-2に該当する可能性が高い(河内2002)。

8はやや上方につまみ上げられた方形の突帯をもつ胴部片で、突帯における復元径38.0cm、残存高9.0cm、突帯高1.2cm、器厚0.7~0.8cmをはかる。突帯の上下には複数単位のヨコナデによって明瞭な段が生じており、そのヨコナデの後に二次調整タテハケが施されている。さらにその後にV字状の線刻が施され、現状で縦方向に2単位が確認できる。内面は全体にケズリを施しているが、横方向のケズリの後に縦方向のケズリをおこなっているようである。外面に赤彩が認められる。

9は方形の突帯をもつ胴部片である。残存が良好でないため径は任意であるが、残存高13.8cm、突帯高1.3cm、器厚0.6cmをはかる。突帯直上に方形スカシが穿孔されているが、残存長が11.0cmと長い点が特徴である。一段中の穿孔数は不明である。外面調整は条線の荒いタテハケが施されるが、突帯貼り付け時のナデとの関係は判然としない。内面調整はヨコハケの後にケズリが施されており、砂粒の方向が上から下にむかっていることから倒立後にケズリが施され

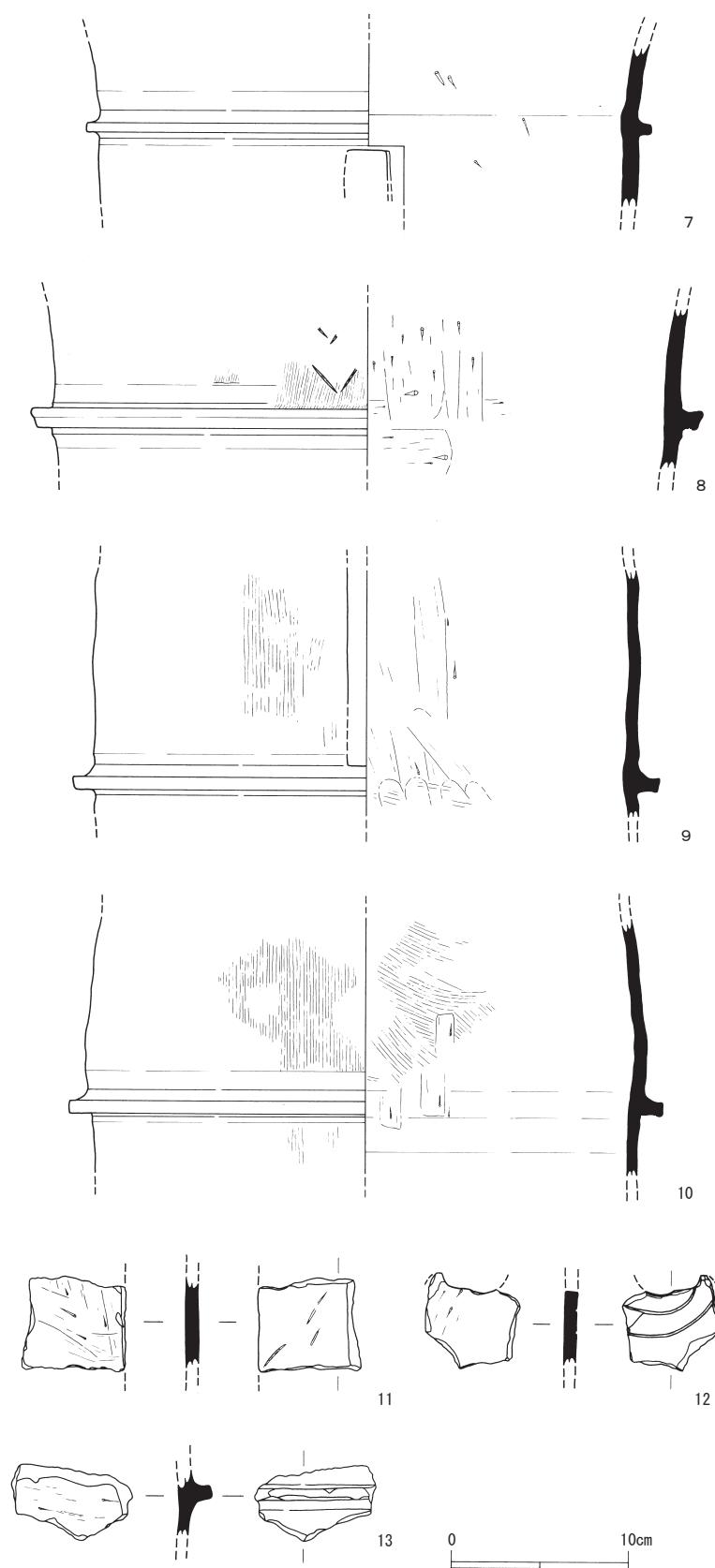


図4 真名井古墳出土埴輪実測図2

たと考えられる。そしてケズリの上にユビオサエが認められることから、再び正置させた後に突帯の貼り付けをおこなったのであろう。後述する底部の資料と類似する点が多いことから、最下段突帯とその上部にあたる可能性が高い。

10は方形の突帯をもつ胴部片である。9と同じく残存が良好でないため径は任意であるが、残存高14.8cm、突帯高1.3cm、器厚0.5~0.7cmをはかる。外面には一次調整タテハケが施され、一部に指があたったような痕跡がある。内面調整はナナメハケの後にユビオサエや下から上へ向かうケズリが施される。外面には黒斑が認められる。

11は方形スカシの一部が残存する胴部片で、残存高5.0cm、器厚0.6~0.8cmをはかる。外面は摩耗のため調整が判然としないが、右側に傾く線刻が施されている。全体の意匠や単位といったものはわからぬが、焼成前に施されたと観察できることから今回図化をおこなった。内面調整は上から下へのケズリが施されている。外面には赤彩が残存している。

12は巴形スカシの一部が残存する胴部片で、残存高5.2cm、器厚0.7cmをはかる。外面調整はナデが施され、内面調整は下から上へむかうケズリが施されている。巴形スカシに並行する2本の線刻が認められ、蕨手文との関係も考えられるが、このような破片は現状で1点しか確認できていない。

13は方形の突帯をもつ胴部片で、「墳丘南裾 中世の瓦じき遺構」出土である。残存高3.9cm、突帯高1.1cm、器厚0.6~0.8cmをはかる。外面調整は突帯貼り付けに伴うヨコナデのみが確認でき、内面調整には横方向のケズリが施される。

底 部（図5・6） 14~19は底部の破片であるが、製作技法から14~17の一群と18・19の一群の大きく2つに分類することができる。

14はやや裾広がりになるもののほぼ垂直に立ち上がる破片で、最下段突帯は上面がやや突出する方形を呈し、底端部が内側につまみ出されるという特徴がある。底部径29.8cm、残存高23.4cm、底部高19.3cm、突帯高1.3cm、器厚0.6~0.9cmをはかる。突帯直上の2ヶ所に方形スカシの一部が残存し、その位置関係がほぼ90度となることから、一段に4方向のスカシ孔が穿孔されていたと考えられる。外面調整はタテハケが施されるが、底端部にはそのタテハケを切るヨコナデが施されている。内面調整はナナメハケが施された後にユビオサエや縦方向のナデ、端部のヨコナデがなされ、さらにそれらを切るかたちで下から上へのケズリが施される。これらの調整から、ある一定の高さまで粘土を積み上げて内外面をハケ調整した後に、一度倒立させて端部をヨコナデで整え、再び正置に戻してから縦方向のケズリをおこなうという製作手順が考えられる。ただし、突帯の貼り付けがその過程のどの段階でおこなわれたかは判然としない。端部の一部に黒斑の付着を確認できる。

15は14と同様の形状をもつ破片で、「東北No.3」と書かれた紙片を伴うことから、後円部東側斜面で検出された3本の樹立埴輪のうちのいずれかと考えられる。最下段突帯は比較的整った方形を呈し、底端部が内側につまみ出される点も14と類似している。底部径34.4cm、残存高22.7cm、底部高20.3cm、突帯高1.3cm、器厚0.6~0.8cmをはかる。突帯直上に方形スカシの一部が残存しているが、一段の穿孔数はわからぬ。外面調整はやや左側に傾くタテハケで、端部にはその上からヨコナデが施される。内面調整は上から下へむかうケズリが施され、端部にはヨコナデが確認できるが、その切りあいは判然としない。これらの調整から、一度倒立させてヨコナデやケズリを施し、再び正置に戻すという製作手順が復元でき、器形や縦方向のケズリを内面に施すという点で14と類似しながらも、細かな手順には明瞭な差異が指摘できる。底部の対向する位置に黒斑が認められる。

16はやや裾広がりになる破片で、「東北No.1」と書かれた紙片を伴うことから、後円部東側斜面で検出された3本の樹立埴輪のうちのいずれかと考えられる。端部を内側につまみ出す点は上2つと同

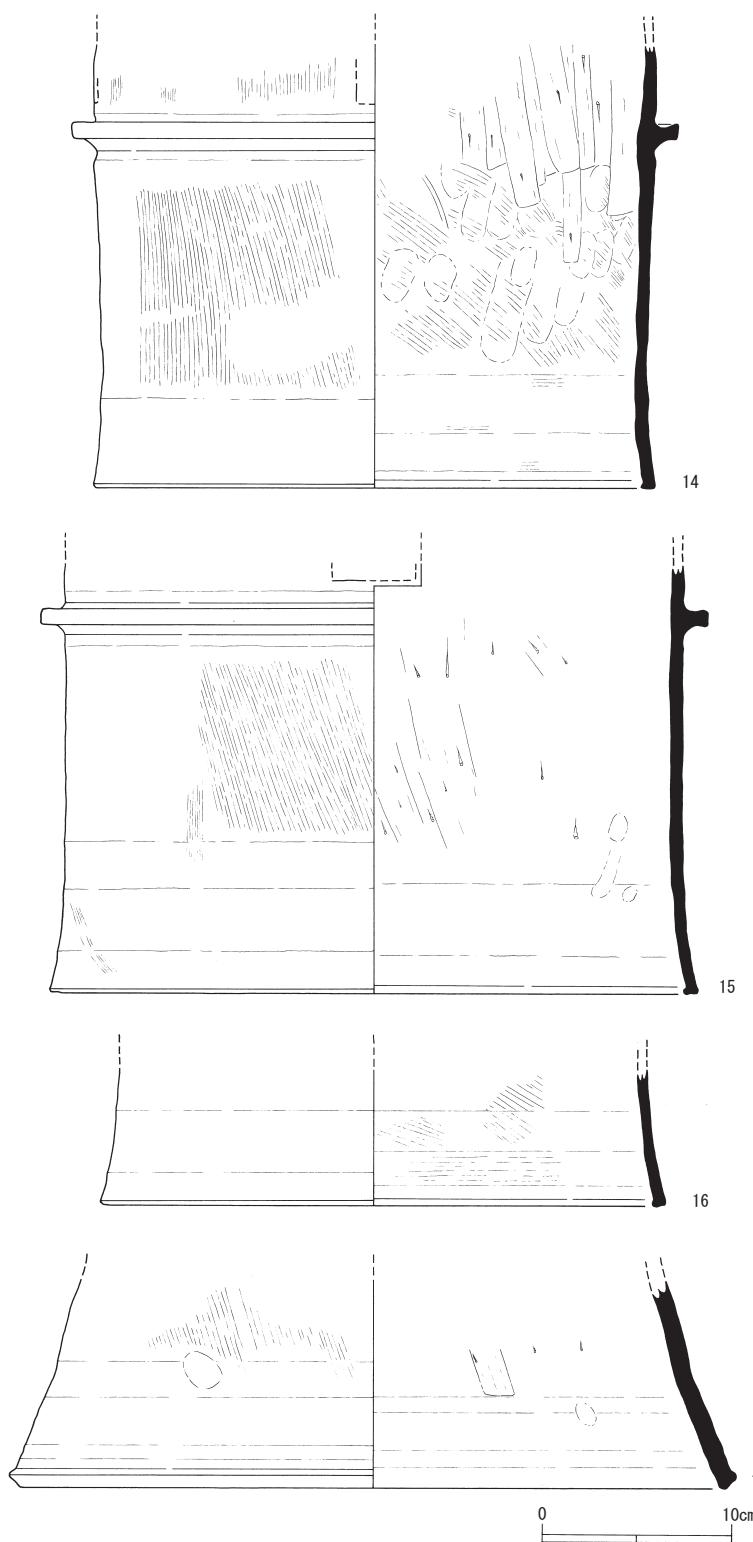


図5 真名井古墳出土埴輪実測図3

0.9cm、器厚0.7~1.0cmをはかる。突帶から約2.5cm上部の3ヶ所に方形スカシが残存しており、形状のわかるものでは高さ8.2cm、幅4.5cmとなる。3つの間隔は不均等で、一段中に4ないしは5方向の穿孔が考えられる。外面調整はやや左側に傾くタテハケの後、端部にヨコナデが施される。内面調整は端部のヨコナデを切るかたちで左から右へむかう横方向のケズリが施されるが、破片上端で右から左へむかう逆方向のケズリがわずかに確認できる。これらの調整から、一度倒立させた後にヨコナデによって端部を整え、ケズリを施し、正置に戻した後に再びケズリを施していたと考えられる。黒斑

様である。底部径31.0cm、残存高7.2cm、器厚4.5~6.0cmをはかる。外面調整はヨコナデのみが確認でき、内面調整は左に傾くナナメハケの上にヨコナデが確認できる。ヨコナデの単位の中には横方向の条線が不明瞭ながら確認できる。14との類似点が多い。

17は他の底部片と比べて裾広がりの程度が極端に強いものであり、端部も外側に突出する点で他と異なっている。底部径は接地面で37.3cm、最も外側の部分で38.5cmをはかり、残存高11.5cm、器厚0.9cmである。外面調整はやや左側に傾くタテハケの後、端部にヨコナデを施す。内面調整は上から下へむかうケズリが施され、端部にはヨコナデが認められるが、その切りあいは判然としない。器形の点では他の底部と大きく異なるものの、15と類似した製作手順が考えられる。外面に黒斑が確認できる。

18はゆるやかな裾広がりを呈する破片で、「前方部1」と書かれた紙片を伴うことから、前方部で検出された2本の樹立埴輪のどちらかにあたると考えられる。突帶は上部が若干突出する方形を呈し、底端部はやや内側につまみ出されるものの他の破片ほど明瞭なものではない。底部径39.8cm、残存高26.2cm、底部高14.7cm、突帶高

は対向する位置に確認でき、赤彩は底端部から7.4cm以上に残存するが、端部まで塗られていたかは判然としない。

19は比較的裾広がりの程度が強い破片で、「南中段」と書かれた紙片を伴うことから、後円部南側の1段目テラス面で検出された2本の樹立埴輪のどちらかにあたると考えられる。他と同様に端部を内側につまみ出している。底部径36.7cm、残存高10.6cm、器厚0.6~0.8cmをはかる。外面調整はやや左に傾くタテハケの後、端部にヨコナデが施される。内面調整は端部にヨコナデ、上部に左から右へのケズリが施される。黒斑は対向する位置に確認でき、赤彩は底端部から6.8cm以上に残存するが、端部まで塗られていたかは判然としない。

なおこれら底部の破片は、端部にヨコナデを施すという点から当初口縁部の可能性も想定したが、14・15・18・19に関しては残存率が70%以上と非常に高く、報告書に記載された出土状況も加味して底部であると判断した。しかし、16・17に関してはそれらに比べると残存率が悪く判断が難しいが、ここでは積極的に口縁部とする根拠も乏しいことから底部に一括して記述をおこなった。

既報告資料の特徴 既に報告されていて今回実物を確認することのできなかった資料に関して、上記で述べた以外の特徴をもつものに絞って最後に述べておきたい。

報告書に掲載されている資料には肩部突帯をもつ朝顔形円筒埴輪の破片があり、その下段突帯のさらに下部には斜め方向の線刻が存在している（北野1964）。これは「く」字状線刻になる可能性もあるが判然としない。河内論文の図84-1はこれと同一個体の可能性もあるが、こちらには線刻が表現されておらず別個体の可能性も考えられる（河内2002）。

また、報告書では形象埴輪とする破片が報告されている。鋸歯文が施された破片は草摺形埴輪の可能性が示唆されているが、今回報告した資料の中にもやや異なるが類似した線刻が認められるため（図4-8）、直ちに形象埴輪と考えることはできない。厚手の板状品とされているものは家形埴輪や盾形埴輪の可能性も考えられるが、実物を確認していない現状で判断することは難しいため、それらが形象埴輪であるのかを含め有無の判断は保留しておきたい。

3 真名井古墳出土埴輪の編年的位置

上では個別の破片ごとにその特徴を記述したが、改めてその要点をまとめ、真名井古墳出土埴輪の

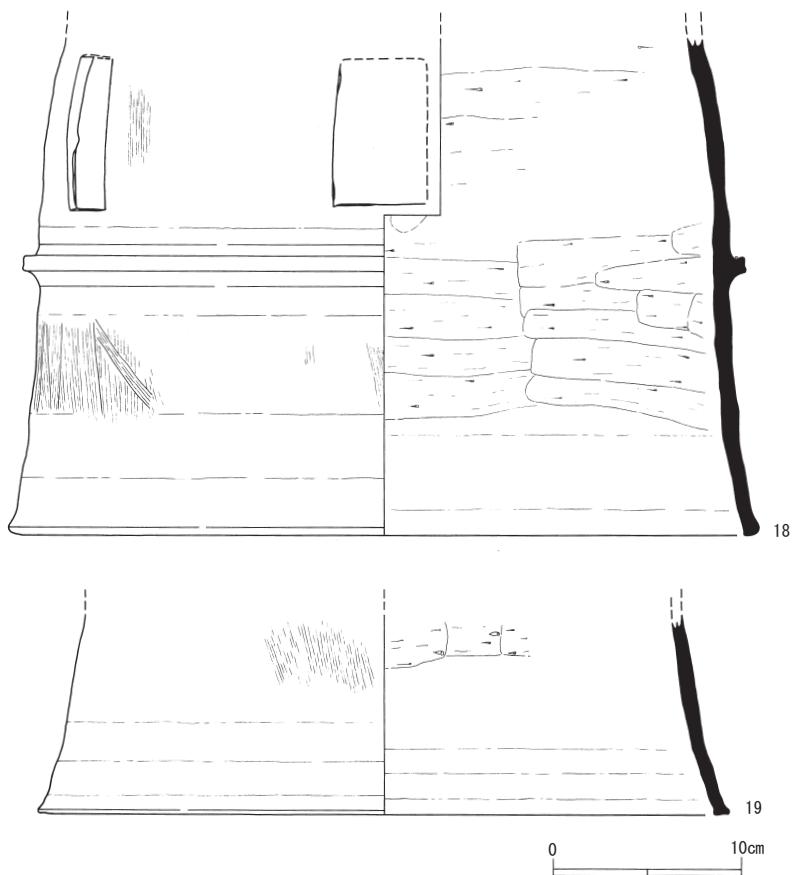


図6 真名井古墳出土埴輪実測図4

編年の位置について検討をおこないたい。

特徴の整理 器種構成に関しては資料が少ないため明確でないが、普通円筒埴輪と朝顔形円筒埴輪の両者が存在していたと考えられ、朝顔形円筒埴輪には特殊壺形埴輪を想起させる肩部突帯のつく資料が存在し、「く」字状線刻が刻まれていた可能性がある。

円筒部の段構成についてはわからないが、方形スカシが一段に4・5方向穿孔されていたと考えられ、蕨手文との関係が考えられる線刻をもつ巴形スカシも存在する。突帯は比較的突出が強い断面方形のものが主体を占め、器壁の厚さは1.0cm以下のものばかりで全体として薄く仕上げられている。突帯の剥離した資料はわずかであるが、今のところ突帯間隔設定技法は確認できない。

底部は直立のものと裾広がりのものの2種があり、直立のものは底部高が19.0～20.0cm前後であるのに対し、裾広がりのものは15.0cm弱と明確な違いを有する。製作技法は上記のように大きく分けて内面にタテケズリを施すものとヨコケズリを施すものの2種があるが、前者はその製作手順で細分が可能である。現状で確認できる底部は全て調整の過程で倒立させている点が特徴として挙げられるだろう。しかし、底部形態と製作技法が厳密に対応するわけではない。

調整は外面がタテハケ調整で、内面はハケ・ナデ・ケズリといった多様な調整がなされる。赤彩の残る資料もあり、黒斑が認められることから野焼き焼成であったと考えられる。

編年の位置づけの検討 古墳時代前期の円筒埴輪編年は都出比呂志や川西宏幸の研究以来（近藤・都出1971、川西1978）、近年も様々な研究者によってなされている（坂2007、鐘方2001・2003、加藤2000、廣瀬2010など）。それらの研究は円筒埴輪を口縁部形状や鰐の有無などから型式分類し、特殊器台等も含めた器種構成の変化と各部位の形状変化によって編年をおこなうという点で方法としては大方共通している。しかし、個々の型式分類の内容や編年案をみいくと細かな違いが認められ、その歴史的評価に関しても意見の一致しないところが少なからず存在している。

本来はそれら研究史を吟味した上で自らの編年案を示すべきところであるが、検討できていない問題が多く残っているため別の機会に論ずることとし、ここでは便宜的に廣瀬覚による編年に照らし合わせていくかたちで真名井古墳の位置づけを考えることとしたい。

廣瀬は前期の円筒埴輪を一段中のスカシ孔配置方式で、3孔以上となるI群と2孔が段間で縦列配置となるII群に分けた。そして、奈良盆地東南部で近年蓄積されてきた古式の鰐付円筒埴輪の型式変化を軸に、それらがI群の新相からII群へと型式的な重なりをもちつつ変化していくと考えた。そうすると、真名井古墳出土埴輪は確認できるスカシ孔の穿孔数が一段中に4ないしは5孔であるため、廣瀬の分類におけるI群の範疇で捉えることができる。

廣瀬によると、I群の埴輪が存在する時期は器種構成や各種要素から3つの段階に分けることが可能であり、それは次のように区分されている。

I期古相・・・最古段階の円筒埴輪出現、宮山型・都月型が残存。

I期中相・・・I群円筒埴輪の単独期、古式の鰐付円筒埴輪出現。

I期新相・・・極狭口縁、楕円筒埴輪の盛行。初源的な器財埴輪あり（盾等）。

このような区分指標をもとに真名井古墳の諸要素をみいくと、極狭口縁や楕円筒埴輪は現状で認められず、巴形スカシに伴う蕨手文状の線刻や特殊壺形埴輪の影響と考えられる肩部突帯の存在は古い要素と考えることができる。しかし、それらの破片はごくわずかしか存在せず、それだけをもって真名井古墳の埴輪を古く考えることはできない。特に真名井古墳には朝顔形円筒埴輪と考えられる資料が存在するが、廣瀬がI期古相として挙げる奈良盆地の中山大塚古墳と西殿塚古墳では今のところ朝顔形円筒埴輪と考えられる資料は確認できていない。奈良盆地における確実な朝顔形円筒埴輪の初

例はⅠ期中相の東殿塚古墳であり、古墳時代前期の埴輪の展開を奈良盆地の勢力が主導していたという立場に立つならば、真名井古墳の埴輪は東殿塚古墳と同時期かより後出すると考えるほうが整合的である。加えて、先に古い要素とした2つの特徴は東殿塚古墳の朝顔形円筒埴輪にも認められ、Ⅰ期中相まで残存していることは確実である。内面ケズリを多用して薄く仕上げる点もこの段階であれば一般的に認められる。

以上の点から判断すると、真名井古墳出土埴輪は廣瀬の編年におけるⅠ期中相に位置づけることが妥当と考える。廣瀬は京都府寺戸大塚古墳における埴輪と副葬品の共伴から、Ⅰ期中相が古墳時代前期を4期に区分する古墳編年の2期にあたると考えている（廣瀬2009）、真名井古墳から出土している三角縁獸文帶三神三獸鏡は福永伸哉による編年の舶載D段階に位置づけられ（福永1996b）、仿製三角縁神獸鏡の出現を3期に考える近年の副葬品の位置づけとも矛盾しない（福永1996a、森下2005）。

波及する問題 真名井古墳出土埴輪をこのように位置づけた際に波及する問題は多くあるであろうが、ここでは埴輪に関するこことを1点だけ述べておきたい。それは従来比較対象として取り上げられることの多かった、墳長約65mの前方後円墳である玉手山9号墳出土埴輪との関係である。玉手山古墳群の埴輪の変遷に関しては既に多くの研究がある（鐘方2001・2003、河内2001、安村2001・2003b）、それらの中で玉手山9号墳の埴輪は古墳群中最古の埴輪に位置づけられている。研究者によって用いる属性が若干異なるが、主に器壁の薄さ、突帶の低さ、ケズリ調整の多用、都月型線刻の存在といった要素から最古に位置づけており、鐘方正樹や安村俊史は埴輪検討会が作成した共通編年のⅠ期2段階と考えている。Ⅰ期2段階の指標となる奈良盆地の古墳は西殿塚古墳が挙げられており、廣瀬の編年に置き換えるならばⅠ期古相ということになるだろう。

筆者は河内や安村と同様に肩部突帶の存在や線刻、器形の類似から、真名井古墳の埴輪と玉手山9号墳の埴輪をほぼ同段階と考えるが⁽³⁾、それをⅠ期古相とみるか中相とみるかは大きな問題である。

安村は、玉手山9号墳に後出する玉手山3号墳が奈良盆地の東殿塚古墳に類似する特徴をもつことから、玉手山9号墳をその前段階の西殿塚古墳と同時期に考える。しかし両墳の埴輪に順調な型式変化をたどることができず、真名井古墳と玉手山9号墳が共有する器形の特徴も上述のように東殿塚古墳に確認できるため、敢えて玉手山9号墳を玉手山3号墳の前段階に位置づけるのではなく、安村自身も留意しているように（安村2005）、同段階のⅠ期中相と考えることも十分可能である⁽⁴⁾。

また、鐘方は玉手山9号墳を古くする根拠として、朝顔形円筒埴輪の存在が明確でない点や肩部突帶などの特殊壺的特徴が認められる点を挙げている。確かに後者の特徴は真名井古墳のものに比べより古いようにも感じられるが、玉手山9号墳と同様の「く」字状線刻が東殿塚古墳においても認められることから（加藤2001）、前段階にまで古くする根拠には適さないと考える。それでは前者の朝顔形円筒埴輪の有無という点であるが、玉手山9号墳でも真名井古墳と同様に確実な壺形埴輪の底部片は確認できず、肩部より上の資料しか存在しない。そしてその中には頸部突帶をもつ破片が存在するが、確実な特殊壺形埴輪で頸部突帶をもつ例が今のところ確認できないことから、玉手山9号墳出土の資料は特殊壺形埴輪の要素をもつ朝顔形円筒埴輪となる可能性が指摘できる。このような可能性を考慮に入れるならば、鐘方自身が朝顔形円筒埴輪の出現時期とした東殿塚古墳を代表とするⅠ期3段階、廣瀬の編年におけるⅠ期中相に玉手山9号墳を位置づけることも可能ではないだろうか。

やや煩雑な説明となってしまったが、従来古く位置づけられていた玉手山9号墳の埴輪が真名井古墳と同じⅠ期中相に位置づけられる可能性を指摘した。つまり、真名井古墳・玉手山9号墳・東殿塚古墳の埴輪は構成する諸要素において緊密な関係をもっており、比較的近接した時期に生産されたと考えられるのである。ただし、今回挙げた要素は器形の特徴や線刻といった外的な要素のみである

点が問題であり、製作技術といった部分から再度それらの埴輪の関係を考えていく必要があるだろう。

むすびにかえて

本論では今まで断片的な情報しか知られていなかった真名井古墳出土埴輪を資料化し、その特徴をまとめた上で編年的位置について検討した。その結果、廣瀬覚による円筒埴輪編年のⅠ期中相に位置づけられ、副葬品などから考えられる古墳編年とも齟齬なく理解できることがわかった。つまり、前期を4つに区分した際の2つ目の段階に真名井古墳を位置づけられる蓋然性が以前にも増して高くなったのである。これは、かねてから副葬品編年との整合性が議論されてきた古墳時代前期の埴輪編年において1つの定点となりえるものであり、その意義は大きいと考える。

また詳述できなかつたが、真名井古墳をこのように位置づけることで粘土櫛の出現が従来の認識より遡るという指摘の妥当性も高くなつた（安村2003aなど）。ただし真名井古墳の粘土櫛は他に類例のないものであり、その位置づけは事例の増加を待つて今後も検討する必要がある。それに関連して、本科研で発掘調査をおこなつた兵庫県長尾山古墳においても、真名井古墳と同時期の可能性がある円筒埴輪とともに粘土櫛が検出された。その粘土櫛も重厚かつきわめて丁寧なつくりのもので、前期後半に普及する粘土櫛とは一線を画する様相をもつ。厳密な位置づけは正式な報告を待たなければならぬが、初現的な粘土櫛がこの段階に成立する蓋然性は十分に認められるであろう。

そして、南河内を代表する前期古墳群である玉手山古墳群において最古に位置づけられる玉手山9号墳の埴輪が、真名井古墳の埴輪と類似することから同じⅠ期中相と考えるならば、石川を挟んだ両岸に同規模の前方後円墳が時を同じくして築造されたということになり、石川流域における首長層のありかたを考える上で大きな問題となろう。これは、玉手山9号墳とほぼ同時期かやや後出する墳長100m前後の前方後円墳である玉手山3号墳との関係のみに留まらず、玉手山古墳群全体の首長系譜の展開過程や古市古墳群の成立背景といった点にも少なからず関連する問題である。今回議論の俎上に上げることの出来なかつた周辺その他の前期古墳も踏まえた上で改めて論じることとしたい。

本論は真名井古墳出土埴輪再整理作業の中間報告である。本来は整理が完了した時点で発表すべきであるが、資料の重要性に鑑み、現状で資料化できたものを公表することとした。今後の整理を通して課題となつた点を更に検討していきたい。実測図の作成にあたつては上地舞、北原梨江、佐伯郁乃、城内龍一、橘泉、辻奈緒、藤城光の諸氏から御助力を賜つた。末筆ながら記して御礼申し上げる。

註

- (1) 報告中では1.0mと述べられているが（北野1964）、提示されている図面を計測すると明らかに2.0mである。写真図版などをみても1.0mとは考えにくいことから、ここでは図面から計測した数値を用いる。
- (2) 胴部から連続する資料がないため、壺形埴輪の可能性も考えられるが、図化していない埴輪片の中に壺形埴輪と考えられる体部や底部が存在しないことから、朝顔形円筒埴輪である可能性が高いと考える。
- (3) 鐘方は肩部突帯をもつ朝顔形円筒埴輪の突帯間に「く」字状線刻がなく、全体的に丸みがなくなっていることから、真名井古墳を玉手山9号墳に後出するⅠ期3段階と考えている（鐘方2005）。しかし検討中ではあるものの、真名井古墳と玉手山9号墳の埴輪は製作技術の点でも関連性が想定でき、別段階に位置づけうる積極的な根拠にはならないと考える。
- (4) 加藤一郎は玉手山3号墳が玉手山9号墳に先行する可能性を示唆している（加藤2001）。

参考文献

- 石部正志1980『大阪の古墳』松籟社
- 大阪大学考古学研究室1989「41. 真名井古墳」『古墳時代前半期の古墳出土土器の検討』第III分冊 近畿篇
第25回埋蔵文化財研究集会実行委員会
- 加藤一郎2000「前期古墳の円筒埴輪」『潮航』第18号 早稲田大学大学院文学研究科考古談話会
- 加藤一郎2001「埴輪の拡散」『玉手山古墳群の研究Ⅰ』柏原市教育委員会
- 鐘方正樹2001「古墳時代前期の円筒埴輪編年と玉手山古墳群」『玉手山古墳群の研究Ⅰ』柏原市教育委員会
- 鐘方正樹2003「古墳時代前期における円筒埴輪の研究動向と編年」『埴輪論叢』第4号 墓輪検討会
- 鐘方正樹2005「玉手山古墳群の研究成果と諸問題」『玉手山古墳群の研究Ⅴ』柏原市教育委員会
- 河内一浩2001「玉手山古墳群の埴輪Ⅰ」『玉手山古墳群の研究Ⅰ』柏原市教育委員会
- 河内一浩2002「玉手山古墳群の埴輪Ⅱ」『玉手山古墳群の研究Ⅱ』柏原市教育委員会
- 川西宏幸1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 北野耕平1964「富田林真名井古墳」『河内における古墳の調査』臨川書店
- 近藤喬一・都出比呂志1971「京都向日丘陵の前期古墳の調査」『史林』第54巻第6号 史学研究会
- 白石太一郎1969「畿内における大型古墳群の消長」『考古学研究』第16巻第1号 考古学研究会
- 白石太一郎1984「日本古墳文化論」『講座日本歴史』第1巻 原始・古代1 東京大学出版会
- 坂 靖2007「大和の円筒埴輪」『古代学研究』第178号 古代学研究会
- 廣瀬 覚2009「前期古墳の埴輪」『前期古墳の変化と画期』関西例会160回シンポジウム発表要旨集 考古学研究会関西例会
- 廣瀬 覚2010「近畿における前期古墳の埴輪」『円筒埴輪の導入とその画期』中国四国前方後円墳研究会第13回研究会発表要旨集
- 福永伸哉1996a「雪野山古墳と近江の前期古墳」『雪野山古墳の研究』考察篇 八日市市教育委員会
- 福永伸哉1996b「舶載三角縁神獣鏡の製作年代」『待兼山論叢』第30号 大阪大学文学部
- 森下章司2005「前期古墳副葬品の組合せ」『考古学雑誌』第89巻第1号 日本考古学会
- 安村俊史2001「玉手山古墳群出土埴輪について」『玉手山古墳群の研究Ⅰ』柏原市教育委員会
- 安村俊史2003a「埋葬施設からみた玉手山古墳群」『玉手山古墳群の研究Ⅲ』柏原市教育委員会
- 安村俊史2003b「河内における円筒埴輪編年」『埴輪論叢』第4号 墓輪検討会
- 安村俊史2005「玉手山古墳群の実像を求めて」『玉手山古墳群の研究Ⅴ』柏原市教育委員会



18



18

図版1 塗輪（底部） 上、外面 下、内面



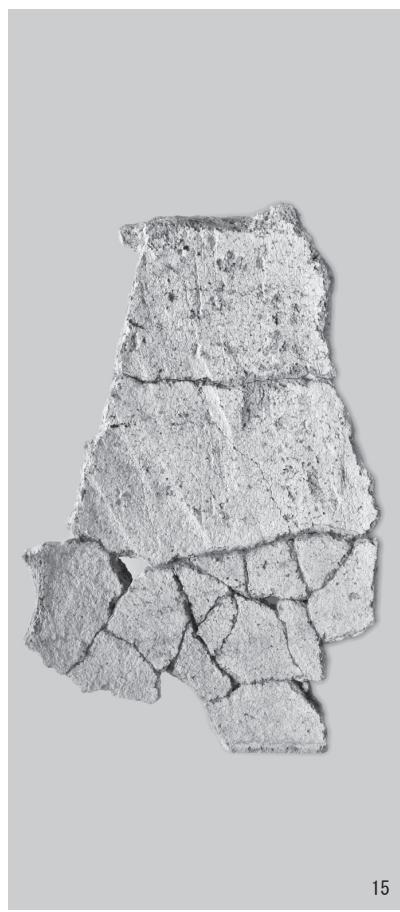
14



15

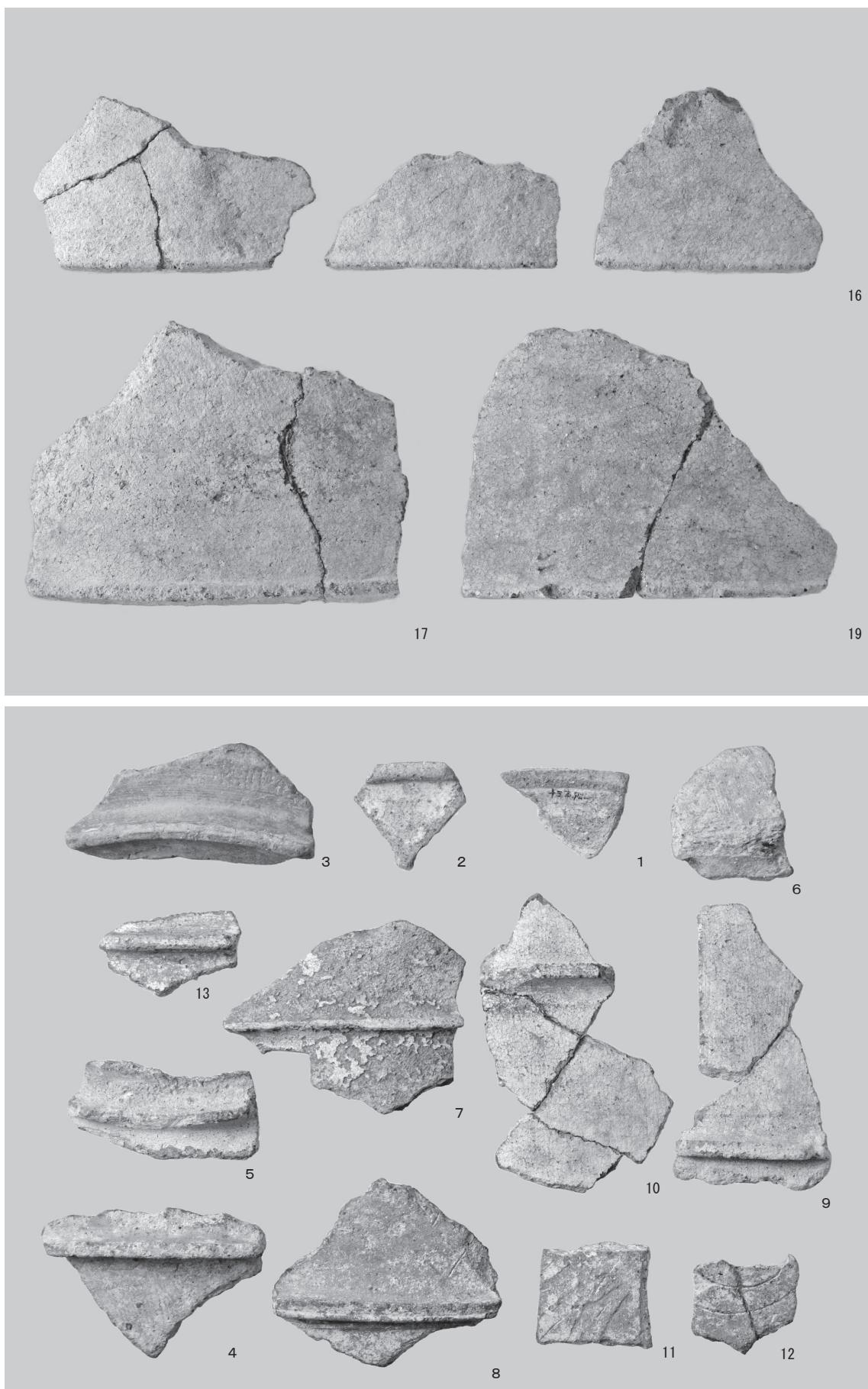


14



15

図版2 塗輪（底部） 上. 外面 下. 内面



図版3 上. 塗輪（底部） 下. 塗輪（口縁部・頸部・肩部・胴部）

8. 研究総括と展望

本研究の中心的な目的は、古墳時代研究の重要な論点の一つとなってきた「政権交替論」の研究史を踏まえた上で、おもに1990年代以降の新出資料の分析と効果的なフィールドワークを整合的に結合させることによって、考古学の方法によって政治変動期に焦点をあてた最新の古墳時代政治史を提示することであった。

研究のスタイルとしては、(1)参加メンバーが全体計画の中で役割分担に基づいて行うテーマ研究、(2)首長系譜分析について新たな地域事例を提示するためのフィールド調査、(3)それらの成果を討議する研究集会という3つの柱を立てて作業を行った。

具体的な成果は、本書に収載した論考および本書第1章に示した論文・図書・口頭発表などである。

本書福永論文「古墳時代政権交替と畿内の地域関係」は、弥生終末期から古墳後期まで、中央性を持つ政治権力が畿内地域に一貫して存在したが、その内部では主導権の数度の移動が認められ、これが古墳時代政権交替と呼ぶべき政治変動の実態であったことを、考古学の情報を用いて論述した。そして、大和盆地と河内平野という2つの地域集団の対抗関係が古墳時代政治史の底流に存在したのではないかという仮説を提示した。

寺前論文「猪名川流域における前期古墳の動向」では、本科研の中心的なフィールド調査として実施した宝塚市長尾山古墳の調査成果を近隣の前期諸古墳と比較して検討し、猪名川流域では古墳時代前II期から前III期初めまでに首長墳が出現する小地域と、前III期から前IV期に遅れて現れる小地域があり、中期に優勢となるのは後者の地域であるという指摘を行った。このことは、猪名川流域内の地域盟主権の流動化が前期後半には始まった可能性を指摘するもので、興味深い分析といえよう。

清家論文「首長系譜変動の諸画期と南四国の古墳」は、高知県域を中心とする古墳の動向を通時的に整理し、前期後半に西部の幡多地域で首長墳が登場するが、中期前葉には築造が途絶え、新たに高知平野で古墳築造が始まること、後期後半～終末期にかけて高知平野には伏原大塚古墳、小蓮古墳、朝倉古墳という盟主的首長墳が小地域を移動しながら継起的に築造されることを指摘した。そうした推移の諸局面には、地域内の事情、瀬戸内地域からの影響関係、畿内地域からの直接、間接の影響といった異なる要因が存在するという見通しを示し、地域古墳分析の複眼的思考の重要性を提起した。

高橋論文「古墳時代政権交替論をめぐる二、三の論点－河内政権論を中心に－」は、この問題に取り組んできた文献史研究者の研究展開やそれぞれの所論の特徴を詳細に検討し、考古学的アプローチともかかわる墳墓や宮の扱いなども含めて、文献史、考古学双方の議論の不確かな点や分析を集中すべき点を提言した。さらに、河内政権論とかかわる時期については、応神以降の王権基盤の所在地、王統の断絶の有無、応神前後での王権や政権構造の変化の有無の検討が重要であるとの認識に立って、自身の理解を提示している。

伊藤論文「古市古墳群の形成と居住域の展開」は、地元で長年にわたって文化財調査にかかわってきた強みを生かして、域内の集落遺跡の動向を悉皆的に整理分析した労作である。その結果、古市古墳群域内では、現時点での調査状況によると大半が竪穴住居からなる小規模な集落遺跡であり、集団の居住という点では貧弱な様相を呈するいっぽうで、北接する大和川下流域には、かなりの居住人口が推定され、とくに大阪市長原遺跡のように古市古墳群の盛衰と集落の盛衰が同一歩調をとるような大集落が存在することを指摘し、後者の大和川下流域集団を古市古墳群造営基盤と考えれば合理的であるという見通しを示した。

金澤論文「富田林市真名井古墳出土埴輪の特徴と編年の位置」は、1961年に宅地開発をきっかけに緊急的な調査が行われた真名井古墳出土資料のうち、これまで十分実態の知られていなかった円筒埴輪類についてはじめて本格的な分析を行ったものである。形態、整形技法、透孔などの特徴を検討し、柏原市玉手山9号墳とほぼ同時期のものと位置づけ、古墳の年代を前期前半（2期）におく見解を示した。中・南河内の前方後円墳出現時期を円筒埴輪から位置づけた作業は、古市古墳群前夜の当地域の有力者の動向を考察する上で重要な成果を提供したといえよう。

以上に概述したテーマ研究の成果は、必ずしもすべてが一つの整合的な像を結ぶとはいえないが、古墳時代350年間の間にも、地域内で、また地域間でさまざまな考古資料上の変動期があることを示している。前方後円墳という同形の首長墳が継続して造られているから中央政治権力の所在や政権構造に大きな変化はなかったというような、ややもすれば単純化の過ぎるとらえ方は、資料的にはそぐわなくなりつつあるのではなかろうか。

つぎに、本研究の第2の柱であったフィールド調査においては、宝塚市長尾山古墳の発掘調査を実施し、調査前には前期末の前方後方墳と考えられていたこの古墳が、前期前半の前方後円墳であるという新たな位置づけを得た。これにより、猪名川流域の前期末以前と前期末以降では盟主的首長墳のあり方にきわめて大きな変化が生じていたことが明らかになり、2004年まで大阪大学考古学研究室と川西市教育委員会が共同で行った6世紀前葉の川西市勝福寺古墳の調査成果を加えれば、猪名川流域の前期から後期までの首長系譜の変動がほぼ通時的にとらえられるようになった。古墳時代政権交替論は、畿内と各地域の双方の古墳動向を総合的に検討することが有効であり、猪名川流域はこうした検討に耐える事例として今後取り扱えることになる。さらに、あわせて行った宝塚市万籾山古墳の採集埴輪の整理分析も、猪名川流域の事例研究に重要な情報を提供したといえる。

このほか、国内外の墳墓遺跡の踏査も行った。韓国では、三国時代の百濟、加耶の墳墓遺跡を踏査し、有力墳墓の存否と地域勢力の盛衰が対応する事例が多いことを確認した。その動きの一部は列島の古墳時代政治史と連動する可能性もあり、今後の日韓共同研究の進展が期待される。たほう、ブリテン島の墳墓遺跡踏査では、墳墓築造と社会の複雑化を関連づける研究は活発であるが、墳墓要素から地域間の政治関係を考古学的に復元するアプローチは、必ずしも主要な研究関心とはなっていないように思われた。遺物や遺構の型式学より、社会構造の分析に重点がおかれる研究風土の違いであろうか。その意味では、古墳時代研究の成果を英語で世界に広く発信する研究を進めることができ、国際的には意味のあることと考えられ、今後のわれわれのプロジェクト策定に生かしてゆくべき課題と認識した。

第3の柱であった研究集会は、3年間で12回開催した。このうち、2009年2月に禹在柄氏（忠南대학교考古学科）「韓国忠南地域の近年の発掘調査について」、2009年8月にロラン・ネスプルス氏（フランス国立東洋言語文明学院）「ヨーロッパの国家形成期の遺跡調査と理論研究」、2010年2月に朴天秀氏（慶北대학교考古人類学科）「新羅と倭—古代韓日交渉史研究の新たな展望ー」、2010年7月にジナ・バーンズ氏（ロンドン大学）"What happened after the demise of the Early Kofun ritual system?"という内容の海外招聘報告の機会を設け、国際的視点から日本古墳時代史研究にも関連する報告と関連討論を行った。国際的な比較研究への展望を得ることも、副次的ではあるが本研究プロジェクトのねらいであった。この点は期間内に総括的な成果を得るまでには至らなかったが、研究集会で意見交換を行う中で、古墳時代研究の国際化が今後有効かつ必要な研究分野であることを認識できた。次なるプロジェクトとして構想している「墳墓と社会関係の国際比較研究」の中で、それが実現できるように準備を行っていきたい。

（福永伸哉）